
あの日のあたる場所で

玲音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あの日のあたる場所で

【Nコード】

N4170D

【作者名】

玲音

【あらすじ】

不思議な力が与えられたわけでもない。凄い才能があるわけでもない。普通の高校生が、いろんな事にもがき、悩む、そんな日常生活を描いた作品。また、あの日のあたる場所で会おう。そう、僕たちは約束した。

P・1 僕

僕の名前は、ないとうかえで内藤楓。高校1年生という、微妙なお年頃。

高校は、志望校があったわけでもなく、ただ、なんとなく受験し、入学をした。

高校での僕の活躍振りはというと、マジと書いて本当に普通の学校生活だった。

勉強もそれほどできるわけではないが、赤点はとらない程度の学力はあったし、

高校3年間で何かやっておこうと、テニス部にも入った。

もともと、中学から軟式テニスをしていたので、すんなり部の雰囲気慣れることができた。

そこで、同じクラスの男子が入部していることを知り、部活を通して、友とよべる仲間もつくることができた。

授業中は部活の疲れからか、居眠りすることもあるし、休み時間では、仲の良い友とお喋りをしたり、部活では、ダブルスの試合で、やるかやられるかの熱い試合なんかもしていた。

そんな、平凡な毎日が当たり前かのように過ぎることに僕は、複雑な想いを抱え始めていた。

僕の人生は、未来はどうなっていくのだろうか。期待や希望に満ちた感情ではなく、不安で恐くて……

今にでも逃げ出してしまいそうになるぐらい、本当に、どうなってしまうのかと考えることも、ここ最近、多いような気がする。他の人から見れば、僕の今の生活は充実しているように思えるだろう。部活も、勉強やプライベートも。

でも、僕自身は、なぜかこんなに充実している毎日なのに、何かしていないこと、できていないことがあるのではないかという、複雑な感情がいつも、どこかにあるのだ。

時間よ止まってくれ。と思っても、時間は止まってはくれない。そう、時間は刻々と過ぎ、そうやって人間は平等に老いていくのだ。今日も、時間は動き続け、そして、僕は今日も、走り続ける。

「って、おい、楓！何、ぼーっとしてんだよ！」

ふと、みやもと じん宮本仁の声に異世界から現世へと連れ戻される。

「えっ？」

仁は、僕の気迫のない態度に呆れた顔をした。

「何が、『えっ？』だ。あと、5周！気合い入れて走るぞ。」

仁はそう言うと、楓の背中を少々強めに叩き、走るスピードを速め

た。

宮本 仁……。僕と同じクラスで、部活で知り合った仲間の一人だ。勉強は全然できないものの、かなりの運動神経の良さであり、その運動神経、ルックスから、女子生徒にはかなりの人気者である。

ただ、仁は、俺に近寄るなオーラを出している（本人曰く）らしく、実際に告白されたことは、あまりないらしい。

僕は、その話を聞かされたとき、こいつには負けたくない。という、闘争心が不覚にも沸いてしまった。

仁は、僕のことをライバルと思っているのかどうか分からないが、無論、僕は、ライバルだと思っている。

部活の朝練、最後のメニューは、決まって高校の校舎周りを10周する。というものであった。

今日も、その走り込みをしている最中なのだが、どうにも今日は、考え込んでしまう日らしい。

それでも、仁の気合い注入のおかげで、僕は正気を取り戻し、やったのことで、走り込みを終わらせることができた。ありがとう、仁。

1時間目が終わり、休み時間のチャイムが鳴り響く。

「ふあゝあ。よく寝たつと。」

隣の席で、そう言ったのは、仁だ。半年に何度か、席替えというも

のがあるらしいのだが、なぜか毎回僕の隣は仁であった。今回の席替えでも、当たり前かのように隣の席には仁がいた。ただ……

席は、一番右端の後ろの席であったので、かなりの特等席であった。一番右端の後ろの席は、クラスの誰もが狙っている席で、遅刻をしても何気ない顔で席につけるし、帰りも一番早く帰れる。

授業中に寝ていても先生にあまり気づかれることはなく、快適な睡眠を保証してくれるのだ。

「てか、寝るなよ。」

「楓、お前は何か勘違いをしている」

仁は急に真剣な顔をしながら話してきた。

「勘違い？」

「授業の目的だよ」

「授業の目的だなんて、将来のためだろ？ 大学や就職するときに、成績は大きく関わってくるだろうし。」

僕は、なぜか滅多に言わない、凄く一般論を口に出していた。僕がそんな一般論を話していると、仁は違う違うと言わんばかりの表情を見せた。

「良いか、楓。授業の目的は適度な睡眠をとること。だ。」

「ちよい待て。それは目的じゃねえだろ。」

僕は、真面目な顔をしながらそんなことを言う仁がとても滑稽に見え、ついつい笑ってしまった。

「いいや。睡眠をとるってことはだ。部活で使う体力をしつかりととり、そして、放課後の練習で最高のパフォーマンスを出すことができる。」

「はあ……」

「今日だって、放課後の練習試合で1・2ことのダブルスの練習試合があるんだぜ？そのためにはよく寝て、体力を温存しておくよ。」

それと、これとは話が別なような気がした。

でも、それを仁に言うのはナンセンスな話だ。仁は、スポーツが生き甲斐と言うほど、スポーツに対する情熱は人一倍なのだから。

もし、ここで話は別だろと言えば、仁の熱いトークが待ち受けていることも十分承知であった。

「楓〜！仁〜！金がなくて飯買えないよ〜！！」

意味不明だった。

そんな意味不明なことを言いながら、僕と仁の方に小走りしてきた奴こそ、秋山翔太あきやましょうたに間違いはなかった。

いつもハイテンションで、いつでもどこでもハイスピードトークを

展開する。まあ、クラスに一人は必ずいるウザイ奴だ。

背が低いので、さらにむかつき度が増すというか……

翔太との出会いは、同じ部活で知り合ったわけではなかった。

きっかけは、数ヶ月前。翔太がゲーセンで一人で熱くなって遊んでいた時、不良数人に絡まれた。

背が低くて弱そうなのに、なぜか一人でゲーセンに行っていたのも疑問であったが、かなりの絶体絶命状態であった。

それを偶然発見したのが僕と仁で。もちろん、不良たちをボコボコにしたのは仁だったのだが、それがきっかけで、翔太は僕たちに絡む……もとい、仲間となったのだった。

ウザイ奴とは言っても、何気にムードメーカー的な存在があり、そんな存在が少々羨ましかったりもした。

「金がなくて買えないのは当たり前だろ」

僕が的確なツツコミを入れてみせる。

「あーあ！楓にはがっかりだ、がっかりだよ！」

翔太は、頭を抱えながらその声を張り上げた。

「がっかりって……。仁、なんとかしてやれよ。」

僕が、何気なく、仁に話を振った。

仁は、白目を向いていた。

「お、おい、仁！人の顔をしっかりと見るよ！友達が、飢え死にするかもしれないってのに！」

「なら飢え死にしろ！」

僕と仁は、ほぼ同じタイミングで同じ言葉を発していた。そのやりとりが、馬鹿馬鹿しく、でもとてもおもしろかった。

と、授業の開始のチャイムが鳴り響いた。

次の授業は国語。僕の一番苦手分野だった。

どうにも、国語の授業は眠くなってしまふのだ。他の授業も、もちろん眠くなってしまふことはあるのだが、国語は他の授業よりも半端ない。

古典含め、語学がどうにもできないらしい。

国語の先生は、チャイムが鳴り終わると同時に、教室に入り、何事もなく授業を始めた。

「おい、内藤。この文、訳してみる」

「分かりませーん」

こうして、今日も一日はあっという間に流れ、すでに放課後の部活の時間となっていた。

僕と仁は、テニスウェアに着替え、放課後に行われる練習試合のために、作戦を練ろうと、部室で三二作戦会議を開いた。

練習試合とはいえ、今回の対戦相手は、1-Cの七原、小早川コンビである。1-Cとは、勉強やスポーツなど、色々なところで敵対することが多かった。僕と仁は1-Aなのだが、1-Aはいたって普通のクラスであるのに対し、1-Cは人を見下す奴や、人生楽ばかりしてここまでできた奴など、ほんつとにむかつく奴の多いクラスなのだ。1-Bや1-Dは、1-Cの事はもうすでに無視の状態であるが、1-Aだけは、なぜか敵対心むき出しなのだ。ちなみに、僕も、1-Cはどうしても好きになれない。

もちろん、テニスでも1-Cと1-Aは敵対しているというのは言うまでもないだろう。

さて、今回、なぜ練習試合が行われたのかというと、率直に言ってしまうば、顧問の勝手な興味心なのだ。

職員室で、1-Aと1-Cの仲が悪いという話を聞いた顧問の、小^{こは}林和宏は、これはおもしろいことになりそうだと、

部活の練習中に、1-Aの僕と仁。1-Cの七原と小早川を呼び出し、練習試合をすると話してきた。

もちろん、負けたチームは、その練習試合の次の日、走り込みをプラス5周追加という罰ゲーム付きで。

最初は、顧問の身勝手な思いつきに嫌がっていた僕と仁であったが、1-Cの挑発に見事に乗った仁のせいにより、急遽練習試合をすることになったのだ。

そして、ついに練習試合が行われた。

「悪いけど、1 - Aには手加減しないんで。」

と言いつち、ラケットを僕たちの方に向け、嫌な笑みを浮かべる奴こそ、僕たちがテニス部の中で唯一敵対心を持つ、1 - Cのこはやか小早川わあきと昭人であった。

「昭人くん。落ち着いていこうね。」

その後ろでは、同じ1 - Cのななはらだいき七原大輝が、穏やかな笑みを浮かべ、昭人に話しかけていた。

この七原大輝が、強者である。
小学校から、テニススクールに通い、親のスパルタ教育を受け、育つたという。高校で行われるシングルスのテニス大会でも、毎回上位に位置するほどの有望株なのだ。
性格は穏やかであるが、何か裏がありそうな雰囲気が七原の特長だ。

「てめえら、余裕じゃねえの。こちとら、負ける気、全然ないんで。」

と、食ってかかるのが、仁であった。

仁は、スポーツのこと、特に勝負事になると、熱くなる性格なのだ。

「あれ、楓くんは、やる気がないのかな。」

「え?」

七原が急に話しかけてきたので、僕は少々驚きながら、答えた。

「仕方ねえさ。俺たちに勝てる可能性なんて、ゼロなんだし。諦めも肝心だぜ?」

クスクスと、小早川が僕の方を見てそう罵倒する。

「そっくりそのまま返してやるさ!」

僕が言う前に、仁が小早川に言い放った。
そのやりとりを楽しそうに見る、顧問の小林先生。僕が、小林先生を、結構、鬼畜な先生なんだと、そう思うようになったのは、この頃からだろう。

「楓」

「ん?」

「この試合、勝とうぜ。」

仁は、感情的になりながらも、この試合をとて楽しんでるかのようになり、笑みを浮かべ、僕に話しかけた。

僕も、あんなことを言われて、当然、七原と小早川に勝ちたいと思うようになっていた。

「じゃあねえな。なんか奢れよ！」

「カレーで勘弁な。」

テニスコートは一気に緊張感に包まれていた。ギャラリイは、顧問の先生と、1-A、1-B、1-C、1-Dのテニス部員。

2年生や3年生の部員は、他のコートで練習試合や、基礎練習をしていたので、あまりいなかったが、1-Bや1-Dの部員は、食い入るようにこの試合の見物をしに集まっていた。

人数はだいたい、20人程度か。

でも、今はそんなことは関係ない。この試合に勝ちたい。その感情があったからか、緊張感はあまりなかった。

そして、試合は始まったのだった。

試合をして、分かったことがある。それは、七原大輝は、本当に強いということだった。

ボールの読みもそうだし、相手がどう動いて、どう攻めるのかも、

一瞬で見極め、動き、対処する。
力のあるショットを打つわけでもないし、回転がめちやくちやかかったスライスを放つわけでもない。でも、確かに七原は強いのだ。七原の相方、小早川とはいうと、前衛での小技を得意とする。前衛に出た時の小早川の強さといったら、なかなかのものだった。

「あまいぜ!!」

小早川のボレーを仁が俊足を活かし、ボレーで逆に返した。

「何っ!？」

小早川は、まさか、このショットが打ち返されるはずはない。と、信じ込んでいた。そんな小早川に、打ち返せるだけの余裕はなく、球を見ているだけしかできなかった。しかし……

「さすが、宮本くんだね。」

不気味な笑顔をする七原は、いつの間にか、ボールに追いついていた。

「!?!」

意表を付いた仁であったが、逆に意表を付かれる形となっていた。七原は、笑顔から真剣な顔になり、正確なショットを、絶妙なコースにたたき込んだのだ。

後衛にいた僕は、全力で球を追いかけた。僕の足の速さで追いつけそうな球ではなかった。でも、諦めたくはなかった。

結局、追いつくことができず、ポイントは1-Cへ。

「くそ……」

凄く悔しかった。仁が頑張っているのに、何もできないでいる自分が。

端から見れば、ただの練習試合なのかもしれない。でも、この時の僕は、ただの練習試合ではなかった。

勝ちたい。絶対に勝ちたい。

その気持ちだが、徐々に強まっていくのが、自分でも感じる事ができた。

仁と僕は息が上がっていた。

厳しいコースに次々に打ち込まれ、それを追いかけようと全力で走り、結局ポイントは1-Cという、嫌な流れが続いた。

精神的にも、体力的にも、僕は追い込まれていた。

「楓、すまん。」

仁は、何度も僕に謝ってきた。いいや、謝るのは僕の方なのに。

感情的になりすぎた僕は、サーブや、ボレーなどでのケアレスミス
を連発していたのだ。

いくら、仁が上手に球を打ち返しても、感情的になり、ケアレスミ
スを多く出している僕に狙いを定め、打ち返せば、点は1-Cへと
入る確立が高くなる。

そう、判断し、作戦を提案したのも、もちろん七原だろう。

6ゲーム1セットマッチで、先に6ゲーム取った方の勝ちだ。

3-1で、1-Cがリード。

流れは依然として、1-Cが掴んでいた。

試合は終盤に差し掛かろうとしていた。

P・2 一心不乱

「やっぱり、七原のやつ、すげえ強え！」

「さすが、シングルス大会で毎回上位に入ってるだけはあるな。」

「このまま七原、小早川チームが勝つんじゃない？」

ギャラリーから漏れる声は、どれも1-Cが勝利するだろう的な言葉だった。

1-Aの同じクラスの人たちも、どちらかというところ、1-Cの強さに驚いている様子だった。

悔しい。勝ちたい相手なのに、勝てない、このもどかしさ。

でも、本当に七原・小早川チームは強い。どうやっても、七原の絶妙な読みとテニスセンスに劣ってしまう。

どうすれば良い……どうしたら勝てる……

僕は、勝利を確信する七原と小早川の方をじっと見ながら、そう考えていた。

「おい、てめえら！ボロボロじゃねえか！……」

ふと、大きな声があった。

僕と仁。それに、1-Cや、練習試合を見に来たギャラリーも、大きな声のする方に視線を向けた。そこに、堂々と立っていたのは、秋山翔太であった。

「翔太!？」

僕と仁は、声をシンクロさせてしまった。

「1-Cと1-Aの試合……それに、仁と楓が出るって話だったから来てみれば、何だよその様は!」

何も言い返せなかった。確かに、僕と仁は、七原・小早川に苦戦を強いられている。いや、もう、勝機が見あたらないうってても、過言ではないはずだ。

そんなことを翔太は、見透かしているようだった。

「で、負けそうになって、アセアセしてんのか?アホだろ。もしくは、バカだ。」

そこまで、言われる筋合いはあるのか。と、僕は少し頭にきた。

「そんな、ビビりじゃ、試合になんて勝てやしないさ。って、おい!離せっ!」

翔太を取り押さえに来たのは、翔太と同じ部活に所属している部員たちだった。

翔太が所属している部活は、剣道部。なぜ、剣道部にしたかという
と、剣で人を倒すのが夢だったという、これまた、意味不明な理由
でなのだが。

それでも、剣道の腕はなかなかのもので。

問題児ってというのは、部活の時でも同じみたいで、剣道の部員達は、
申し訳なさそうに、翔太を連行しに来たのだった。
翔太は、必死にもがこうとしたが、複数相手じゃどうにもならず、
強制連行を余儀なくされた。

周囲は、シリアスな雰囲気から、クスクスと笑い声さえ聞こえるよ
うな雰囲気になっていた。

「おい、楓。仁。余計なこと考えんな！ー。こなんか、屁でもねえ
ぞ！」

連行の途中、翔太はそう最後に言い放ちこの場から姿を消していっ
た。

「なんだ、あいつ。バカじゃね？あれで、高校生かっつの」

クスクスと笑いながらそんなことを言ったのは、小早川だった。

「いや、バカなんかじゃないさ。」

僕は、反射的に、そう言った。

そう、バカなんかじゃない。テニス部員や僕たちを含め、20人以上いるギャラリイの中で、単調で、なんの捻りもない言葉を大きな声で言う。

端から見れば、なんてバカな奴なんだ。恥ずかしい奴と思うかもしれない。

実際、翔太の口から、僕の名前が出てきたときは、とても恥ずかしかったが。

でも、翔太は、恥ずかしさなんて気にせず、僕たちに、精一杯の喝を入れてくれたのだ。

不器用な、あいつなりに、かけられる言葉を一生懸命探して。

僕は、テニスラケットをぎゅっと強く握りしめた。

「アハハ。ちょい、熱くなりすぎたわ。いや、反省反省。」

まいったな。と、照れ笑いをしながらそう言ったのは、仁であった。

確かに、そうだ。僕も、相手の挑発で感情的になり過ぎてしまった。そのために、仁が味方になっているのに、一人でテニスをしてしまっていたのだ。

「七原が、しっかりとボールを返すなら、俺がそれについて行けば良いって事だろ。」

仁は、急に真剣な表情になり、七原のことをじっと、睨みつけた。まるで、闘争心が復活したかのように。

「楓。あとは、頼んだ。」

仁の言っている意味を理解したのは、試合が続行されて、間もない頃だった。

七原の打ち返すボールに追いつき、返すのは、ほとんどが仁であった。

この二人で、打ち合いをしているかのように。それは、見ていても凄い光景だった。

どちらも、ドライブやトップスピンをかけることなく、フラットに丁寧ボールを運んでいた。それは、教科書に載っているストロークのようだった。

決して攻めるショットではなく、相手のコートへ正確に弾を運ぶショットだった。

そして、得点が入るのは、僕が小早川にボールが渡ったときだった。その時、僕は理解した。仁があの時僕に言った“あとは頼んだ”という意味を。

今までの戦法は、運動神経がずば抜けた仁が、決め球を打つ形であったが、今回はその逆。

仁が、僕のカバーに入り、決め球を僕に打たせるものであった。そう、僕が勝負する相手は、小早川に絞られたのだ。

試合は、お互い、譲らない展開を見せつつあった。しかし、カウントは4 - 2。依然として、1 - Cがリードしていた。

このままでは、勝機は見いだせない。そう、思った僕は、ある決断に到った。

まだ、練習試合でも、もちろん試合の時でも使ったことはない、ある技を。

一度だけ、仁とストローク練習の際、そのショットを使った時があった。

あの時は、仁に、この弾の威力じゃ、相手にチャンスボールを与えてしまうから、まだ使わない方が良く。もっと、練習してから。との、話があったために、今まで使ったことはなかった。

しかし、ここで使わなきゃいけないと、そう僕は思ったのだ。

練習は、自分なりに相当積んできたつもりだ。壁打ちなどで、何百回やりまくったことか。それでも、これだ！と思えた、感触は今までは一度もない。

僕は、仁の方にスッと視線を向けた。

仁は、凜とした表情で、構えをとっていた。それは、とても心強いもので、見ているだけで、勇気が沸いてくる。

失敗という恐れはなかった。仮に、失敗したとしても、仁は、決して僕のことを責めたりはしないだろう。奴はそういう男だ。

仁は、スポーツが本当に好きで。僕が、最初、仁に出会った時も、話す内容といたら、いつもスポーツの話だった。走ることも、球技も、器械体操なんかも、もちろん格闘技だって、なんでも、無難にこなせてしまうのだ。

勉強は、全くできないし、いつも授業中は寝てばかりなんだけどもね。

でも、仁は、不良っぽい見た目とは正反対に、すげえ心が広いってどうか、良い奴で。

授業での体育の時間、毎回仲間外れにされるのが、クラスに必ず何人かはいる運動音痴の奴だ。それでも、仁は、率先して、自分のチームに入れようとする。もちろん、貶しているわけじゃなく、一緒にチームを組んで、勝つ喜びを分かち合おうって。

もちろん、運動音痴だから、ミスはする。それも、普通の生徒より、

かなり多くミスを連発する。それでも、仁は、相手のことを責めたり、イライラする表情を見せたことは、僕の知る限り、一度もない。逆に、励まし、運動音痴の生徒と共に、スポーツを楽しんでいる様子を、僕は何度も見てきた。

仁にとっては、それらは当たり前のことなのかもしれない。でも、それは、決して誰もが真似できるものではない。仁だからこそ、できることなのだ。

だから、僕は仁を信頼し、この新技を、この場面で出そうという決断をとることができた。

精一杯、全力でプレイしている仁のために。恥ずかしさなんて気にせず、僕たちに喝を入れてくれた翔太のために。そして、自分自身のために。

僕は、テニスラケットを、ぎゅっと握ると、一呼吸をした。

小早川からのサーブ。そう、難しいボールではない。少々、力のあるショットではあるが、いつも仁と、練習してきた僕にとっては、このぐらいのスピードボールは容易く返せるものだった。

僕は、トップスピンをかけ、相手のコートへと運ぶ。それに、小早川が、追いつき打ち返す。弾はこちらへ。仁は、小早川から返ってきたボールをボレーで返す。やはり、さすが仁。鋭いボレーをしてみせた。七原は、それを読み、仁のいないところへ、ぼんっと、ボールを返した。

今だ!!

僕は、ボールの軌道を確認し、ラケットを、バックストロークに構え、正確に、ボールとの距離を縮めた。

ボールの高さ、落下地点、スピードの把握。僕はラケットを、やや斜めに傾ける。

ボールが打点へときた、今が打つタイミングだ。

僕は、素早く、ラケットを前へ切り出した。

「!?!」

この感覚。今までにない、感覚だった。

普通にストロークして弾を運ぶ感覚とは違い、ボールが勢いよく回転がかかる感触が僕の右腕から、全身へと伝わってきた。

七原は、仁の鋭いボレーに対応したせいもあり、追いつくことはず、

ボールは、低弾道で、さらにスピードを増し、小早川の方へと、向かっていった。

小早川は、驚いた表情を見せたが、このぐらいのスピードなら…と

いう表情を見せ、打ち返す構えに入った。

「なっ!？」

小早川は、ボールを返すことはできなかった。返すどころか、大きく空振りを試してみせたのだった。

「んだよ、あのデタラメなボールは。弾が、滑ってきた。」

「スライスか」

七原は、楽しそうな表情で、僕の方へ視線を送った。

「楓、ナイススライス!」

仁は、驚きつつも、そう、声をかけた。

やっと、できた。

完璧なまでのスライスを打てたのは、今日が初めてだった。

もちろん、軟式テニスでも、“スライスもどき”みたいなものは打てたが、やはり、威力そのものが違かった。

弾道そのものは、普通のショットと大きく変わらず、相手の手元でぐっと変化をする。

打ち返すことに慣れていない奴にとっては、とても打ちにくく、ミス誘いやすいボールだ。

だが、ちゃんとしたスライスが打てないと、ボールの勢いは死に、むしろ相手にチャンスボールを与えてしまう恐れがある。それが、スライスだ。

小早川は、スライスショットを打ち返すことに慣れていないらしく、そもそもスライスショットを体験したのは今日が初めてと言わんばかりの、表情をしていた。

「試合は、ここからだぜ？」

仁は、おもしろくなってきたと言わんばかりの表情をしながら、そう一言、七原と小早川に言ってみせた。

P・3 再会

「はあ……はあ……」

僕と仁は、今朝も、部活練習の最後の締めくくりである、走り込みの最中だった。

「今日は、やけにきついな……」

僕がそう言つと、仁はクスツと笑った。

「まあな。さすがにプラス5周はきついぜ」

僕たちの校舎周りを走ると、丁度、1周1kmの計算になる。それを、今日は15周走らなければならないので、簡易計算すると、15km走らなければならないことになる。

「仁、ほんと……申し訳ない。」

僕のミスだった。昨日の練習試合。僕が綺麗なスライスを打ったあと、試合はどちらに傾くか分からない展開となっていた。しかし、僕が綺麗なスライスを打てたのは、あれが最初で最後だった。他の

ショットは、全て失敗し、相手のチャンスボールとなってしまったのだった。流れは、完全に1 - Cへ傾き、そのまま6 - 3で終了。

そして、今朝、プラス5周という、ちょっとした虐めにあっているのが、僕たち1 - Aコンビなのだ。

「なんで、謝んのよ？」

仁は、当たり前かのように、そんなことを口にした。

僕は、少々拍子抜けしてしまった。

これじゃ、僕が、ちよっとした勇気を出して仁に謝った意味がない。

「いやー……うん。僕が、調子にのって、できもしないスライスにチャレンジしちゃってさ。だから……」

「なんつーか」

僕が、言いたいことを全部言う前に、仁は珍しく、話を横切った。

「俺は、昨日の試合。かなり楽しかったぜ？楓は、どうよ？」

「楽しかった。負けて悔しかったけど。」

僕がそう言つと、仁は、またクスッと笑った。

「だろ？俺も同じ気持ちだぜ。確かに、負けて悔しかった。でも、後悔はなんもない。失敗を恐れて、何もチャレンジしないより、全力で戦つて、チャレンジして、最後の最後まで諦めないで。それで駄目でも、あの時、ああしておけばよかった、なーんて、気持ちにはならないだろ？」

「僕がミスしなきゃ、勝てたかな……つてのは、後悔じゃないか？」

「楓は、全力じゃなかったのか？スライスがうまくいかなかったも、ゲームセットになるその時まで、挑戦し続けたのは、最後の最後まで諦めようとはしなかったからじゃないのか？」

「もちろん。」

それで良いと言わんばかりの表情で、仁は、走るスピードを少し速めた。

僕は、仁の背中を見ながら、昨日の試合のことを思い出していた。

確かに、僕は、あの綺麗なスライスショットを打ったあと、絶対に最後まで諦めない。まだ、試合はここからだと思つた。

スライスがうまくできなくても、諦めようとはしなかった。試合を終えて、負けた時、なんか熱いものがこみあげてきた。でも、後悔なんて微塵も感じなかった。むしろ、清々しい気持ちになったくらいだ。

試合後の仁は、悔しがっていたものの、確かに、すっきりとした晴れた表情であった。

「楓」

仁は、後ろにいる僕に、声をかけた。

「ん？どうした？」

「俺、ああいう、マジになった楓は久しぶりに見たぜ。」

そんなことを急に言われるもんだから、僕は、どう返事をすれば良いのか困った。

「い、いや〜、どうにかしちゃったのかな。珍しくマジになったのに、全然うまくいかないし……ほんっと、格好悪いよな〜」

つい、本音が出てしまった。

何に対しても本気を出さなくなっていったのは、いつ頃からだろ

う……

いつも、これぐらいできればいい。これ以上しなくても良いだろうと、自分に境界線を張り続けてきた。境界線を張り、危ない橋を渡らなければ、誰になんとと言われることもない。失敗など恐れることもないのだ。

だが、昨日の試合は、明らかに、本気を出している自分がいた。本気を出して、その拳げ句、全然スライスショットは決まらない。相手に流れを譲ってしまい、敗因をつくってしまった。なんて格好悪いのだろうと、そう思った。

そんな本音がつい、言葉として出てしまったのだ。

「俺は、好きだぜ？ああいう楓も。」

そう一言だけ、仁は言った。

「お前に言われても、なんか嬉しくねえな」

二人で、大いに笑った。

あと、4周。まだまだ、先は長いが、もっともっと走れそうな気がした。

朝のちょっとした休み時間。クラスでは、昨日のテレビの内容についてだとか、今日の放課後、何しようか。だとか、そんな会話でわいわいと少々うるさく、でもどこか安心できる雰囲気だった。

「内藤氏、私も参加して良いのですか!？」

髪の毛が妙にテカテカしていて、ごつつい輪郭。なのに、顔のパ
ツは童顔という、なんともおかしな奴。こいつの名前は、岡田真之
介。すけおかたしんの

悔しいが、僕と同じ年齢だ。

オタク集団の中心人物で、休み時間、真之介の周りには、同クラス
他クラス問わず、いつも多数のオタクが群がって……もとい、集ま
っていた。

オタクという属性で偏見は持たないが、僕は、あまり多人数で集ま
るのが嫌いな性格なので、今まで真之介とは、あまり話す機会がな
かった。

むしろ、真之介が、何度か僕や仁、翔太に話しかけてきたことはあ
ったけど、こちらが、話かけたことはないだろう。

それぐらいの仲なのに、どうして、今回、僕から話しかけたのか。

というのも明日、カレーパーティを翔太の家で開くことになり、カレーパーティに参加するメンバーを増やす係に、僕が選ばれたからだった。

比較的、誘いやすい真之介に声をかけたのだが、少々、僕は後悔をした。

カレーパーティをすることになったのは、仁・僕・翔太の会話からだった。

ある休み時間。僕は仁に、カレーを奢ってくれと、冗談で言った事があった。
すると、翔太がいきなり

「よし、カレーパーティやるぞ！」

と、言い出したのだ。

カレーパーティは、以前にも翔太の家で、行われたことがあった。カレーパーティと言っても、翔太のお婆ちゃんが作るカレーライスを食べる。ってことなんだけど、それが半端なく美味しいのだ。

今回も僕と翔太と仁の、いつものメンバーでやるつもりだった。だが今回は、人数を多くしてみるのも楽しそうだな。ということ、ジャンケンで負けた僕が、人事担当になったわけである。

真之介は目をギラギラさせながら、僕に視線を向けていた。

「あ、ああ。良かったら、どうか………とと思ってさ。」

「もちろんですとも！内藤氏の誘いとなれば、火の中、水の中、地獄にだって行ってしまいますぞ！」

「アハ、アハハ」

きつと、真之介は翔太と気が合うなど、ひしひしと感じた。

朝の会が始まった。チャイムが鳴ると同時に担任の磯辺美雪いそへみゆき、通称、いっちーが教室へと入ってきた。

いっちーは、かなり美人先生だ。

ボン、キュッ、ボンの三大要素をクリアし、顔も見とれるほど美し

く、男子生徒には、一番人気の先生といっても、過言ではない。性格はさっぱりしていて、優しくは…ないな。

「みんな、おはよー。」

いっちーが教壇につき、そう言うと、おはようございますという声が教室全体に響き渡った。

「今日も、元気な声でよろしい！先生は、嬉しいぞ」

いっちーは、一通り生徒の様子を見ながら、今日も満足げに、出席をとりはじめた。

僕は、部活でのラン15周と、真之介とのやりとりで、すでにグロッキー状態となっていた。

出席も取り終わり、いっちーの朝の話が始まる。

「お、いっちー、今日は政治について語ってるぞ？」

隣の席に座っている仁は、そんなことを言いながら、僕に話しかけてきた。

「ふーん」

つか、それがどうしたって話だ。こちとら、15周走らされて、体力的に限界な挙げ句、真之介のあのギリギリした目で精神崩壊状態だ。

一方、15周走ったとは思えないほど、びんびんしている仁の姿が隣にはある…

「つか、よく元気でいられるよな」

皮肉を込められるだけ込めて、僕は仁にそう言った。

「まあな。おかげさまで」

逆に、憎たらしい返事が返ってきた。これ以上、仁と話しても自分がどんどん、やつれていくと思い、とりあえず、寝ることにした。ごめんね、いっちー。今日も、いっちーの伝えたいこと、分からないや。

僕が、そろそろマジ寝モードに突入しようとした頃、いっちーの話が終わった。

「それで、今日はみんなに、嬉しいお知らせがあるわよ」

「なんだなんだ？結婚か？」

翔太の声だ。

教室からは、笑い声が響き渡る。仁も、クスクスと笑っていた。僕は、依然として寝る体勢を崩さなかった。

「お知らせっていうのは、今日から、1 - Aに転校生がくることになりました。」

おおお…という、驚きの声ともとれる、いや、歓声ともとれる声がシンクロしていた。僕も、転校生と聞いて、少し寝る体勢を崩し、ぐったりした顔を教壇の方へ向けた。

「楓、寝あと付いてるぞ？」

仁は、ケラケラと、僕の寝顔を見て笑っていた。

「うっせ、生まれつきこういふ顔なの！」

僕は、そう言い返したが、それもそれで嫌な話だ。

「いっちー、転校生ってさ、女の子？」

また、翔太の声だった。

いっちーは、翔太のくだらない言葉に、クスッと笑い、また話を続けた。

「以前は、北海道の高校に通っていたのだそうだけど、親の都合もあって、こっちに來たみたい。詳しい話は彼女から聞いてみて」

いっちーの言葉遣い、“彼女”から意味すること、つまり、転校生は女の子だということが分かった。

「うおお、オナノコだ！！」

翔太は、いきなり席を立ち、ガッツポーズをしてみせた。

「おい、翔太、必死になり過ぎ」

「翔太きもーい」

教室からは笑い声と、罵倒に近い言葉が、翔太を包み込んでいた。翔太は、これが俺の本職だと言わんばかりの、満足した表情をしていた。

「翔太ってやつは、どうも、笑われるのが好きらしいな」

僕がそう仁に言った。

「あいつらしいっていうか、なんていうか。ああじゃなきゃ翔太じゃないだろ」

仁は、冗談とも本音ともとれる言葉を言った。が、確かに考えてみれば、あいつらしい。

この1-Aのムードメーカーといったら、一番先に名前が出てくるのが、秋山翔太である。

それは、1-Aのほとんどの生徒がそう思うに違いないだろう。なんか馬鹿な奴だな。おかしい奴だと思われながらも、翔太は、ムードメーカーという存在としてみんなに認知されている。それも、1年も経っていないのに。

僕は、ふと翔太のことを羨ましく思うことがある。

人目を気にせず、生きていくって、簡単なようで、凄く難しい事だ。

こうしたら、誰かに嫌われるんじゃないか。何か悪いことでも言われるんじゃないか。そんな感情を、人はもっているのだと思う。差がつくのは、そのことに気づいているか、気づいていないかってこと。

自分には到底できないこと、みんながためらうことを、翔太は、朝飯前かのようにやってしまう。それは、人目を気にせず、自分らしく生きられる強さを持った、翔太だからこそできることなのだ。

「んじゃ、早速転校生に入ってきてもらおうかな」

いっちはそう言い、ドアを開け、廊下にいるであろう、転校生に入っつとの合図を出した。

その転校生は、スツと教室に入ってきた。

転校生が入ると、一斉に歓喜の音が響き渡った。それも、今まで聞いてきた歓喜の声より大きく、甲高いものだった。

周囲では、可愛いとか美人とかそんな声が響き渡っていた。

「おい、楓。すげえ転校生が入ってきたな。」

考え事をしていた僕を、現世へ引き戻してくれたのは、仁のこの一言であった。

「ん？」

状況がよく掴めない。

仁は、淡泊なりアクションをとった僕を見ながら、呆れた表情をした。

「ん？じゃねえよ。ほらよく見てみるよ。正真正銘の美少女転校生だぜ？」

左の席にいる仁の方から、前方の方へ、視線を向けた。
そこには、いつちーと、噂の転校生の姿があった。

背は165cmといったところか。髪は長めで、サラサラしている感じだ。髪色は少々茶色であるが、地毛であろう。体的には、いつちーと比較しやや可哀想であったが、太ってはなく、それでいて痩せすぎでもない。顔は小さく、目元も、鼻元も、口元も……いつちーが美人であるとしたら、この転校生は可愛い系と言った方が適切な感じがした。

そのことよりも、僕はどこか違和感があった。それもかなり重大な。

「どうした？」

何か、考え事をする僕を見た仁は、そう声をかけた。

「いや、なんか引つかかるんだ……」

「もしかして、一目惚れか？把握した。協力するぜ」

仁は、ニヤッと笑いながらそんなことを言っていたので、僕は慌てて否定した。

ハイテンションで舞い上がる翔太をスルーし、いつちーは、自己紹介をするようにと、その転校生に声をかけた。
転校生は、少々恥ずかしそうに、クラス全体を見渡し、一呼吸をおき、喋り始めた。

「皆さん、はじめまして！今日から、この学校、この教室でお世話になります。山下カノンです。よろし……」

「カノン……！」

僕は、そう大きな声を出しながら、席から立った。

本能であつたのだろう。自分が大きな声で転校生の名前を言ったのも、急に席から立ったのも。今、いっちらの隣にいる山下カノンという女性が誰なのか、自分の中で引つかかつていたもの、違和感というものが一瞬にしてなくなった時、僕は本能で、そうしてしまったのだ。

クラスのみんなは、急に席から立ち、大きな声を出した僕の方に視線を向けていた。恥ずかしさはない。僕は、確認するかのようになり、山下カノンの方に視線を向けていた。

「え……」

山下カノンも、驚いた様子で僕の方を見た。少し間をあげ、山下カノンは、ふと何かに気づいた表情をした。

「嘘……か、かあくん?!」

やっぱりそうだ。

この転校生は、山下カノン。あの山下カノンに間違いなかった。

僕が通っていた小学校は、家から徒歩30分ぐらいのところにあつた。

30分というと、小学生にとっては、どれだけ歩いても学校に着かないように感じるぐらい、遠く長い道のりだ。

僕は、いつものように学校に到着し、教室へと入る。

僕の席は、日の当たる、左端。この席は、僕のお気に入り席で、晴れていると、外から暖かい日の光が包みこんでくる。

夏場はちよつと暑いが、それ以外の季節は、眠ってしまうぐらい、本当に気持ちの良い席であつた。

席に着くと、僕の机には、決まって落書きがされてあつた。

“ 男女 ”

“ おかまみたいな名前 ”

“ あほかえで ”

今日は、いつも以上に落書きが多い。

僕は、消しゴムを取り出し、机に書いてある落書きを消し始めた。

いつものことなので、慣れてはいるが、こつ落書きが書かれているのを見ると、誰がこんなことを書いたのか。どんな気持ちでこれを書いたのか。凄く恐かったし、泣きそうになった。

僕は、両親を憎んだ。なんで、こんな名前をつけたのだろうか。当時では、男らしい男の名前とか、女らしい女の名前が、主流であった。なので、当然のごとく、僕みたいなちよつと変わった名前の奴は、いじめの対象となるのだ。もつと、まともな名前をつけて欲しかった。

泣きそうになる感情を抑えつつ、僕は、無我夢中で、机に書かれている落書きを消した。

「おはよう、かえでくん」

ふと、力のある声がして、僕は驚いた。

机の落書きを消す作業を一旦中止し、声のする方を見ると、そこには一人の可愛らしい女の子が立っていた。

「かのんちゃん……」

山下カノン。彼女との出会いは、小学校の入学式の時である。僕は、人見知りが激しく、入学式の頃、ずっと下を向いていた。その時、彼女が僕の前に現れたのだ。

「よろしくね！」

「……よろしく。」

これが、僕とカノンとの、なんだか恥ずかしく、とても懐かしい最初の出会いだった。

カノンは、なぜ僕なんかに話しかけたのか、今にして思えば納得がいく。

彼女は、とても社交的であった。それ故、同じ教室である人と仲良くなるために、こうして、みんなに挨拶をしていたのだ。

とても小学生とは思えない行動力である。

それ以来、彼女は、僕に何回も話しかけてきてくれた。

でも、僕は「あっそう」「へえ」などと、簡単に話を切り上げてし

まう。何せ、極度の人見知りだったからだ。
友達を作りたいとは、僕も思っていたが、いざ人前に出てみると、
どうしてもゴモゴモしてしまう。
初対面の人に何を話したらいいのだろうか。どうしたら友達になれるのか、僕は全然分からなかった。

「かえでくん、おはよう！」

そんな何気ない言葉を毎日、カノンは僕に言ってくれた。呆気ない態度を毎回してしまう僕なんかには、カノンは毎日、挨拶をしてくれたのだった。

カノンと、ちゃんと会話ができるようになったのは、小学校4年の頃。

小学4年……。僕に対するいじめが徐々に増えてきた頃だった。
背は低く、名前は女々しい。性格も、人見知りだから、どうしても他の奴からは、暗い奴に見られてしまう。
そんな僕に、友達と言える人は、誰一人としていなかった。

はじめの頃は、声をかけられたこともあったが、もう誰も僕に声をかけてはくれない。もちろん、僕もみんなと仲良くなりたいと思い、精一杯話しかけた。でも、どうしてもゴモゴモしてしまう僕の事を、友達として、一人の仲間として、認めてくれる者はいなかった。

とても辛かった。とても恐かった。

上履きを隠されたこともあった。教科書が全部ゴミ箱に捨てられたこともあった。

でも、僕が一番嫌だったのは、みんなから無視されたことだった。教室にいても、廊下を走っても、校庭に出ても、みんな僕の事なんか、まるで存在してないかのような態度だった。

それが、とてつもなく恐くて、寂しくて、悲しかった。

学校に来るたびに、自分が、この世界で存在してないかのような気持ちになった。

僕の存在を、0から100まで拒否されているみたいで……

その頃、クラスでは席替えがあった。

僕の席の隣になる奴は決まって、なんでこいつの隣なんだよ……といった表情や態度をする。

だから、この席替えというイベントは、僕にとって、本当に嫌いなイベントの一つだった。

席替えは、くじ引きで決める方式だった。

新しい席が決まっていく。新しい席順が、担任の先生によって、黒板に書き出されていった。

友達と遠く離れてしまい、ため息をつく人や、やつのことで友達と近づくことができ、歓喜の声を出す人もいた。

僕は、この雰囲気 genuinely 嫌いだ。なぜなら、友達がいなかったから。

だから、みんなのように、ため息をつくことも、歓喜の声をあげることもできなかった。それが、本当に悔しかったし、憎らしかった。

僕は、ふと自分の席はどこか、黒板の方を見た。

左端だった。

今回、僕の隣に座る人は誰なのか、何気なく確認をした。

あの不良グループの誰かじゃなきゃ良いな。僕のことを虐めるあいっじゃなきゃ良いな。

そんなことを思いながら、僕はじつと黒板の方に視線を送った。

そして、ついに僕の隣の席になる人が決まった。

「よろしくね、かえでくん！」

その人とは、席が決まるのと同時に、僕に話しかけてきてくれた子。そう、山下カノンであった。

席替えをしてからというもの、山下カノンは、挨拶だけじゃなく、何気ないことでも、話しかけてくれた。

それでも、僕は、いつものように呆気ない態度をするのだった。

山下カノンには、たくさん友達がいる。僕が雲に隠れた月であるとするなら、彼女は太陽のように、サンサンと明るく、クラスの中
心人物的存在だった。

呆気ない態度しかできない僕に話しかける時間があるなら、もっとたくさん友達と仲良く喋れば良いのに。なんで、彼女は僕に話しかけてくれるのだろうか。と、不思議で仕方がなかった。
でも、凄く嬉しくもあった。

僕の存在を認めてくれる人がいた。
やっぱり、僕はちゃんと生きているんだ。そう、思うことができたから。

「わたしも、けすのでつだうね。」

カノンはそう言って、ランドセルの中から、筆箱を取りだし、消しゴムを見つけ、机に書いてある落書きを消し始めた。

泣きそうになる感情を抑えていた僕は、安心したせいか、カノンと一緒に消してくれるのが嬉しかったのか、理由は分からないが、目から滝のように涙が出た。

女の子の前で泣きたくはなかった。だから、目から滝のように涙が出てくるのを、必死に拭おうとした。でも、涙は止まらなかった。ありがとう……ありがとう……。そう僕は、心の中でカノンに向かって言い続けた。

「ほーら、オトコノコなんだから、なかないの」

カノンは僕に精一杯の励まし……いや、慰めなのかもしれない。でも、その言葉はとても温かいものだった。

机に書かれた落書きを消し終えると、カノンは少々考え事を始めた。机に書かれた落書きを消し終えると、カノンは少々考え事を始めた。

僕はその光景がたまらなく不思議で、じっと彼女の方に視線を向けていた。カノンは不思議がっている僕のこと気づくと、アハハッと照れ笑いをした。

「これから、かえでくん。じゃなくて、かあくんってよぶね」

「え……」

「かえでくんのニックネーム！かあくんできまり！」

なんて、ニックネームのセンスだ。

カノンは、僕の方を見ると、ニコツと笑顔を見せた。その笑顔は、今でも忘れることはない。純粹で、凄く優しいものだった。

「なんだよ、へんなニックネームだな」

僕は、涙を拭きながら、また、呆気ない態度をした。

「わたしのことは、カノンでいいよ。そのほうがよびやすいでしょ？」

この日から、僕とカノンは、少しずつではあるが、ちゃんと話らしい会話をする事ができるようになっていった。

虐めなんて、もう恐くなくなった。みんなに無視されるのも、平気になった。
なぜなら、カノンがいてくれたから。一人で十分だった。僕のことを、一人の友達として認めてくれる人。僕の存在を認めてくれる人が一人いれば、僕はどんなにつらいことがあっても、平気に思えるようになった。

僕に対する虐めは、なくならなかった。でも、学校に行くのが毎日楽しみになっていった。

朝、学校に到着し、教室に入ると、いつもカノンが先にいて。

「かあくん、おはよう!」

と、いつもの元気な笑顔で挨拶をしてくれる。

休み時間では、特別変わった話じゃないが、カノンと二人で楽しく会話をした。

下校の時間になると、カノンはいつも「一緒に帰ろう」と、誘ってきてくれた。

そんな何気ない事が、僕にとっては、本当に幸せだった。こんな日々がずっと続けば良いなど、そう思っていた。

雨が降る月曜日の朝。

いつもなら、先に学校に到着し、自分の席に着いているはずのカノンの姿が、その日はなかった。

学校を休んだことは、カノンは今まで一度もなかったのに、今日はどうしたのだろうか。風邪でも引いたのかな……と、思ったが、また明日になれば、あの優しく、温かい元気な笑顔をして、学校に来るだろうと、僕はそう思っていた。

その日、僕は、雨が強く降っていたので、親に連絡をとり、車で家に帰った。

カノンが休んで一日が経った。

僕が教室に入ると、カノンの姿はなく、教室では、何やらいつもと違う雰囲気があった。

僕は、そんな雰囲気なんてどうでもよかった。僕が、気になったのは、カノンがいないということだった。

本当に何かあったのではないか……活発で小学生とは思えない行動力のあるカノンのことだ。何か、大きな事件に巻き込まれたんじゃないか。僕は、心配で心配でたまらなかった。

朝の会のチャイムが鳴り、先生が教室へと入ってきた。それと同時に、カノンも教室へと入ってきた。

僕は、カノンの姿を見たとき、とても安心した。何事もなく、無事にこうして、学校へと来てくれたのだから。

だが、担任の先生から出た言葉は、衝撃的で、耳を疑うようなものだった。

「みんなはもう知っていると思うが、山下カノンは、今日でこの学校から旅立つことになった。」

クラスは一段と騒がしくなった。

カノンは、いつもの元気で明るい表情をしてはいなかった。

「両親の都合で、引っ越すことになったそうだ。みんな、寂しいと思うが、カノンも寂しいはずだ。今日、精一杯カノンを送り出してあげようじゃないか。」

信じられなかった。

カノンが今日で、この学校からいなくなる……信じられるはずがなかった。

一昨日まで、あれだけ、楽しく話していたじゃないか。何事もないような表情で、僕に温かい笑顔を見せてくれたじゃないか。

僕は、この日、一度もカノンと話することはなかった。

カノンは、それでも僕に話しかけてきてくれた。でも僕は、カノンと話そうとは決してしなかった。

「さようなら」も。「また会おう」ってことも。そして、「ありがとう」って言葉も。

カノンが、今日学校から去っていくこと。それを、認めてしまうよ
うで、僕は、何もカノンに伝えることができなかった。

何も伝えることのできないまま、カノンは、学校から姿を消した。

僕は、目を開けた。

なんだ、夢か……

なんて、変な夢を見てしまったのだろうか、僕は暗闇から目覚まし
時計を探り、時間を確認した。

「5時過ぎか……」

二度寝する時間ではなさそうだ。

カノンと衝撃的な出会いをしてから、一日が経った。

あの出来事も、夢であって欲しいなと思いつつながら、僕は、寝起きで気怠い体に鞭を入れ、すつと起きあがり、水を飲み、自分の部屋を後にした。

P・5 カレーパーティー略してカレパ!?

今日も、何事もなく学校が終了し、僕たちは学校を後にした。

翔太の家に遊びに行くのは、これで何回目だろうか……

翔太の家系はちょっと変わっていて、母は小さい頃に亡くなった。精神の病で、自殺をしたのだという。

父は長期の出張で、家にはほとんど帰ってこない。その代わりに、祖母が翔太の面倒をみていたのだった。

もちろん、翔太はお婆ちゃんっ子だった。

翔太にお婆ちゃんの悪口を言った途端、とてつもなく不機嫌になるのを、僕と仁は今までに何回も見てきた。

今日は、待ちに待ったカレーパーティーの日。僕はこの日を本当に楽しみにしていた。なぜなら、翔太のお婆ちゃんが作るカレーは、そこいらの店にあるカレーよりも、半端なく美味しいからだ。言うなら

“食べてみて、初めて分かる、この美味さ”

って、感じた。……なんか……CMのキャッチフレーズみたいだねっ！

僕は、日課と言っているほど、学食（学校食堂）ではカレーを食べるのだが、この日のために、僕はここ数日間、学食でカレーを食べることをやめた。それぐらい、このカレーパーティーは、僕にとって待ち遠しいものであった。

だが、予想外の事態が起きたのだ。問題は、カレーパーティーの参加者だった。

僕と翔太と仁。それに真之介。ここまでは、昨日の計画通りだった。だが、当日になって、もう一人メンバーが加わったのだ。

そう、そのメンバーっていうのが、山下カノンなわけで……。

カレーパーティーの人事係は僕のはずであった。もちろん、カノンのことを誘おうとは思わなかった。なんか、気まずいし……。

だが、真之介が「ここは、歓迎会としゃれこみましょう！」なんて、カノンのことを誘うもんだから、急遽、カレーパーティーにカノンが参加することになったわけだ。

何がしゃれこむだって？お前のアゴをしゃこませてやるうか！！

僕は、怒りに近い感情を抱きつつも、翔太の家へと向かった。

「さて、山下殿の歓迎会アード、交流会の始まりですぞ！」

真之介は、翔太の家に着くと同時に、テンションが最高潮に達していた。

「うっしゃー！！気合い入ってきたぜー！！！！」

続いて、翔太がそう言いながら真之介と共に、はしゃぎ始める。

翔太のお婆ちゃんが、玄関で出迎えてくれた。とても優しい笑顔で、どこか懐かしい印象を受けた。

翔太は、みんなのことを部屋に案内すると、ばっちゃんの手伝いをすると、僕たちのいる部屋からササーっと出て行ってしまった。

「なるほど。山下殿は、音楽関係の部活に入ったのですか。」

真之介は、目をギラギラさせながら、カノンの方を向いていた。

真之介という男は、他人のことになると、それはもう、熱くなる性格だった。

自分のことを話すより、みんなのことをもつともつと知りたいと、そう思う男なのだ。

そこが、とてもウザイところなのだが、友達が山ほどいる理由の一つも、それだと言えるだろう。

「んー、部活とはまた違うんだけどね。私、昔からピアノやってたから。」

カノンは、少々照れながら、話していた。

カノンがピアノをやっていたなんて、僕は全然知らなかった。

いや、僕がカノンと知り合ったのは小学生の頃だ。その頃は、まだピアノなんてやっていなかったただけだよな。

僕は、そんなくだらしない事を思いながら、カノンと真之介のやりとりを見ていた。

「ところで、山下殿は、内藤氏と、お知り合いだったのですか？」

真之介が、突然そんなことを言い出した。

僕は、びっくりして、飲んでいたお茶を勢いよく吹き出してしまった。

「おい、楓！俺にかけんなよ。あーあ、びちゃびちゃじゃねえか。」

仁のズボンは、僕の吹き出したお茶によって、ずぶ濡れになってしまった。

「ごめん、仁！悪気はあった。今も反省していない。」

「てっめー！」

僕と仁がそんなことをやっているとき、真之介が、そのやりとりを横目に、カノンに話を振っていた。

「幼なじみとか……ですか？」

「んー……」

カノンは、ちょっと考え込む仕草をとった。

「てか、小学校んときにね。お世話になった関係です。」

カノンが、何か言う前に、僕は真之介にそう言った。

「お世話……ですか？」

「まあ……、うん。色々あってさ。」

だから嫌だったんだ。

僕の小学生の頃の話を、なぜ今さらしなければならぬ。

あんな、悪夢のような6年間の話を、なぜ今ここでしなければならぬ。

僕が虐めを受けてて、それをかばってくれたのが、山下カノンです。なんて、なぜ、この場で言えることができる？

もし、仮にそんなことを言ったとしても、どうせ、場の空気が悪くなるに決まっているし、同情なんてされたら、まっぴらごめんだ。

僕は、真之介に、これ以上の事を言っつもりは断じてなかった。

カノンが、もし僕の小学生の時の話を始めるものなら、僕は、絶対に止めるつもりだった。

だが、カノンは一言も僕の昔のことについて、話そうとはしなかった。それが唯一、僕の救いであった。

「カレー、できたぞ〜！」

そう言いながら、僕たちのいる部屋に元気よく入ってきたのが、翔太だった。

テーブルに、カレーライスが人数分置かれていく。とても食欲のそそる、良い匂いだった。匂いを嗅いただけでも、唾液が止まらない。

「ん〜。良い香りだね。見た目も匂いも……さすが、翔太のお婆ちゃんだ。」

仁はそう言いながら、カレーを食べる準備にとりかかっていた。

「いいや、ばっちゃんと、俺の手作りカレーだ！ちゃんと、味わえよ〜！」

カレーが人数分置かれ、水、スプーンと、福神漬け…
食べる用意は整った。

「いただきまーす!!」

僕も、そう言うと、スプーンでご飯を崩し、カレーに馴染ませ、口の中に運んだ。

「ちょ……」

とりあえず、熱かった。

口から出しそうになるのを我慢して、水と一緒に流し込む。

「楓、慌てすぎだぜ。」

仁は、僕の一連の動作を見ていたらしく、アハハと笑いながら、水をコップに入れてくれた。

「僕は、猫舌なだけです!」

そんなことを言いながら、僕は再度、スプーンでご飯を崩し、カレーに馴染ませながら口の中へ入れた。今度は、少し冷ましてから、口の中へ慎重に入れていく。

「美味い!!!」

僕は自然に美味しいと、声に出した。リアクション王になりたいわけじゃない。自然と声に出してしまうほど、本当に美味しかったのだ。

辛すぎず、それでいて、甘過ぎてもない。

ただ辛いだけじゃない。なにかこう……旨味成分というもののなか、コクというのか。よく分からなかったが、すぐくまるやかで、それでいて、ピリつとした辛さがもう、何とも言えなかった。

野菜もたっぷり入っているのに、それら全てが美味しく感じられた。そして、なんととっても、豚肉の存在がこのカレーの美味さを何倍も引き出してくれている。

牛肉が入っているカレーがよく見られるが、あれは全然カレーのことを分かってはいない。牛肉だと、食感が硬く、美味しさが半減してしまう。

だが、豚肉だと、とろけるような食感へと変貌を遂げるのだ。

さらに、豚肉を細かく切ってしまうよりも、ぶつ切りにして入れた方が、断然美味い。

それを、このカレーは分かってらっしゃる。

完敗だった。もう、僕の完敗でした。

「このカレー、本当に美味しいね！」

カノンも、満足している様子だった。

どうだ、見たか！なーんて、自分がつくったわけじゃないのに、勝ち誇った感情になりつつも、僕は誰と話すこともなく、黙々とカレーを食べ続けた。

祝福の時は、どうしてこうもすぐに過ぎてしまうのだろうか。

お腹いっぱいまで食べた。もちろん、ご飯粒一粒も残さずに。お代わりだって、軽く3杯はしただろう。

みんなの様子を見ると、お腹いっぱいだという表情の中にも、美味しいものをたらふく食べたという満足感を見て取ることができた。

「いやあ、ほんと美味しかったですぞ。また、カレーパーティーやりましょう!」

「おう、いつでも来い。また、用意してやるよ!」

翔太は、みんなの満足している顔を見ながら、とても嬉しそうな表情をしていた。

カレーを食べ終わった後も、1時間ほど僕たちは、何気ない会話で楽しんだ。

真之介が、バイトの面接で10連敗していることとか、翔太の武勇伝とか。仁は最近、陸上に入らないかというスカウトが、あったとかないとか。

カノンは、部活に入って、すでに何人かの仲間ができたとか。みんなの話を聞くうちに、僕は、なんだか一人置いていかれているみたいな感覚に襲われた。

こうやって近くで喋っているのに、みんな遠いところにいる。そんな感覚だった。

カレーパーティーも終わり、僕たちは、それぞれの家へ帰るために、翔太に別れの挨拶を言い、翔太の家を後にした。翔太と、翔太のお婆ちゃんは、僕たちの姿が見えなくなるまで、ずっと手を振っていた。

帰宅の途中、一通のメールがきた。

僕の携帯にメールがくるというのも、そう滅多にあるものじゃないので、僕は誰からだろうと、ズボンの奥底にあった携帯を取り出し、内容を確認した。送信者は……内藤美子。メルマガではないらしい。母からのメールだった。

- 楓の、明日の朝のパンと飲み物、買うの忘れちゃったから、帰るついでに買ってきてちょうだい。お金は、後払いで -

んなアホな！

「俺も付き合ってやるつか？」

仁は、そう言ってくれたが、僕は丁重にお断りをした。

私的事情なのに、仁に付き合わせちゃ、いくらなんでも悪いと思っ
たからだ。

「そつか。んじゃあ、俺たちは、先帰るわ」

「ああ。気遣ってくれて、ありがとな。」

「内藤氏。話の続き・あとで、たっぷり聞かせていただきますから
ね〜!!」

「真之介がバイトの面接に受かったら考えとく。」

僕は仁と真之介に、別れの挨拶をした。

「今度は、かあくんからの誘い、待ってるからね!」

カノンが、元気な声でそう僕に言ってきた。心を見透かされているようで、僕は少々恥ずかしい気持ちになった。

「りょーかい。考えとくわ」

僕は軽く笑いながら、そうカノンに言った。

カノンもそれを聞き、アハハと笑いながら、またね。と、手を振った。

僕は、手を軽くあげ、その場を後にした。

僕はコンビニで、自分の朝食を買ったと、家に帰り、ベッドに横になった。

カレーパーティ。略してカレパ。

友達数人で、カレーを食べ、なんて事ない会話をしただけ。これがカレーパーティとして成り立っているのかどうかは、分からない。だが、これだけは言える。

今日は、いつも以上に疲れたが、いつも以上に楽しかった。ってこと。

カノンの、突然の参加が決まり、どうなるかと思ったが、今にしてみれば、それはそれで良かったと、多少なりとも思うことができる。

ちよつとしか喋られなかったけど、久しぶりにカノンと喋ることができたし。

それに、みんなのことも、今までより、少しだけ分かった気がする。

「カレパか……また、やりてえかも」

僕は、天井を見ながら、今日あったことを思い出していた。そして、知らないうちに、深い眠りへと入っていった。

もうすぐ、高校一年が終わろうとしている。

カレパがあつた日以来、僕たちは、今までと変わらない、普段の生活をおくっていた。

カノンが、この学校に来てから、すでに3ヶ月が経とうとしていた。それなのに、僕とカノンは、あの日以来、言葉を交わすことはなかった。

時間というのは冷徹なもので、知らぬ間に刻々と流れていく。

「時間よ止まれ」と念じても、決して時間は止まってはくれない。

今も、一秒一秒と時間は過ぎていくのだ。

僕は、ふと、こう思うことがある。

僕の人生は、未来はどうなっていくのだろうか。期待や希望に満

ちた感情ではなく、不安で恐くて……
今にでも逃げ出してしまいそうになるぐらい、本当に、どうなって
しまうのかと。

そんな不安を抱きつつも、僕たちの高校生活一年目が終わりを迎えた。

高校二年生になっても、僕たちの生活は相変わらずな日々だった。

僕たちの高校は、クラス替えというイベントがない。例えば、1 - Aの生徒は皆、2 - Aとなり、3 - Aとなる。

“他クラスとの交流を大事にする”というより、“同じクラスの生徒と、三年間を通して親睦を深める”というのが、この高校のモットーであるのだ。

「もっと、たくさん友達を作りたいのに、この制度じゃあんまりだ」という声もあるが、僕は逆に、この制度で良かったと思っている。一年経つたびに、新しく友達関係を築けるほどの余力はないからだ。

僕の生活は、一年生の頃と比べても、変わったところはなかったが、周りを見渡すと、皆、少しずつではあるが、変わり始めていた。

仁は、テニス部を辞め、短距離ランナーとして本格的に陸上部へうつった。僕と同じ部活じゃないことに、今でも悔いているみたいだが。

僕も、仁がテニス部を辞めると聞いたときは、とてもショックだったが、精一杯応援すると仁に言ったし、僕もテニス部で一生懸命練習して、必ずやあの練習試合のリベンジを果たすことを誓った。

翔太は、プロの料理人になりたいと思ったのか、最近、料理の本を学校に持ってきて、休み時間などを利用して、読むことが多くなった。

あのカレパ以来、お婆ちゃんに料理を教わり、今では、ほとんどの家庭料理がつかれるとか、つくれないとか。

今度、翔太の家に遊びにいったとき、早速何かつくってもらおう。

真之介は……依然、バイトの面接の連敗記録更新中であった。

バイトの面接で、なぜそんなに落とされてしまうのか、オタクグループで話をしていたのを聞いたことがあった。

他人のことになると、熱くなる性格の真之介。実は、バイトの面接中もその性格上、面接者が質問しているのにも関わらず、逆に質問をしてしまうというのだ。

気づいてみると

「相手のことを知ってというのは良いことだけど、まず、相手が質問をしていることに気づけよ」

と、毎回言われて、その都度、バイトの面接に落ちるのだという。

そりゃ、落とされるわけだ。それでも真之介は

「ぜーったい、受かってみせますぞー!!」

なーんて調子で、諦めては全然ないようだった。

むしろ、落ちれば落ちるほど、やる気が出てきている様子だった。あの雑草のような“しぶとさ”には、誰も勝てやしないだろう。

そして、山下カノン。

カノンは、すでにクラスの中にとけ込んでいた。空手部の吉沢愛莉よしざわあいりと、同じ音楽部に所属している山本桜とやまもとさくら、グループを作っていた。もちろん、友達はそれ以外にもたくさんできていた。

転校生って、最初の頃は、珍しいというのもあり、いつもよりも人が多く寄ってくるものだ。

だが、時間が経つにつれて、その“珍しさ”というものに慣れ、落ち着きを取り戻す。

だが、カノンの場合は、全くそんなことはなかった。いや、むしろ、最初の頃よりも、カノンの周りには人が多く集まるようになっていった。

授業の時でも、休み時間や昼飯の時でも。放課後の時だって、カノンの周りにはたくさんさんの友達が集まっていた。

さすがは、カノンとしか言えなかった。

カノンは、ガキの頃から、小学生とは思えない行動力があって、社交的で。誰とでもすぐに仲良くなることができた。それも、当たり前かのように簡単にやってみせるのだ。

カノンの表情はいつも純粹で、元気で、温かいもので。

仁と似ているところが、カノンにはある。

それは、“他人を偏見しない”ということだ。

虐められっ子だろうが、不良っぽい人だろうが、カノンにとって外見とは、どうでも良いことなのかもしれない。

だから、僕もあの時、カノンに出会えて、本当に良かったと思えることができたのだろう。

カレパの時、カノンと一言話しただけ。

それ以来、僕とカノンが話すことはなかった。僕から話しかけることもなく、カノンからも話しかけてくることは、一度もなかった。もちろん、カノンが話しかけてくれるのを待っていたわけではない。僕から、何度も喋りかけようとした時はある。

だが、カノンは、いつもたくさん友達に囲まれていた。そんなカノンに、喋りかけられる隙は見あたらなかった。

そうしているうちに、僕たちは高校二年生となっていたのだ。

月曜日の朝。

目が覚め、時計を確認すると、時間は7時を過ぎていた。

学校からはそんなに遠くないので、7時30分ぐらいに家を出れば間に合う。

いつもなら6時には起きているというのに、今日は、7時過ぎまで眠っていたようだ。

僕は少々夢の余韻に浸り、その後、学校に行く準備を始めた。

まずは、カーテンを開けた。

天気は、雨雲が空を一面覆っていた。7時過ぎまで眠ってしまった理由がその時分かった。

いつもなら、日の光で目覚めるのだが、今日は太陽が出ておらず、体がまだ起きる時間じゃないと判断したのだろう。

次に着替えをし、洗面所へと向かった。

顔を洗い、鏡で自分の髪の毛を見た。寝癖はあったが、許容範囲内だな。

そして、朝食を食べに、階段を下り、台所へ向かった。

僕の朝食はいつも、コンビニのパンと、苺牛乳だった。

この朝食でないと、どうも一日を元気に過ごすことができない。

今日のパンは、メロンパンであった。昨日食べたばかりの、メロンパン。

ちょっと気持ちはブルーであったが、苺牛乳さえあれば大丈夫。

時刻はすでに7時40分だった。ちょっと、夢の余韻に浸りすぎたのが原因だろう。

雨雲が少々不安だったが、このぐらいなら大丈夫だろうと、折りたたみ傘は持たず、鞆だけを持ち、僕は急いで学校へと向かったのだ。た。

今日も、何事もなく一日は過ぎた。

放課後。いつもなら、この時間帯、部活でテニスウェアに着替え、部室へと行くのだが、今日は雨で自主練習になった。

基本的にテニス部は、雨が降っていたり、風が強い時は、自主練習に切り替わる。

自主練習とはいえ、筋トレや走り込みをするわけではなく、事実上の帰宅ということになる。

僕は鞆に教科書を入れ、帰る準備に取りかかった。

高校一年生の時だったら、仁と一緒に帰っていたが、仁はもう陸上部にうつり、一緒に帰ることはできなくなった。

陸上部も同じ外のスポーツではあるが、天気が悪くなると、学校に建てられている筋トレルームみたいところで、下半身強化を行うらしい。

仁は、スポーツに対して本当に真面目で、晴れている日も、雨の日も、体調があまり優れないときも、決して部活を休んだりはしなかった。

一人で帰るのは、ちょっと寂しいな……と感じながら、帰る準備を終わらせ、下駄箱へと向かった。

靴を履き、外に出た。
外は思った以上に強い雨だった。

「やっちまった……」

迂闊だった。
折りたたみ傘を持ってこなかったことに気づいたのは、この時だった。

この日の朝。空は確かに雨雲が覆っていた。
だが、このぐらいだったら大丈夫だと、僕は折りたたみ傘を持たずに、学校に来てしまったのだ。
学校から、家までの距離は、徒歩20分のところ。それでも、この雨の強さじゃ、風邪を引いてしまう。
どうしたものかと、考え、思い浮かんだのが、図書室で雨宿り作戦だった。

図書室に行くのは、決まって夏と冬だ。

僕らの学校は、教室に冷暖房はない。

だが、唯一、図書室だけには冷暖房が完備されており、夏では涼しく、冬では暖かい。そんな快適な場所を図書室は提供してくれる。僕と翔太と仁は、冬と夏だけ、決まって図書室に行くのだった。だから、この5月。図書室に行くなんて、考えもしなかった。

だが、仕方ない。雨が少し弱くなるのを見計らって、帰るとするか。僕は、そういう決断に至ったのだった。

図書室は別校舎に設けられているが、歩いて1分ぐらいで到着する場所にあった。

僕は、鞆を傘の代わりにしながら、図書室へ向かった。

図書室に着いた。僕の服は、思った以上に濡れていた。

僕は、鞆に着いた雨水をハンカチで拭き、図書室の中へ入る。

図書室は、さすが別校舎として建てられているだけあって、とても広い。

一階だけじゃなく、二階、三階まであるのだ。

一階は、主に勉強に使われる参考書や、数ある小説が連なっている。

二階は、資料など、多くの古本などが置かれている。

三階は、PCルームとなっていて、誰でも好きな時間にネットを見たり、調べものをしたりすることができるようになってる。

僕は、一階で待機することにした。

とりあえず、雨が少しでも落ち着いてくれればそれで良かったからだ。

今日は、雨のせいもあって、人の出入りがいつもよりも多く、図書室の雰囲気は、どちらかというとな賑やかな感じだった。

図書室に入って何もしないのもあれなので、僕は小説を適当に選び、席に着こうと、空いている席はないか辺りを見回した。すると、偶然にも、山下カノンの姿があった。

カノンは一人、真剣になって、ノートに何かを書いていた。

僕は、まさかカノンが、図書室にいるとは思わなかったので、不意をつかれた形となった。

僕の視線のせいなのか、カノンはすぐに、僕の存在に気づいた。

「あれ、かあくん？」

「お、おう。」

カノンの向かい側の席に座った。なんか、ぎこちない。

「なにになにかあくんは、人生について興味があるの？」

「んなわけねえだろ。」

カノンがそんなことを急に言うもんだから、僕は瞬時に、的確なツッコミを入れ、自分が持つてきた小説を開けようと表紙を見た。

- 人生について本気出して考える本 -

……いや、何かの間違いだろ。
僕は、もう一度、自分が持つてきた本の表紙を見た。

- 人生について本気出して考える本 -

なんだ、このタイトルは。
まるで僕が、人生について本気を出して、考えようとしているみたいじゃないか。

「これはあれだ。その……宿題で出されたの。」

「そんな宿題出されたっけ？」

カノンは笑いながら、僕にそう言った。

そうだった。カノンは、僕と同じクラス。そんな理由が、通じるわけがなかった。いや、それどころか、そんな理由をってしまった自分が、とても情けなく感じた。

「カノンは、なぜ図書室に？」

「え？」

カノンが一人、真剣に書いていたものは何だったのか、視線をカノンのノートの方に向ける。

そこには、よく見ても分からない複雑な数式が書いてあった。

カノンは、照れ笑いをしながら、ノートを閉じた。

「ごめん。勉強の邪魔しちゃったみたいで。」

「ぜーんっぜん。そんなことないよ！」

カノンは笑ってそう言っていたが、本当に申し訳ないことをしたと思っただ。

音楽部に入り、ピアノの練習などで、勉強の時間がなかなか取れな

い。と、友達と話していたことを僕は偶然聞いてしまったことがある。勉強の時間がなかなか取れない分、カノンは、勉強の時間をつくっては、コツコツと勉強をし、頑張っていたのだった。一方、僕はただ雨宿りをしにきただけ。それなのに、カノンの貴重な勉強の時間を邪魔してしまったのだ。

カノンは、シャーペンを置くと、ぐっと背伸びをした。

「カレーパーティー楽しかったね！」

カノンは、急にそんなことを言った。

僕は、カノンのその一言で、気持ちが凄く安らいだ。

「あはは。そうだね。」

「かあくんだったら、冷まさないでカレー食べるから、むせてるんだもん。」

カノンも、あのハプニングを見ていたのか。

「あ、あれは、ちょっと油断しただけだって。」

「かなりの油断と見た！」

クスクスと、僕とカノンは笑いながら、カレパの話で盛り上がった。

雨ということもあり、図書室全体が賑やかな雰囲気だったので、話していても、別にうるさいと思われることはなかった。

カレパの話が終わると、僕たちは、何を話せば良いのか、お互いが分からない状況となっていた。

それもそうだ。カレパ以来、僕とカノンの間に、会話という会話はなかったのだから。

そんな雰囲気がとても嫌で、僕は、自分の持ってきた本を見る素振りをした。

もちろん、中身を見るなんてことはしなかった。ただ、ただ、沈黙しているこの空間から脱したかったのだ。

この沈黙を破ったのはカノンだった。

「久しぶりだよ。こうやって、二人だけで話すのって」

「そうだね。何年ぶりだろう。」

「小学4年生の時だったから……うーんと……6年ぶりだ！」

「もうそんなに経ってるのか」

「早いよね〜。」

本当に早いよ……。カノンと別れてから、すでに6年経ったのだ。カノンと一緒に過ごした小学校の思い出は、忘れず残っているというのに。

「私、夢を見たの」

「夢？」

「そう。最近見た夢なんだけどね〜」

カノンは、まるで子供のように無邪気な笑顔をしながら、話を続けた。

「私ね。席替えで、かあくんの隣の席になったの。」

「へえ〜」

僕は、カノンが無邪気に喋るその様子を見ているだけで、とても癒された。

純粹で、温かい。とても心が落ち着く。今も昔も変わらないカノンが、そこにはいた。

「そしたら、かあくん。また呆気ない態度するんだもん。」

「それはまた、困ったかあくんですこと」

二人で笑った。

何がおもしろかったのかは分からない。でも、二人で笑い合った。その光景は懐かしく、とても楽しい、ひとときであった。

雨が大分弱まってきた。

カノンは、鞆にノートと参考書、筆箱を入れ、帰る準備にとりかかっていた。

「ねえ、かあくん。」

「ん？」

カノンは、帰る準備が終わると、席から立ちあがり、図書室の窓から外を見た。

「あの日も……こんな天気の日曜日だったね……」

「あの日？」

僕が、カノンにそう訊ねると、カノンは僕の方を向いて、うんつと頷いた。

「かあくんは、あの頃に戻れるとしたら……戻りたい？」

「え？」

カノンの質問に、どう返事をすれば良いのか分からなかった。僕が黙っていると、カノンは再び話し始めた。

「あの頃に……。できるなら、あの頃に私は戻りたいな。」

僕は、なぜだか分からないが、ドキッと心をつかれたような感覚になった。

「あの頃に戻って……」

わずかな沈黙。

カノンは、一瞬表情を変えた。

「……うつん……じゃあ、私、そろそろ帰るね」

カノンは言葉に詰まった一瞬だけ、表情を変えたような気がした。でも、すぐにいつもの笑顔に戻ると、僕に手を振り、図書室から姿を消したのだった。

カノンが言っていたこと……。カノンが僕に伝えたかったこと。考えれば考えるほど分からなくなった。

ただ、僕の心拍数は間違いなく早くなっていた。

だが、この気持ちもまた、考えれば考えるほど分からないものだった。

カノンがいなくなった図書室で、僕は、窓から見える外に目を向け

た。

雨は、まだ止むことはなかった。

P・7 それぞれの夏休み

気づくとすでに7月中旬。

本格的な夏の暑さが、僕たちを襲い始めていた。

だが、あと数日で、待ちに待った夏休みが訪れる。それまでの辛抱だ。

夏休みは、7月中旬から8月いっぱいまで。およそ1ヶ月半の長期休暇である。

夏休みが終わると、高校二年生である僕たちは、修学旅行というイベントに突入する。

「ってことで、くじ引きで班決めはすることになりました」

いっちは、そう言うと、くじ引きの準備をし始めた。

今日は、修学旅行の班決めを行う日。もちろん、班を決めるにあたって、色々な案が出されたが、結局、いっちの独断で決まる形となった。さすが、いっち……

「くじ引きかよ……」

僕は、一人、愚痴っていた。

そもそも、くじ引きって、ちゃんとした決め方じゃない気がする。友達で班を組むようにすれば、みんな納得するに決まっている。

友達がいらないやつのことを考えて……とは言うが、むしろ、虐められた経験がある僕から言わせてもらえば、大きなお世話だ。

くじ引きをしたところで、結局、虐められっ子が班に入ったとき、「えええ」っというリアクションをする奴は、必ずいるのだから。だったら、友達だけで組んでもらった方が、どれほど助かることか。

「内藤氏。一緒の班が良いですね！私は、そう願っておりますぞ！」

僕の隣の席の真之介が、いつものテンションで話しかけてきた。

高校二年になってすぐ、席替えがあった。

僕は、一番ど真ん中の席になった。ある意味ハズレと言うべきだろうか……。

毎回僕の隣の席は仁だったのだが、運もそうずっとは続かず、仁は真ん中の後ろの席になった。その代わりに、真之介が僕の隣の席になったのだった。

「うん、だが断る」

僕は、裏表のない満面の笑みで真之介に答えた。

「ひ、ひどいじゃないですかあゝ、内藤氏！」

「てか、内藤氏……じゃなくて、“かえで”で良いって」

真之介っていうのは、どうしてこうも、「〴〵殿」とか「〴〵氏」と付けたがるのだろうか。それが、一つのアドバンテージとでもいうのか。

僕はため息を一つし、班が決まるのをじっと待っていた。

班はだいたい1班につき4人から5人程度で決まる。

男女関係なく、くじ引きで決定するので、男だけのグループにもなれば、女だけのグループにもなる。

また、男が一人で他全員女ってケースももちろん考えられる。それこそ僕にとっては死のグループと呼べるだろう。僕は、それだけにほならないように願っていた。

班分けがされ始めた。いつちーが、チョークを持ち、黒板に書き始める。
教室は、歓喜の声や、ため息をつく者など、様々な感情が入り混ざっていた。

僕は、食い入るように、黒板を見た。

- 第3班 内藤楓、内山信輝、吉沢愛莉、根本遥 -

「マジかよ……」

なんて、微妙なメンバーだ。というのも、喋ったことのある奴が、誰一人としていなかった。

「あああう……内藤氏とは、離れてしまいましたか……シヨンボリです。」

真之介が残念そうに、そんなことを言った。

「つか、真之介は誰となつたんだ？」

僕がそう言つと、とんつと、肩を後ろから叩かれた。

「俺たち！」

僕は後ろを振り向くと、仁と翔太の姿がそこにはあった。

「え……、俺たちって？」

僕がそう聞き返すと、仁と翔太は目を合わせクスツと笑った。

「いつものメンバ」

「ちょ……マジかよ……」

僕はその事実を否定しようと、黒板を再び見た。

- 第1班 秋山翔太 岡田真之介 宮本仁 山下カノン 山本桜 -

これは、まさかの展開だった。
翔太も仁も、それにカノンだって、同じ班なのか……
この現実から僕は逃げたくなった。

「私もシヨックです。内藤氏と一緒にの班ではないなんて。」

僕と一緒にシヨックを隠しきれなかったのは、真之介だった。

「なんだ、真之介。僕に対する嫌みか？」

「そんなことは決してありませぬ！私は内藤氏と……」

僕は、真之介の言葉をそれ以上聞くつもりはなかった。

本当にシヨックで、真之介の会話についていく余力はなかったからだ。

別に、僕の班のメンバーに不満があるわけではなかった。

ただ、誰とも喋ったことがないメンバーなだけに、今後の展開が全然読めない。

それに対し、1班は、楽しい修学旅行が保証されているも同然だった。

「そんな卑屈になんたって。班つっても、抜けてそっち遊びに行くから」

「感謝しろよな〜」

仁と翔太は、慰めながら、そう言ってくれた。

その言葉が、僕の唯一の救いだった。ありがとう……やっぱり、持つべきものは友なんだね…

…

「私も、もちろん遊びに行きますぞ!」

「うん、だが断る」

夏休みの事前指導も無事に終わり、僕たちは夏休みに入った。

夏休みに入っても、僕は学校に登校していた。というのも、部活の練習があるからだ。

夏は、部活の練習にもってこいだ。なぜなら、風や雨など、天候に左右されることが限りなく少ないからだ。

夏休みの部活は自由参加だったので、出なくても良いことになって

いる。だが、部活に行かないと、特にやることもない。

それならば、テニスの練習をしに学校に行った方が、暇潰し程度にはなるだろう。

僕は、そう考えたのだった。

もちろん、仁や翔太も、あと数ヶ月後に行われる大会のために、部活練習に励んでいた。

部活が終わる時間が一緒の時は、仁たちと一緒にゲーセンに行ったり、ファミレスで食事をし、部活での愚痴話をすることもあった。

そんな毎日が僕は楽しかったし、とても充実しているなど感じることもできた。

だが、夏休みに入ってからというもの、カノンの姿を見ることはなかった。

カノンは今何をしているのだろうか。僕は、その想いが日に日に増していた。

「じゃあ、今日も練習試合やるぞ〜」

テニス部顧問の小林先生だ。

夏休みに入ってから、練習試合を多くするようになった気がする。

やはり、大会がだんだん迫ってきたからだろう。

僕は、同じクラスの田端洋平たはたようへいと、ダブルスを組んだ。

田端洋平。最近、テニス部に入部したばかりの奴なのだが、結構、動ける。

仁と比べると、少々劣るが、それでも素晴らしい運動神経の持ち主だった。

性格も、なかなかの奴で、ちょっと真面目なところが多い気がするが、それでも、頼りになる奴ではあった。

仁が、テニス部をやめてからは、僕は、この田端とダブルスを組むようになった。

僕と田端は、準備体操を入念に行いながら、他の生徒のダブルスの試合を見ていた。

いつものように、七原・小早川ペアは余裕の勝利を飾っていた。

そろそろ、僕らの出番か

僕たちは準備体操をキリの良いところで終わりにすると、テニスコートへと向かった。

相手は、2・Bの安田・上島チーム。
七原・小早川チームより強くはないが、なかなかの強さだ。油断は
できない。

僕は、コートに入ると、相手チームを見つめ、集中力を高めた。

僕は、目を開けた。

「うわっ！」

「うおっ！」

僕の目の前にいたのは、巨大な大男……ではなく、小林先生だった。

「内藤く。人がせつかく、保健室まで連れてきてやったのに、目を開けた途端“うわ！”は、ねえだろ？」

小林先生は、少々ご立腹のようだった。

「すみません。つい、成り行きで……」

「どんな成り行きだ。」

僕は気づくと、保健室のベッドで寝ていた。

とりあえず、ベッドから起きあがろうと上体を起こしてみる。

「いつっ……」

頭部に激痛が走った。

「おいおい、無理するな。派手に転んだんだから、もうちょい寝とけ。」

小林先生は笑いながら言った。
まるで、僕の怪我をあざ笑うかのように。

「転んだ……？」

僕は、記憶が一部欠如しているようだった。
先生の話によると、ボールに追いつこうと必死に走ったところ、コート上に転がっていたボールに足をとられ、転倒したのだという。
そのまま、背中から倒れた僕は、頭を強打し、意識を失い、現在の状態……というわけだった。

「内藤、足は大丈夫か？」

「え？」

僕は、足を動かしてみる。少々痛かったが、捻挫とかにはなっていないようだった。

「おかげさまで、無事でした」

僕がそういうと、小林先生は安心した表情を見せた。

「これからは気を付けるんだぞ。足を怪我したら、テニスなんてできやしないんだからな？」

「はい、気を付けまーす」

僕がそう言つと、小林先生は、満足そうによしよしと頷いた。

「じゃあ、明日も練習頑張るんだぞー！」

小林先生は、そう言い残し、保健室を後にした。

僕は、氷で頭を冷やししながら、頭痛が治るまで、もう少し寝ていることにした。

夏の猛暑と、蝉の鳴き声で、僕は目を覚ました。
保健室のベッドから外を見ると、空は夕陽でオレンジ色に染まっていた。

僕は、体を起こす。頭痛はしなかった。
保健室にある時計を見ると、時刻はすでに5時をまわっていた。

「いっけね。寝過ぎた」

少しだけ休んでいこうと寝たつもりが、2時間ぐらい眠ってしまったみたいだ。

こんなところで、グダグダしてられないと思い、僕は保健室を出た。

「？」

保健室を出ると、かすかに楽器の音が聞こえた。

「この音は……ピアノ？」

カノンかもしれない。

僕は、ふとそう思った。

そう思ったら、いてもたってもいられなくなり、音のする方へと向かった。

そして、辿り着いた先は……

“音楽室”

この学校にも音楽室があったんだと、この時初めて知った。

というのも、授業では音楽という科目は選択授業なのである。

僕は、選択科目のうちの“書道”をとっていたので、音楽室に入ることが今まで一度もなかった。

それに、音楽室は、この校舎の3階にあったのだ。

一年生は1階に。二年生は2階に。三年生は3階と、教室が配置されているので、無論、音楽室を見ることも今までなかった。

少し古そうな作りのドアだ。僕はそのドアを開け、中を覗いた。そこにいたのは、ピアノを弾いているカノンの姿だった。

僕は、音楽に関して、ほとんど無知である。

だが、カノンが弾くピアノの音色は、とても良い響きで、力強いものであると感じることができた。

カノンは夏休み、この音楽室で、ずっと練習をしていたのだろうか。

カノンがピアノを弾く姿は、とても綺麗だった。僕は、その光景をじっと見つめていた。

「君は誰だい？」

ふと、男性の声でしたので、僕は驚いた。

音楽室から、一人の男子生徒が、現れた。

カノンのことしか頭になかったからなのか、男子生徒がいることに、初めて気づいた。

カノンも、その男子生徒の声で、僕の存在に気づき、ピアノを弾くのをやめた。

「かあくん!？」

カノンは、かなり驚いた様子だった。

「ちっす」

僕は、軽く手をあげた。

「君が、楓くんか。山下さんから話は聞いてるよ」

その男子生徒は、にこっと微笑んだ。

「こちらの方は……さかいしゅんいち堺俊一先輩。私の練習に付き合ってくれてるの」

カノンがその男子生徒の紹介をした。

さかいしゅんいち堺俊一。男である僕からみても、とても魅力的な人のように感じた。ただ、格好良いだけじゃない。とても優しそうで、大人びている。堺先輩を見ているだけで、自分がめちゃくちやガキであるような感覚に陥った。

「はじめまして。楓くん。3・Dの、さかいしゅんいち堺俊一です。よろしくね」

「あ、どうも……」

僕と、堺先輩のやりとりを見ていたカノンは、恥ずかしそうな表情を見せた。

「堺先輩、ごめんなさい。かあくん、人見知り激しいから」

「とても良い子そうじゃないか」

堺先輩はそう言うと、また笑顔をみせるのだった。
なんか、自分が負けているようで悔しかった。

「それにしても、意外だな。音楽室で楓くんに会えるなんて。思ってもみなかったよ」

「いつも、ここで練習しているんですか？」

僕が、堺先輩に尋ねた。

「そうだね。山下さんは、夏休み、毎日ここに来て、練習をしているみたいだよ」

「しているみたい？」

「ああ、俺は受験で忙しいから、毎日に来られないんだけどね。」

堺先輩がそう言うと、カノンは少々照れ笑いをした。

「私が、無理を言うてお願いしたの」

「全然無理なんかじゃないさ。逆に、楽しいよ」

「そんなそんな。」

カノンは、あの温かく純粋な笑顔を堺先輩に見せていた。

「いやいや、本当さ。山下さんは、のみこみが凄く早いしね。」

「そんなに誉めたって、何も出ませんよ?」

そこに、僕の居場所はなかった。

カノンと堺先輩だけの時間。二人だけの居場所が存在しているかのようだった。

僕は、なぜだか分からないけど、とても変な気持ちになった。

悔しかったのか、悲しかったのか……何とも言えない、複雑な気持ちだ。

僕はこの日から、夏休み中、音楽室に行くことは一度もなかった。

夏休みなんて、気づいてみればあっという間に終わってしまうものである。

今年もなんだかんだで、夏休みは残すところあと3日。

自分の今年の夏休みを振り返ると、充実していたのかな……一応。部活の練習もほとんど休まず出たし、そのおかげからか、次の大会では、レギュラーとして選抜された。

今まで、大会に出ても、見ているだけだったので、今回、やっと出番が回ってきた。という、感じた。

話によると、翔太や仁たちも次の大会ではレギュラーとして参加するみたいだ。

翔太や仁に負けないよう、もっともつと練習をしないといけないな。

夏休みの後半は部活一色だった。もちろん、翔太や仁たちとゲーセンに行ったり、ファミレスで飯を食べたりはした。

でも、それは夏休みじゃなくても、していたことで。夏休み、特別に何かしたかと聞かれると、何もしていないと言った方が適切であった。

案外、夏休みとか、冬休みとか、長期休暇に入る前は、あれしたいな。これしたいな。と、思うけど、いざ長期休暇が始まると、何もしないまま長期休暇が終わってしまったりする。もちろん、計画性

がある人は、別だが……。

無論、僕は計画性なんて、全くと言っていいほどない。だから、長期休暇が終わると、「あれしておけばよかった」と、後悔することがよくあるのだ。

「これ借りたいんですけど」

僕は、ある一冊の本を片手に、図書室の受付のおばちゃんにそう言った。

おばちゃんは、その本を見ると少々困った表情を見せた。

「これね〜。貸し出ししてないのよ。」

「え……してないんですか？」

おばちゃんは、言葉を選ぶかのように少々考える様子を見せ、再び話し始めた。

「この本、何回も紛失しちゃってね。当分の間、貸し出ししないようにしたのよ」

「何回も紛失って……」

「ごめんなさいね。図書室で読むなら構わないんだけどね。」

おばちゃんは、愛嬌のある笑顔をした。

僕はアハハ…と、愛嬌のない笑顔をし、その場から離れた。

それにしても、この本って、どんだけ人気の本なんだよ……

僕は、その本を見つめた。

- 人生について本気出して考える本 -

ここで勘違いをしてもらっては困る。

僕は、人生について本気を出して考えようとは思っていない。

じゃあ、なんのためにこの本を借りようと思ったのか。

理由は単純明快であった。暇つぶしだ。ただ、それだけのことだった。

部活の練習が、今日は休みだった。

顧問の小林先生が夏風邪を引いたのだという。

夏休み最後の最後に、してくれる男だ。

僕は、今日も部活があるのだとばかり思って、普通に学校に来たのだが、同じクラスであり、チームメイトでもある田端から今日の練習はなくなった、ということを知られた。

今さら家に帰って何かすることもなかったし、せっかく学校に来たので、とりあえず、本でも借りて読むか……ということになったのだった。

「何がそんなに人気なのか、見てやろうじゃん」

僕はその本を読もうと、席の空いている場所はないか辺りを見回した。

今日は、人の出入りが少なく、どこの席でも大丈夫そうだ。

さすがに、夏休み残り3日。こんなところで、時間を潰したいと思う奴はそうそういないだろう。

席に座り、早速、人気大爆発中（だと予想）のこの本を読んでみることにした。

難しい漢字が多いな。

僕は、この時だけ、国語の授業をもう少し真面目に受けておくべきだったと後悔をした。

読み始めてから1時間が経った。

“人生に悩んでいる人達に送る、超秘術がここに！”
…ほづほづ。どんな超秘術があるのか、この僕に見せてくれ。

僕は気づくと、真面目にその本を読み進めていた。

「よお〜。文学生！」

急に力強い声がした。

僕は、真剣になって本を読んでいたので、少々驚き、声のする方向を見た。

そこに立っていたのは、ショートカットで活発そうな女子生徒だった。

「あ、吉沢さん」

「隣、席空いてる？」

「どつぞどつぞ」

吉沢さんは、僕の隣の席に座ると、自分の鞆から、一冊の本を取り出した。

吉沢愛莉。

外見も性格も男勝りで、女性であると感じさせない。

サバサバとした性格ではあるが、絆とか友情とか、そういうものを
凄く大切にしている。

だから、彼女の周りには、いつも多くの人が集まる。

吉沢さんは、1年ですでに空手部の部長に。そして2年生になると、
生徒会長に任命されるほど、みんなに信頼されていた。

「あれ？部活はどうしたの？」

「それがね。今日は休みなんだ」

吉沢さんは、嬉しそうに言った。

「なるほどね」。僕も、今日は休みだね。こうして、文学生となっ
ているのですよ。」

「アハハ。全然似合わねえ」

「うっせ」

吉沢さんと、二人きりで話すのなんて、今日が初めてだろう。だが、初めてとは思えないぐらい、違和感もなく、自然に会話ができていた。

夏の暑さと蝉のうるささの話を何分かすると、吉沢さんは、自分が持ってきた小説を読み始めた。

ブックカバーを付けており、何を読んでいるか確認することはできなかったが、邪魔をしてはいけない。

そう思った僕は、最高傑作のこの本を読むことにした。

本を読み始めてどれだけの時間が経ったのだろうか。

時計を確認すると、12時を過ぎる頃だった。

この図書室に来て、3時間も経っていることに、僕は驚きを隠せなかった。

本を読むと時間を忘れる。とは、よく耳にするが、確かに忘れてしまっな。

「夏休み、早かったよね」

吉沢さんが、本を閉じ、僕に話しかけてきた。

少々驚いたが、さすが僕。そんなことに、動じるはずがない。

「確かに、凄く早かったね」

「楓くんは、夏休み、何か予定とかあったの？」

「んー、特になかったな。あつたとしても、部活の練習がほとんどだったよ」

「私も私も！ほーんと、なんで夏休みにも部活があるんだ！って、感じだよな。」

「アハハ。だよな。」

やることないから部活行ってきました……なんてことは、言えなかった。

「あと3日で夏休みも終わり……。そしたら、すぐ、修学旅行だね。」

吉沢さんは、楽しそうな表情を浮かべた。

「そういえば、吉沢さんて、修学旅行の班。3班だったよね？」

「そうそうー！」

「そっか。じゃあ、修学旅行のときは、僕のボディガードお願いし

ますね」

「逆だろ、普通。女の子を守るのが、君たち、男の子の役目でしょうが！」

吉沢さんは、あり得ないという仕草をした。

「あれ？吉沢さんって、女の子だったっけか？」

「むっか〜！！れっきとした女ですよ！」

楽しかった。

今日、初めて話したとは思えないぐらい、本当に楽しい。

「修学旅行の班のメンバー……喋ったことのない人たちだから、なんだか楽しみだな……」

意外だった。吉沢さんにも、喋ったことのない人たちがいるのか。

「不安とかないのかい？」

「もちろん！早く、班の人たちと喋ってみたいな〜。」

僕の質問に、吉沢さんは、笑顔でそう答えた。

僕とは正反対の考えをもっていた。

僕は、班のメンバーが決まったとき、微妙だと思った。いや、それどころか、嫌だな……と、思ったぐらいだ。

だが、吉沢さんは、違かった。

喋ったことのない人の集まりだからこそ、楽しみなのだという。そんな、吉沢さんを目の前にして、僕は自分の心の狭さに自己嫌悪に陥るぐらい恥ずかしい気持ちになった。

「はっや。いつの間に、1時なんか……」

吉沢さんがそう言ったので、僕は読んでいた本を閉じ、時間を確認した。

1時30分か……

「じゃあ、私はそろそろ帰るとするよ」

吉沢さんは、小説を鞆の中にした。

「そっか。もうちょっと居れば良いのに」

「寂しいのかい？文学生」

「寂しいよ」

僕がキレのあるボケをしてみせる。

「キモッ！」

「言わせておいてなんだよ。」

「ごめんごめん。」

吉沢さんはアハハッと笑い、鞆を肩にかけ、座っていた席から立たた。

「うん。なんか、良かったよ。」

「ん？」

「いやー、楓くんと今日会って、話せてさ。凄く良かった！」

吉沢さんは、ニコッと笑顔をしてみせた。

「こちらこそ、良かったよ。凄く楽しかったし。」

「修学旅行、お互い楽しもうね。風邪なんて引いて、休むんじゃねえぞ!」

「おう、そつちもな!」

吉沢さんは、軽く手を振り、図書室から去った。

残された図書室で、僕は再び本を読み始めた。

キリの良いところまで読み終わると、本を書棚に戻し、図書室を後にした。

とうとう、明日が修学旅行の日だ。

新しくできた遊園地に行くらしい。名前は確か“ファンタジーランド”といったか……なんともメルヘンチックなんでしょうの1泊2日の旅。

電車に乗り継いで行ける所らしいのだが、僕は電車を使ったことがあまりないので、どうなることやら……

僕は自分の部屋で、修学旅行の準備をしていた。
タオルと、着替えと、パンフレットと……

パンフレットをパラパラとめくる。

そこには、明日何時に集合だとか、何時に消灯だとか、そんなことが書かれていた。

「消灯10時かよ！なんていう早さだ。」

ページをめくる。

次のページには、班毎にメンバーの名前が書かれてあった。

- 第1班 秋山翔太 宮本仁 岡田真之介 山下カノン 山本桜 -

今見ても、このメンバーで修学旅行とは、なんて羨ましい。

そして、僕たち3班。

内藤楓、内山信輝、根本遥、そして、吉沢愛莉……

僕は、この班が決まったとき、ハズレくじを引いたなど、少なからず思った。

だが、2日前、吉沢愛莉という女性に会い、話をして、それは大きく変わった。

吉沢さんがいれば、きっと楽しい修学旅行になるだろう。

パンフレットを閉じ、鞆の中に入れた。

明日は5時起きだ。

僕は、明日の準備を終わりにさせると、早々と眠りについた。

P・8 一期一会(後書き)

P・9 どたばた！修学旅行

修学旅行の当日。

行き電車の中、僕は内山の隣の席で、熱いカード話に耳を傾けていた。

「そ、そ、それでこのカードの出番なわけですよ。エヘヘ。あ、あ、相手の攻撃をう、受け流すことが、で、で、できるんですう！」

内山信輝。通称、デブウェイザーだ。

岡田真之介グループ所属。担当はカード。

見た目から太っていて、牛乳瓶の底のようなメガネがチャームポイント……なわけあるか！

普段は、暗く、ほとんど会話をしない奴なのだが、カードの話題になると、異常にテンションをあげ、マシンガントークを展開する。

「ア、アハハ、なるほどね。」

「そ、そ、それとですね！」「このカードの、こ、こ、効果も凄いですよっよっよ。」

「慌てなくて良いから、ちゃんと喋ってくれ。」

「わ、わかり、ま、ま、ました」

突然、内山はたくさんのカードが入ったケースを、鞆の中から取り出した。

何十枚単位ではない。この量だと何百枚単位だ。

「こ、このカード、レ、レベルの割りには、か、か、かなり使えるんですよ！」

パラパラとカードをめくっていく内山。そして、迷いもなく、目的のカードを見つけた。

なんてスピードだ。何百枚あるカードの中から、目的のたった一枚のカードを、たった数十秒の間で見つけるなんて…

そんな特技があるなら、それを勉強とか、別な方に使ったら、もの凄いいことになるだろうな…と、ひしひしと感じた。

「ちょっと、静かにしろよな。うちの班だけだぞ、こんなうっさいの。」

前の席からひよこつと顔を出し、そう言ったのが、吉沢愛莉だった。

「ちょ、僕もかよ」

「何言ってるんですかあ、な、内藤くんだって、た、楽しそうにしてたじゃ……」

「してないから！断じてしてないぞ」

内山は、なんてことを言いやがる。

まるで、僕と内山が仲良く、カードのことについて熱く語っていたみたいではないか。

「おおおお、内山氏！それに、内藤氏も、ここの席だったのですか！おはようございます！」

急に、真之介が現れた。

「おはよう」

「お、おは、おはよう」

「で、真之介、急にどうしたんだ？」

僕ら3班と真之介たち1班の車両は別であるのに、どうしてここまで来たのだろうか。

内山や僕に会いに……いや、その可能性は低い。

なぜかというと、班ごとに席が指定されるのだが、他の班がどの車両に乗っているのかは、知らされていないからだ。

「いや〜お恥ずかしいことに、トイレを探していたら、ここまで来てしまったのですよ。」

真之介は、照れ笑いをしながら、そう答えた。

「“ウォーリーを探せ”じゃあるまいし、簡単に見つけられるだろ」

「それでも、内藤氏に会えて、逆にラッキーですよ！」

真之介は、僕に向かってピースをしてみせた。

この指二本をどうにかしてやりたい。僕はそう思ったが、今はやめておこう。

「おお、内山氏！そのカードは、超ウルトラレアカードじゃないですかあー！」

真之介は、内山が持っていたカードに気づくと、目の色が変化した。

「この輝き、この強さ、素晴らしいですうー！」

「エへへ。き、昨日、カード買ったら、ぐぐ偶然出てきたんだ。」

「羨ましいです！実に羨ましいー！」

僕は、話について行くことができなかった。いや、むしろ、ついに行きたいとは思わなかった。

なんだ、このオーラは。なんで、こんなにギラギラしている。車内は冷房がついて、快適な温度のはずなのに、なぜ、この空間だけ熱い。

「ちょっと、カードのことは分かったから、いい加減にしなさいよね！」

吉沢さんは、少々強い口調でそう言うてきた。

ざまあない。そんなに熱く語っているから、怒られるんだ。ありがとう、吉沢さん。君は僕の救世主だ。

「そうですね。吉沢殿申し訳ありません。以後、気をつけますです。内山氏、内藤氏も、もう少し、ボリュームを下げて喋りましょう。」

おい、待て……

「なんで、そこに僕の名が入る？」

「何をおっしゃっているんですか、内藤氏。今まで、楽しく喋っていたではないですか」

「だから、喋ってねえって。一言も喋ってねえぞ！」

なんて言いがかりだ。

だが、いくら否定をしても、このチームオタク…もとい、チーム真之介のパワーには負いしてしまう。実に腹立たしい。

これが、あと1時間も続くのか……かなりきついな……

「さて、実際にカードゲーム対戦としゃれこみましょうー！」

「な、内藤くんには、ま、負けないぞ」

なんか、やる気だ。

「いや、遠慮しておくよ」

「またまた」。遠慮しなくて良いのですぞー！」

真之介はそう言つと、どこからともなくカードを取り出し、僕に手渡してきた。

僕、もう、涙目です。

“ファンタジーランド”

昼頃には着くと、いつちーは言っていたが、それよりも若干早めに着いた。

僕は、長時間電車に乗っていたことと、長時間のカードゲーム対戦をやらされた結果、体調が悪くなっていた。

駅から出て、背伸びをする。とても、気持ちが良い天気だ。
天気予報通り、今日は曇一つなく晴れていた。

「すげえ!!!なんて規模だ」

「あのキャラクター何?きゃ〜わ〜い〜い〜」

他クラスの生徒も、修学旅行だからなのか、いつも以上にテンションが高めであった。

「とりあえず、いっちーのどこ集合らしいよ。行くうぜ。」

吉沢さんは落ち着いている様子だった。さすが、生徒会長といったところか。

いっちーの所にAクラス全員が集結した。
テンションが最高潮の翔太や真之介。それを楽しく見ている、仁やカノンの姿があった。

「ちゃんと、説明聞きなよ。あとで、説明してって言うても、説明しないからね」

1班の様子を見ていた僕に、そうやってきたのは、吉沢さんであっ

た。

「任せろって。携帯電話だって、説明書なしで操作できるし、問題ないね！」

「アハハ。それとこれとは、違うだろ」

いっちーの話は、いつも以上に長かった。

それもそうだ。こんなに広い所で遊ぶのだ。何らかの事件が起きることは、言うまでもなく予想される。

少しでも事件が起きないようにするためにも、話が長くなるのは仕方のないことだ。

「ってことで、みんな、くれぐれも個人行動は避けるように。必ず班で行動するんだぞ？」

ですよね〜。

こんな広い場所で、個人行動なんてしたら、すぐに迷子になってしまう。

仁や翔太たちは、班を抜けて来てあげると言っていたが、実際のところ、難しいだろう。

いっちーの長い説明が終わり、ファンタジーランドの中へ入る。

凄かった。ネズミーランドと同じ……いや、もっと広く感じた。

僕は、ファンタジーランドのパンフレットを見た。

予想通り、パンフレットには全体MAPが記載されていた。

このファンタジーランドというのは、いくつかのエリアがあるらしい。

一つ目のエリアは“ファンタステックゾーン”

主に、ジェットコースターやお化け屋敷など、アトラクションが豊富なところみたいだ。

二つ目のエリアは“ショップ ザ ファンタジア”

名前の通り、大規模なショッピングエリアとなっている。

三つ目のエリアは“ファンタジー ゲームランド”

ここは、色々な対戦ゲームなどがあるらしい。真之介や内山が好きそうなお店だな。

四つ目のエリアは“ファン フード”

飯を食べるところがかなり多いエリアだ。ここで、今日の昼飯は食べても良いな。

僕たちが最初に向かったのは、“ファンタステックゾーン”であった。

内山は“ファンタジー ゲームランド”に行きたかったみたいだが、多数決で“ファンタステックゾーン”に行くことになったのだ。

“ファンタステックゾーン”は入り口を真っ直ぐ進み、ゲートを抜けた先にあった。

これまた、とても広い。

絶叫マシンや、お化け屋敷。それに、なんの乗り物か分からないものまで、数多くのアトラクションが目につつた。

「あれ乗ろうぜ！」

“ウルトラゾーン00”

吉沢さんが指さした先にあったものは、もちろん絶叫マシンであった。

絶叫マシンの中でもかなり手の込んでいそうなものである。連続ループや様々な角度のカーブなど。絶叫マシンが嫌いな人にとっては、まず乗ってはいけないものだろう。

「お、良いね。内山と、根本さんは大丈夫かい？」

「そ、そうですね、あ、あまり、す、す、好きじゃないんですが……」

「根本さんは？」

僕は、内山の話最後まで聞かず、根本遥ねもとほのかに、乗れそうかどうか訊ねた。

「問題ありません」

なんとも淡泊な返答だった。

根本遥。

とにかく感情を表に出さないタイプである。というより、感情があるのかすら疑問だが……。

部活は、翔太の話によると、剣道部に入っているみたいだ。なかなかの美人ではあるが、感情を出さない分、存在感がどうしても薄い。

それ以外の情報は、申し訳ないがもっていない。何せ、話したことが一度もないからだ。

僕は、やっぱり、吉沢さんがこの班にいてくれて良かったと思った。

「じゃあ、早速行こうぜ！」

吉沢さんに牽引されるような形で、僕たちは“ウルトラゾーン”と言われる、化け物のようなアトラクションのある方へ向かった。その乗り物があるところに到着すると、看板が立てられてあった。

“現在、この乗り物の待ち時間は20分です”

20分なら許容範囲だろう。

混雑時のネズミランドに行ったことがあるのだが、その時、乗り物の待ち時間は、最低でも60分待ち。

人気のアトラクションでは、120分待ちとか180分待ちとか、異常な数値をたたき出していたのを今でも覚えている。

正直、1つのアトラクションに乗っただけで、1日が終わるとか、あり得ません。

ファンタジーランドも、9月上旬ということもあり、なかなかの混雑具合だ。

それで、20分待ちなんていうのは、かわいいもんだ。

僕たちは、話すわけでもなく、当たり前かのように、列に並んだ。だいたい20分経つと、僕たちの順番がまわってきた。

マシンに乗る。

内山と、吉沢さんは一番最前列に乗り、僕と根本さんはその後ろの席に座った。

僕たちは係員の指示通り、ベルトを締めた。

絶叫マシンだけあって、ちょっとした緊張感がこみ上げてくる。

「ちょっと、うっちゃん、ベルト締められないの？」

吉沢さんは、笑いを堪えて、内山のベルトを締める手伝いをしていった。

「い、痛い、痛いです〜」

「痩せるか、今我慢するか、どっちかにしなさい！」

正論です。

「根本さん、ベルトきつくない？」

僕は、隣の席に座っている根本さんに尋ねた。

「問題ありません」

「そ、そか。アハハ」

いやー、実に淡泊な返事で何よりだ。

マシンが動き出す。

僕も緊張感からなのか、ドキドキが止まらない。
どこまでも続く坂を上り終わると、マシンはスピードを上げ急降下
をし始める。

「ふぎゃーあああああ」

急降下した途端、内山の叫び声がした。

なんて声しやがる……

だが、僕も他人の事に目をやっている場合ではなかった。
この絶叫マシンの絶叫さは半端ない。

コースクリューや傾斜のあるカーブもそうだが、とにかく、スピードが今まで乗ってきた絶叫マシンよりも断然速い。これこそが、“ウルトラゾーン”だと言わんばかりの、手洗い歓迎を受けた。

どれぐらいの時間が経ったのだろう。

やっと、“ウルトラゾーン”から解放された。

マシンから降りた僕たちは、近くにあったベンチに座り、休息をとることにした。

「みんな、大丈夫だったか？」

僕は、乱れた髪を直しながら訊ねた。

「余裕余裕！」

吉沢さんは、笑顔でピースをする余裕さえ見せた。

「問題ないです」

お決まりの言葉ですね。

「ハア……ハア……」

「うっちゃん、大丈夫？ベルトきつかったの？」

吉沢さんは、内山に声をかけた。

内山の表情は、死んでいる魚のような表情をしていた。

絶叫マシン巡りをしようと話していたが、内山の体調も考え、僕たちは休憩がてら、お化け屋敷に入ることにした。

「ザ 吸血鬼」

タイトルからして、このお化け屋敷のテーマは吸血鬼。その建物の中に入ると、暗闇が僕たちを覆った。中は、少し肌寒く、それが恐怖心を煽っているのだろう。

お化け屋敷って、カップルで入ると、女性が怖がって、男性にくっ

つくというイメージがある。
だが、僕たちの班では、まったく言っていないほど、そんなことはなかった。
いつもと変わらない顔をし、むしろ、ちょっと物足りない顔をしながら暗闇を歩く吉沢さん。
どんなことが起きようと、表情一つ変えない根本さん。

「ひえ〜!!!」

で、僕の腕をぎゅっと掴んで離さない内山。

「おい、内山。H A ・ N A ・ S E ! !」

「ちょ、ちょ、これは、恐いって、ね、ね、レベルじゃ、な、ならないですよ!!」

これは想定外だった。

内山のおかげで、僕の服は少しずつ伸びていくのが分かった。

「うっちゃん、恐がりだな〜」

クスツと笑いながら、前を歩く吉沢さん。
それに、僕たちは続いた。

小刻みに体を震わせていた内山を除いて、僕たちは何事もなかったかのように、お化け屋敷を出た。

「楓くんの、服！めちゃくちゃ伸びてるんですけど！」

吉沢さんは、僕の方を見ながらケラケラと笑っていた。

僕の服は、完全に伸びきっていた。

結構、お気に入り服だったので、内山に弁償させたかったが、さすが僕。紳士な気持ちで、内山を許すことにした。

「な、内藤くん。ご、ごめんね。」

「気にすんなって！服なんて買えば、いいことだしさ」

な？僕ってば、凄くいい奴だろ？

「そ、そうだよな、ま、ま、また、買えばいいよね」

内山はニコツと笑った。

なぜだか、僕はムカつときた。

それは、内山の呆気ない返事だったのか、ニコツとした表情だったのかは、分からないが、とにかく、飛び膝蹴りをしたくなった。

P・10 たった一枚の写真

9月の上旬ということもあり、まだ夕暮れ時という感じではなかったが、時刻は午後3時過ぎ。

修学旅行も後半戦に突入していた。

1泊2日の旅ではあるが、次の日の午前中には帰る予定なので、事実上、遊べるのは今日だけだ。

「よ、楓！」

ファンタジーランドのマップを見ながら、次はどこへ行こうかと考えていると、急に僕を呼ぶ声がした。
僕たちは声のする方へと目を向けた。

「おお、仁！」

ニコツと笑いながら、僕の方へ近寄ってきたのが、仁だった。
その後ろから、翔太や真之介、山本さん。そして、カノンの姿が確認できる。

1班のメンバーだ。

仁の話によると、1班のメンバーも、今までファンタスティックランドで遊んでいたらしい。

それで、たまたま、僕たちの班を見つけ、声をかけたのだという。なんとという、偶然だ。

「今から、真之介のリクエストで、ファンタジーゲームランドに行くんだけど…どうする？」

仁が、3班の全員に伝わるよう、大きな声で訊ねた。

「私は良いよ！結構、アトラクション乗ったしね。うっちゃんと、遥は？」

「あ、はい。だ、だい、大丈夫です。はい。」

「問題ないです」

吉沢さんは、二人の返事を聞くと、元気よく仁に言った。

「んじゃ、早速行こうぜ！」

“ファンタジーゲームランド”

それは、ファンタスティックランドとは、全く別の世界が広がっていた。

ファンタジーゲームランドは、一つの建物の中にあり、カードゲームやクイズゲーム、格闘ゲームなど、様々なアーケードゲームがあった。

例えるなら、ゲームセンターをもの凄く広く作った感じだ。

とりあえず何からやろうか、1班のメンバーと一緒に、ファンタジーゲームランド内を歩いていると、まさかのボーリング場を見つけた。

「マジかよ……」

いくら大規模なテーマパークだからといって、ボーリング場があるとは思わなかった。いや、誰も思わないだろう。

僕が、啞然としていると、翔太と真之介がテンションを上げはじめた。

「こりゃ、やるしかねえだろ！」

「ですな、ですな！ボーリング大会としゃれこみましょう！」

翔太と真之介のテンションが、こうなったら手が付けられないことぐらい、ここにいる誰もが分かっていたのだろう。

結局、僕たちはボーリングをすることになったのだった。

僕たちは、ボーリングの受付を済ませると、早速、投げる順番を決めた。

最初に投げるのは、もちろんこの男。秋山翔太だ。

「見てろよ！この、天才ボーラー秋山様が、ストライクを出してやるぜ！」

ストライク宣言とは、さすがの度胸だ。

僕は、翔太の投げる様をじっくり見てやろうと、近くにあるイスに座った。

「かあくん、ひさしぶり！」

急にカノンの声が聞こえた。僕はびくつとしながら、隣を見る。そこに座っていたのは、間違いない。カノンだった。

「よ、よう。」

驚いた。まさか、僕の隣のイスに座っていたのがカノンだったとは……
僕とカノンは、あの夏休み、音楽室で会った日以来、一度も会話をすることはなかった。

音楽室に行けば、カノンと話せたのかもしれない。でも、僕は、決して音楽室に行こうとはしなかった。なぜなら……

「あー、もう！ー！指滑った」

凄く悔しがる翔太。

スコアを見ると、ギターのマークが出ていた。

「はは。翔太、ストライク宣言出しておいて、それはねえだろ。」

「次がありますぞ！秋山氏！ー！」

周りは、翔太のナイスガーターに大爆笑だった。だが、僕とカノンの間には、どこか気まずいものがあった。正直、カノンとどう接して良いのか分からなかった。

「おい、楓。お前の番だぞー」

仁の声で僕は、自分に順番が回ってきたことに気づいた。

ボーリングなんて、中学生以来やったことがなかったな……

僕は、座っていた席から離れ、一度大きく屈伸運動をした。そして、ボールを持ち、思いっきり真ん中を狙って投げた。ピンは勢いよく倒れ、なんと全てのピンが倒れた。

やった！ストライクだ。

周りは、今日初ストライクだったこともあり、大盛り上がりを見せていた。

僕は、自分が座っていた場所に戻る。

「かあくん、凄い凄い！」

カノンは、僕の方を見ながら言った。

「ま、まあな。」

結局、僕が出したストライクは、一度きりだったが、まずまずのスコアだったので、良しとしよう。

その後も、ボーリング大会は予想以上の盛り上がりを見せた。翔太は、連続ゲーター勝負を真之介と内山とでしていた。勝負になっているのかすら疑問だったが、本人達が楽しんでいるなら、それもそれで良いだろう。

さて、本勝負は、吉沢さんと仁の一騎打ち。

吉沢さんは、小さい頃からボーリングをやっていたことだけはあり、素晴らしいフォームでストライクをどんどんとっていく。

一方、ボーリングをしたのが今日で初めてという仁。最初の頃は、どう投げて良いのか分からず、ゲーターを出していたが、さすが、ずば抜けた運動神経をもつ男。すぐに、ストライクの取り方が分かったみたいだった。

「宮本くんも、吉沢さんもボーリング上手いな。」

カノンは、楽しそうに二人の一騎打ちを見ていた。

楽しそうに仁と吉沢さんのことを見ていたカノンを、僕はじっと見つめていた。

カノンは堺先輩のことを、どう思っているんだろう……

あの夏休み。音楽室で、カノンと堺先輩が楽しく話していた光景が浮かんでくる。

僕の居場所は、そこにはなかった。

あそこにあっただのは、堺先輩とカノンの居場所だけ……カノンが、なんだか遠い所へ行ってしまおう。そんな気がしてならなかった。

「よっしゃ……私の勝ちだな！」

「さすがに、最初の連続ギターが響いたな。こりゃ完敗だ」

ボーリング大会は、スコア250をたたき出した吉沢さんの勝利で終わった。

仁は、悔しがりながらも、とても満足した表情を見せていた。

ファンタジーゲームランドから出ると、陽が沈みかけていた。時間を見ると、6時過ぎ。

いつの間に、こんなに時間が経っていたのだろう。

僕たちは、ファンタジーランドの出口へと向かい、歩き出した。

「それにしても、楽しかったな！ボーリング」

翔太は、満足そうな表情で言った。

「つか、翔太。最終的には、ガーター連続記録で勝負してただろ？」

「あれは、その……、あれだ！真之介とうっちに、合わせただけ。」

「

仁の鋭いツツコミに、テンパリながら答える翔太。

「それはあんまりですぞ？秋山氏。」

「そ、そうだ、そうだ。お、俺たちより、た、楽しんでた、じゃないか？」

「そ、そうだっけ？あは、あはは……」

その光景を見ていた、僕たちもまた、自然に笑みを浮かべていた。

お城のようなアトラクションが見えた途端、真之介は急に立ち止まった。

「ん？どうした、真之介？」

真之介は、にこっと笑い、鞆からデジカメを取り出した。

「修学旅行の記念に、一枚。写真でも撮りましょうよ！」

「良いね。撮ろうぜ！」

僕は、気づくとそんなことを口にしていた。

確かに、修学旅行の記念に一枚、集合写真を撮るのも良いな。

偶然、1班と出会い、一緒に行動して。ボーリングという、いつでもできる遊びをしたのだが、とても楽しかった。

こんな楽しい修学旅行が、もう終わろうとしている。

僕は、一人一人の表情を見た。

早起きをしたからなのか、眠そうにしている人もいれば、お腹が空いた〜という仕草をとる人もいる。

カードを必死に見ている奴もいれば、ボーリングの余韻に浸っている奴もいる。

それでも、みんな本当に満足している表情をみせていた。

だからこそ、まだ終わってほしくなかった。

もっともっと、みんなと遊んでいたい。みんなと笑い、楽しみたい。

「じゃあ、20秒タイマーかけますから、良い表情を頼みましたよ！」

真之介は、そういうと、タイマーをセットし始めた。みんな、カメラを前に、髪の毛を直したり、立ち位置を確認したりしていた。

僕は、一番端の位置を確保した。

中央だと、カメラ写りが悪くなる可能性があるからな。

「楓。カノンちゃんの隣じゃなくて良いのか？」

そう、僕の耳元で小声で言ってきたのは仁だった。

「なんで、僕がカノンの隣に……」

「ま、楓が良いって言うなら、別に良いんだけどな。」

仁は、そう言うと、僕の隣の位置に立ち、髪の毛を直し始めた。

僕はカノンの方を見る。

カノンは、楽しそうに山本さんや吉沢さんと話していた。

カノンの隣……か。

正直、カノンの隣に行きたいとは少なからず思っている。でも、気まずい。

僕は、夏休みの出来事以来、カノンに対して、どう接して良いのか分からないのだ。

それに、カノンの隣になんて、今さら行けるはずが……

「カノンちゃん」

急に仁がカノンを呼んだ。

「え？」

カノンは、吉沢さん達と会話をするのをやめると、仁の方を向いた。

「楓が、カノンちゃんの隣に行きたいんだってさ。ちょっと、来てくれない？」

カノンは、僕の方を見ながら、笑顔を見せ、小走りで僕の隣に来た。

「それならそうと早く言ってくれば良いのに」

「べ、別に頼んでなんかねえって。」

「こらこら。せっかく、楓のために来てくれたカノンちゃんに、失礼でしょうが」

仁が、僕の頭をぺしっと叩く。

「けっ」

「よし、俺が一番前な！」

翔太は急にカメラの前に立ち。片足を上げ、ピースをする。

「お、タイマーがかかったみたいですよ。」

真之介も、カメラの前に立ち、翔太と同じように片足を上げ、ピースをした。

「おい、二人が邪魔で俺たち写ってないんじゃないか？」

「大丈夫大丈夫！仁たちの分まで、ちゃんと写っておいてやるよ！
つて、うわ！」

片足でピースをしたまま、後ろを振り返ったのが不運だった。翔太はバランスを崩し、大きく転倒した。それに続き、真之介も転倒をしたのだった。

パシャ！！

フラッシュとともに、カメラのシャッター音が鳴り響く。

「ええええええ！」

真之介と翔太は啞然としていた。

「だから、言わんこつちゃない」

みんなは、翔太と真之介のやりとりを見て笑っていた。

僕もカノンも、その光景を見ながら笑った。なんの違和感も、気ま
ずさもなく、普通に笑っていた。

カノンの笑顔はとても可愛かった。

修学旅行で撮った集合写真は、これが最初で最後の一枚だった。

たった一枚の写真。たった一枚の写真だけど、この写真を見るたびに、僕は思い出すんだ。

内山や真之介と、行きの電車でカードゲームをしたこと。吉沢さん達と、いろんなアトラクションに乗って、声が枯れるぐらい絶叫をしたこと。

1班と合流し、ボーリングをしたこと。

そして、写真を撮るとき、カノンは何のためらいもなく、僕の隣に来てくれたこと。

修学旅行は、あっという間に終わってしまったけど、この思い出は、僕の心の中で、これからずっと残っていくだろう。

「楓。学校遅刻するわよー！」

下の階から、母さんの声が聞こえた。

「分かったよー！もう行くー！」

僕は、修学旅行で撮った写真を、机の引き出しに、そっとしまつと、鞆を持ち、自分の部屋を後にした。

翔太が学校を休んでから、丁度一週間が経った。

僕と仁は、翔太が休んで一日目や二日目ぐらいまでは、風邪でも引いたんじゃないか。脳天気な翔太のことだから、何かちょっとしたトラブルでも起こしたのではないかと、笑い話のネタにしていた。

だが、三日、四日と日が経っても、翔太が学校に来ることはなかった。

僕たちは、少々心配になり、メールを送った。だが、翔太からメールの返事が来ることは一度もなかった。

2時間目の休み時間。

僕たちがいる教室は、翔太がいないからなのか、いつもよりも静かな雰囲気を感じられた。

これほど翔太という人物は、2-Aのムードメーカー的存在として大きく活躍していたのかと、この時ばかりは、ひしひしと感じるようになった。

「翔太の奴。どうしちゃまったんだ？」

僕がいる席に仁は来ると、心配そうな表情をしながら、僕に尋ねた。

「んー、どうしたんだろうね。メールの返事も来ないし」

僕も、なぜ翔太が学校を休んでいるのか、検討もつかなかった。

翔太は、ちよつとやそつとの病気では、学校を休む奴ではない。僕たちが高校一年の時、翔太は風邪を引いて熱があるのにも関わらず、学校を休むことなく登校してみた。

「風邪で学校を休むなんて、風邪に負けたみたいで嫌だ」と話していたぐらいだ。

だが、そんな翔太も、一度だけ学校を休んだことがあった。それは、お婆ちゃんが風邪を引いて、熱を出したときだった。

自分のことはお構いなしなのに、お婆ちゃんのことになると、なぜか熱くなる翔太。

だから、今回もお婆ちゃんが風邪を引いて休んだのではないかと、僕と仁との間で予想したのだが、それにしても、一週間経った今でも、翔太は学校を休んでいる。これは、不自然であった。

もちろん、この日も翔太は学校に来ることはなかった。

水曜日の朝。翔太が学校を休んで8日目になった。

「翔太の奴。どうしたんだろうな？」

「何か、大きな事件に巻き込まれたんじゃないの？」

翔太の異常な欠席の多さに、僕や仁たちだけじゃなく、2 - A全体が、翔太を心配するようになっていた。

体育祭が、来週あるというのに、肝心のムードメーカーがいないと、2 - Aのテンションも上がらないだろう。

- 翔太どうした？みんな待ってるぜ！ -

- 病気になったか？見舞い行ってやるから、連絡くらいよこせよな！ -

僕と仁は、翔太にしつこいと思われるぐらいの、メールを送った。だが、翔太からメールが送られてくることは一度もなかった。

心配だった。最初は、すぐ学校に来るだろうと思っていたのに、もう8日も経っている。

僕や仁だけじゃない。真之介や吉沢さん、カノンだって、翔太が学校を休んでからというものの、相当心配している様子だった。

朝の会のチャイムが鳴った。

僕たちは自分たちの席に戻り、担任のいっちーが来るのを待った。チャイムが鳴り終わってから何分か経ったあと、いっちーが教室へと入ってきた。

「内藤氏。磯辺先生の様子が、おかしいですよね？」

隣の席の真之介が、首を傾げながら僕に尋ねた。

確かに、いっちーの表情はいつもの機嫌の良さそうな表情ではなく、暗く険しい表情だった。

誰か、悪いことでもしたのだろう。

ふと、いつちーのあとに続いて、教室へ入ってきた人がいた。

「翔太！」

僕と仁は、ほぼ同じタイミングで席を立ち、同じセリフを言った。翔太と、8日ぶりの再会だった。

「……………」

「翔……太……？」

だが、今日の翔太は、いつもの翔太ではなかった。

いつもなら、テンション全快で教室に入ってくる翔太が、今日はやけに大人しい。

それに、病気になった人みたいに、体は痩せ、やつれている様子だった。

「宮本、内藤。とりあえず、座りなさい」

「はい……………」

僕と仁は、いつちーの指示通り席に座った。
なんだ、この違和感は……どこかで見た光景と似ている気がする……

「どうしたのでしょうか、秋山氏……元気がないみたいですね」

真之介も、随分と心配した様子で、翔太のことを見ていた。
いや、僕や仁、真之介だけじゃなかった。

2-Aにいる誰もが、翔太を心配そうな目で見ていたのだ。

翔太は、下を向き、暗い表情だった。

「みんなも、分かっていると思うけど……翔太は、ここ一週間ほど
学校を休んでいたわよね？」

確かに休んでいた。それがどうしたというのだ。いったい、何があ
ったんだ……

僕たちは、食い入るように、いつちーの話を聞いていた。

「それがね……」

いつちーは、一息呼吸を入れたあと、再び喋り始めた。

「翔太のお婆ちゃんが、先週、亡くなったの」

！？

まさか……嘘だろ？！

あの、元気そうだった翔太のお婆ちゃんが死んだ？！

僕は、その事実を認めることができなかった。

翔太の方を見ると、翔太は黙り、ただただ、下を向いていた。

教室は一時騒然となった。

それもそうだ。翔太のご家族が亡くなったと聞いたのだから。衝撃を受けて当然。このリアクションは想定されることだ。

いっちーが、消火活動に入り、なんとか教室は静けさを取り戻した。

「翔太の友達は分かっていると思うけど、翔太はお婆ちゃんと二人

きりで暮らしていたの。」

そつだ。翔太は、お婆ちゃんと二人で暮らしていた。

翔太の母は、翔太が小さい頃、精神の病で自殺をし、父は、度重なる出張で家を出たままだった。

翔太の面倒を見ていたのは、お婆ちゃん。ただ一人だった。

「お婆ちゃんが亡くなって、ここで生活するのが困難になったらしいわ。」

僕は、いつちーの言っている意味がよく分からなかった。

結論から言うと、どういふことなのだろう…

すると、僕の心を見透かしたように、いつちーは話を続けた。

「だからね。体育祭が終わったら、翔太はお父さんと一緒に住むために、この学校をやめることにしたのよ。」

やめる！？翔太が、学校を？

これもまた、認めたくない衝撃的な話だった。

再び、教室が騒がしくなる。

「ほんとかよ、翔太！！！」

そんな中、仁の声が、教室全体に響き渡った。
僕もその声に驚き、後ろを振り返る。

仁は、席から再び立ち、じっと翔太の方を見ていた。

「おい、本当なのかよ！」

「宮本。ちょっと、落ち着きなさい」

「これが落ち着いて聞ける話かって！おい、翔太！」

仁は、今までにないぐらい、感情的になっていた。

感情的になっていたのは、仁だけじゃなかった。僕も、もちろんシ
ョックを隠しきれないでいた。

手や足は震え、言葉に詰まる感覚だ。

なぜだ。どうして、やめるなんて事になっている。それも体育祭後
にやめるなんて、1週間とちょっとしかないじゃないか。

「……………本当さ」

「何だつて？」

仁がもう一度、翔太に聞き返す。

僕も、前を向き、翔太の方に目を向けた。

「磯辺先生が言っていたことは、全部本当だよ」

翔太から出た言葉は、耳を疑うようなものであった。

クラスは1時間目の授業が終わった今も、騒然としていた。

バン！っと、机を叩くような音。

休み時間だというのに、僕たちの教室はその音で、シン……と静まりかえっていた。

僕も、何が起きたのか辺りを見回すと、仁が翔太の机を叩き、翔太

に問いつめている光景があった。

「どづいっことだよ、翔太」

「どづって、さっき話した通りさ」

翔太は、何を言っているんだという表情を仁に見せていた。どう見ても、いつもの翔太ではなかった。

「そうじゃねえよ。なんで、俺たちに何も言わなかったんだよ」

「……」

翔太は再び黙り、下を向いた。

「おい、人の話聞いてんのかよ！」

仁は翔太の胸ぐらを掴んだ。

教室からは、悲鳴ともとれる声が聞こえる。

「やめなよ、仁。やりすぎだよ？」

さすが、生徒会長の吉沢さんだ。

翔太と仁のもめ事に気づくと、すっと仲裁に入ってきた。

「ちょっと、黙っててくれ。これは、俺たちの問題だ」

部外者は近寄るな。そう、言っているようだった。

圧倒的な威圧感だ。

さすがの吉沢さんも、これ以上何も言えないみたいだった。

真之介やカノンも、仁と翔太の様子を黙って見ていた。いや、黙って見ていることしかできなかったのかもしれない。

「翔太が心配で、メールだって何回も何回も送ったりしたんだ。俺だけじゃない。楓だって、お前のことが心配で……」

「……にが分かるんだよ……」

翔太は仁の顔を睨みつけるような目で見ると、再び大きな声で言った。

「お前に、何が分かるんだ。って言うってんだよ！」

「……………」

「ばっちゃんはな、俺の大事な人だったんだよ。この世で一番大事な人だったんだよ！大事な人が急に消えちまったんだよ！」

翔太は、体を小刻みに震わせ、それでも仁を睨みつけるように見た。

「分かるか？それが、どんな気持ちか、仁に分かるかよ！」

「分からないさ！だけど……………だけど俺たち……………親友だろ？なのに、なんで何も言わないで……………」

「親友だ？」

翔太は、仁の話を横切り、鼻で笑った。

「笑わせんなよ……………何が親友だよ。何が友情だよ。結局、友情なんて、使うか使われるかの関係しかないん……………」

もの凄い音がした。

仁が、翔太を殴ったのだ。

翔太は、勢いよく転倒し、その勢いで近くにあった机もいくつかが倒れた。

教室からは、またしても悲鳴のような声が聞こえ、騒然となっていた。

僕は、啞然とその光景を見ていたが、仁が翔太を殴った時、ふと我に戻り、仁を止めに入った。

「見損なつたぞ！お前ってそんな奴だったのかよ！」

仁は、僕の腕を払うと、教室から出て行った。

翔太は、仁に思いつき殴られたからなのか、倒れたまま動かかなかった。

吉沢さんも、仁と翔太のやりとりに見入ってしまったらしく、今さらながら翔太の方へと駆け寄ってきた。

「ごめん、吉沢さん。翔太のこと頼むわ。」

僕は吉沢さんに翔太のことを任せると、仁を追いに教室を出た。

こんなに感情的になつた仁を見たのは初めてだった。

見た目は不良っぽいが、根は凄く良い奴で。

自分の悪口を言われても平気でいられるくせに、僕や翔太の悪口を言っている奴には無気になる仁。

僕や翔太だけじゃない。偏見せず、誰に対しても優しく接することができる仁が、翔太を殴つたのだ。

僕は、仁を探した。

授業なんてどうでも良かった。とにかく、仁に会わなきゃ。そう、思ったのだ。

だが、2時間目の授業を潰して探しても、仁の姿はどこにもなかった。

仁と会えたのは、放課後だった。

僕は、職員室に呼び出された。なにやら、今日のもめ事の当事者として、事情を聞くとのことだった。

僕が職員室に入ると、仁の姿があった。仁は、いつちーに酷く説教をされているみたいだった。

仁は、僕の存在に気づくと、照れ笑いをしてみせた。

仁の様子を見たとき、僕は、なんだか安心した。いつもの仁に戻っていたから。

感情的で、人を威嚇するような状態ではないのだと、確認できたからなのかもしれない。

なんとか説教と事情聴取が終わり、僕たちは職員室を後にした。

「ごめんな、楓」

照れ笑いをしながら、仁は僕に謝った。

「なあに……謝る事なんてないさ」

放課後ということもあり、廊下を歩いても、人とすれ違うことはほとんどなかった。

僕たちは、鞆を取りに自分たちの教室へと向かった。

「なあ、楓……」

「ん、どうした？」

「ちょっと、付き合ってくれないか？」

急にどうしたのだろうか……

だが、迷うこともなく、僕は仁に返事をした。

「良いぜ」

僕たちは、自分たちの教室に戻り、鞆を取ると、学校の屋上へと向かった。

屋上に到着し、扉を開けると、スーッと心地よい風が僕たちを出迎えてくれた。

空は夕陽でオレンジ色となっていて、なんだか幻想的である。

「んー、やっぱり屋上は気持ちいいな！」

仁は背伸びをしながら、気持ちよさそうに言った。

「だな。今から、ぐっと寒くなるんだろうな。」

「また、夢のないことを。」

仁は僕の発言にふふつと笑った。

そして、空を見ながら、大きく深呼吸をし、屋上から学校全体を見渡した。

「俺たちがさ……」

「ん？」

僕は、仁の隣の位置で、仁と同じく学校全体を見渡した。結構高いんだな…ここ。

「俺たちが出会って、友達になってから、まだ2年しか経ってないんだよな」

「まだ、それしか経ってないのか…」

「でも、俺はこの高校に来て、絆の深さって年数なんかじゃないんだ。って、思えたんだ。本当に友と呼べる存在に出会えたと思えたから……」

仁は少し間を置き、再び話し始めた。

「でも、俺だけだったのかな……」

「え？」

「俺だけが、楓や翔太のこと、親友だと思ってたのかな……ってさ」

そんなことないって、言いたかった。

でも、翔太が見せたあの態度が僕の頭を過ぎると、僕は仁に何も言うことができなくなった。

「なんか俺、凄くダサいよね。一人で親友ぶってたのかって。」

仁は笑っていたが、その横顔はどこか寂しく、悲しい表情であるかのようだった。

「僕は……親友だと思ってるよ。今でも。仁や翔太のこと。」

僕が今言えることは、これだけだった。

「親友を殴っちまった……俺は……最低だよ」

仁は、自分の拳を見つめていた。

この時、仁の本当の気持ちがあったような気がした。
仁は、決して翔太に対して、怒ってなどなく、僕と同じ気持ちだったのだ。

親友だと思っていた翔太の態度が寂しかっただけ。
翔太のお婆ちゃんが亡くなったことも、学校をやめることも。無論、僕たちにできることは何もなかったのかもしれない。でも、一言言

って欲しかった。それが、本当に残念だった。

翔太は言った。“友情なんて、使うかわられるかの関係だろう”と。僕たちは、それだけの関係だったのか。

一緒に飯を食いに行ったり、ゲーセンで遊んだり、なんてことない会話で楽しんだり。時には喧嘩し、時には笑い合った。それ全てが、偽りだったのだろうか。

日が沈むのを僕たちは、ただいつまでも見続けていた。

この日から、僕と翔太と仁の関係には、大きな亀裂が入った。休み時間に喋ることも、一緒に帰ることも。一緒に遊ぶことだってしなくなった。

無情にも、翔太との別れは、刻々と近づいていた。

P : 1 1 亀裂 (後書き)

次回更新予定日 : 2月13日
第一話分掲載予定

僕と仁と翔太の関係は、亀裂が入り、元に戻ることはなかった。翔太の別れの日だけが刻々と近づく……数日も経たないうちに、翔太は僕たちの学校から姿を消すのだ。

今日も一人片隅、翔太は誰と喋るわけでもなく、教室から見える空をじっと眺めていた。

僕は複雑な気持ちだった。

翔太が学校をやめるのが、どうやっても変わらない事実だとするならば、笑顔で送り出してあげたかった。

だが、そう思うたびに、翔太が言っていたことが僕の頭を過ぎるのだ。

“友情なんて使うか使われるかの関係だ”

と。

僕は、この言葉を聞いたとき、本当にショックだった。使うとか、使われるとか。一度も考えたことはなかったし、翔太がそんなこと

を口にするなんて思ってもいなかったからだ。
だが、事実。翔太は、あの時そう言った。親友だと思っていた関係
が、跡形もなく、見事に崩れた瞬間だった。

こんなに絆とは、もろいものなのだろうか……

今日は体育祭の日だ。

体育祭。僕たちの高校では、特別なルールがあった。

体育祭に参加可能な学年は2学年のみ。

クラス対抗戦で、色々な競技で順位を付け、得点を競い合う。

得点は1位が10点。2位が5点。3位が3点。4位が1点となっ
ている。

最後、残った2クラスが、ドッジボールをし、真の1位を決めると
いうものだ。

もちろん、事前に自分の出る種目は決めておく。ちなみに、僕が出
る種目は、男子400mリレーと綱引きだ。

仁は走り幅跳び、高跳び、長距離走、リレーなど、様々な種目を受け持つことになった。

目指すは優勝だ。

優勝すれば、商品券1万円が、優勝したクラスの生徒全員に配られるという豪華企画だ。

僕と仁は、優勝するべく、この日のために体調を万全に仕上げてきた。僕たちに敵などなかった。

体育祭当日。天候は雲一つない、見事なまでの晴天であった。

開会式が終わり、ようやく体育祭が開幕した。

体育祭の前半戦。どのクラスも一歩も譲らない展開を見せていた。だが、体育祭が中盤になる頃には断然Cクラスがトップの座に立っていた。

さすがは、Cクラスだ。根性のねじ曲がった奴も多いが、運動神経の良い奴も豊富に揃っているだけはある。

次いでAクラス。Dクラス。Bクラスと並んだ。

1位と2位との差は、およそ50ptまで離されていた。

だが、とりあえず2位になれば、最後の決勝戦には出られる。

男子では、仁が、ずば抜けた運動神経で、他クラスを圧倒したが、僕たちのクラスで運動神経が良いのは、仁と田端洋平だけだった。他はというと、真之介や内山など、オタク揃いであるため、なんとも戦力的には低くなってしまふ。

女子では、空手部部長の吉沢さんや、剣道部の根本さんが活躍を見せた。

また、カノンも音楽部でスポーツが不得意とのことだったが、それでも一生懸命頑張っていた。

「カノンおつかれ」

僕は、障害物走から帰ってきたカノンに、事前に買っておいたジュースを手渡した。

「かあくん、ありがとう！」

カノンは疲労していた様子だったが、嬉しそうな表情を僕に見せてくれた。

次の種目は400mリレーだ。

それが終われば、一旦休憩が入り、そこから上位2クラスが決まる。そして、決勝戦へ。

僕たちは、現在2位ではあるものの、このリレーでビリになれば、2位から3位、4位へと転落する可能性もあり、油断はできない状況だった。

Aクラスの400mリレーの走者は、僕と仁と田端。それに、今日腹痛で欠席した陸上部員の代理で真之介が急遽参加することとなった。

これは、酷い結果になりそうだ。

僕は、嫌な予感を抱えながら、ストレッチを入念に行い、リレーの準備をした。

そして、リレーは始まった。

第一走者は僕だ。

スタートの合図とともに、僕は全力で走った。Cクラスの生徒が僕を追い抜いていく。

なんとか、引き離されないように100mを全力で走り、真之介へとバトンを渡した。

頼むぞ！真之介！

真之介はバトンを受け取ると、腕をぐるぐる回しながら走っていった。なんて、格好悪い走り方だ。

予想通り、真之介はCクラスに距離を離されるだけではなく、BクラスDクラスの生徒にも抜かされていた。

ポロポロになりながらも、真之介は田端へとバトンを渡した。

田端は無表情で、走り始めた。

早い。

田端は予想以上に足が速かった。

ダントツでビリだったのだが、田端の俊足で、400mリレー現在3位のDクラスとの差をこれでもかというくらい縮めたのだった。

それでも、一人も抜かすことなく、仁へとバトンを繋いだ。

さあ、残るは仁だけだ。

仁は、田端からバトンを受け取ると、唇を一度舐め、ニヤッと笑い、全力で走った。

僕は目を疑った。

仁は、信じられないスピードでDクラスに追いつき、軽く追い越した。

「さすが仁!!」

「このまま、Bクラス、Cクラスも抜いちゃえー!!」

「頑張れー、仁!!」

Aクラスの生徒から仁は歓声を浴びていた。

だが、仁は表情を変えず、このリレーを楽しんでいるかのように、全力で走っていた。

結局、Cクラスを抜かすことはできなかったものの、2位を維持することができた。

「さすが仁だな」

「いやいや、田端や楓の頑張りがあつたからだぜ」

仁はそういうと、ニコツと笑い、タオルで汗を拭いた。

休憩時間になり、放送が流れる。

- 皆さん、体育祭ご苦労様です。今から、20分間の休憩時間です -

20分が……食堂で飯を食べるにはちょっと短いなど、仁たちと話しているとき、再び放送が流れた。

- 今から、オタクダンスによる、アニソンパレードを開始します -

オタク……ダンサーズ？

アニソン……パレード？

僕は何か嫌な予感がした。その予感は、すぐに的中することとなった。

体育祭の行われている校庭の中央には、いつの間にか特設ステージが設けられ、そこに現れたのは、何人ものむっさい男達だった。その中にいたのが、内山と真之介だった。

「いきますぞー！ふおー！ー！ー！ー！！！！！！」

真之介のかけ声と共に、様々なアニメソングが流れ、むっさい男達は揃って踊り始めた。

なんてこった。

てか、真之介の奴。いつの間にステージなんかに……

悪夢のような舞は休憩時間の20分間、ずっと続いた。僕のリアクションとは裏腹に、周囲のオーディエンスは、大爆笑。テンションもヒートアップしていた。

休憩も終わり、上位2クラスが発表された。
1位はもちろんCクラス。2位は、リレーで頑張った甲斐もあり、
僕たちAクラスであった。

上位2クラスが決まると、すぐに、決勝戦の準備が始まった。

ドッジボールのルールも少し変わっていて、外野はない。サドンデスマッチで、ボールを当てられた者は、そこで姿を消していくことになる。

頭にヒットした場合はノーカウント。
どちらか先に、選手がいなくなった時点でゲーム終了。残っていたクラスの優勝となる。

以前は、女子生徒も参加させていたのだが、保護者からのクレームが相次いだため、今年からは男子生徒だけのガチンコバトルとなった。

決勝戦の準備が終わるまでに、僕たちは作戦を立てていた。とりあえず、ボールがこちらにきたら、仁にボールを回す。相手から来たボールは取るうとせず、とにかく避けること。

僕はふと翔太の存在に気づく。

翔太は一人、コートの子隅で、ボーっと、試合が始まるのを待っていた。

翔太……

Bクラス、Dクラスはすでにギャラリーとして、決勝戦を見ていた。当然のこと、BクラスもDクラスも、Aクラスの応援をしていた。わき上がる歓声の中、ついに決勝戦が始まった。さすがにCクラスは強豪で、次々にAクラスの男子を撃破していく。それに対し、Cクラスの男子はほとんど無傷状態だった。

このままでは、負けてしまう。
仁はそう思ったのか、ボールを避けるのをやめると、全てのボールを取りにいった。

「よお、お前、宮本仁って言うんだっけな」

仁は、Cクラスの生徒に話しかけられた。
確か奴は、根崎と言ったか。柔道部にいる根崎だ。

「そうだが、なんか文句あんのかよ」

「いいや。ただ、運動神経がめちゃくちゃ良いらしいじゃねえか。」

「んー……まあ、“君より”は、あるかもね。」

ふふつと仁は笑ってみせた。

「一生、その態度ができないようにしてやるよー！」

根崎は、仁に向かって思いっきりボールを投げつけた。柔道部に入っていると言うこともあり、根崎の投げたボールは、力のある早いボールだった。とても、僕には取れそうにない球だ。しかし、いとも簡単にボールを取ってしまう仁。

「で、なんだっけ？」

仁は、鼻で笑いながらそう言って見せた。

格好良かった。

自分の運動神経を自慢するわけでもない。人を見下すことも決してしない。

それでいて、運動神経が抜群だなんて、格好いいにもほどがあった。

根崎は、胸くそが悪かったのか、仁たち、Aクラスを罵倒し始めた。Cクラスのお決まりのパターンだ。

「俺はまだ、本気を出してねえだけだ。俺の本気ボールを食らったら、お前ら……死ぬぜ？」

「……………うあーっ！」

急に翔太の叫ぶ声がした。

僕たちは、驚き、翔太の方を向いた。

翔太は小刻みに震えながら、しゃがみ込んでいた。

どうしたというのだ。

根崎が罵倒しただけで、なぜ、こんなに怯えているんだ。いつもの事じゃないか。

僕は考えた。鈍感な頭をフル回転させ、考える。

そうか……

僕は気がついた。

翔太が急に怯えた理由がなんなのか。

確か、根崎が仁に向かって罵倒したとき「死ぬ」と言った。

それが原因だと、僕は直感的に思った。

“死”なんて言葉、普段の会話の中ですら、最近では使う人が多い。「殺すぞ」とか「死ね」とか。そんなことを当たり前のように言う。そういう奴に限って、“死”というものを、間近で経験したことはない。

翔太は、大切だった人を失った。それも、この世で一番大切だった人をだ。だから、翔太にとって“死”とは、言葉ですら恐怖のなものでもないのだ。

翔太は一人コートにうずくまると、ガタガタと体を震わせていた。それを見ていた根崎は、見下すように翔太を見た。

「はは！だっせ！こいつ、怯えてるじゃん」

ひとさし指にボールを乗せ、そのボールを回転させながら、笑みを浮かばせ、翔太を見る根崎。
根崎だけじゃない。Cクラスの全員が、翔太を見て笑っていた。

ただ罵倒しただけなのに、怯え、コートにうずくまっている。なんて弱虫な奴だ。なんて臆病な奴だ。

そう言っているかのようにだった。

「……………はあ……………はあ……………」

翔太は、あまりの恐怖に意識が飛ぶ寸前だった。

Aクラスの生徒達、それにDクラスやBクラスも、翔太のことを心配そうに見守っていた。

それでも、Cクラスは翔太のことを見て、笑っていた。

僕は、仁の方を見る。

仁は、下を向き、必死に感情を抑えている様子だった。

本当ならば、仁はCクラスの奴にがつんと一言、言い返しているだろう。

だが、今の仁は、下を向き感情を抑え、翔太のことを庇おうとはしない。僕は、その理由がなんとなく分かった。

そう、仁もまた、“友情なんて使うかわられるかの関係”という言葉葉が頭を過ぎっているのだろう。

もう、親友なんかじゃない。もう、友達なんかじゃない。仁はそう自分に言い聞かせて、感情を押し殺しているのだ。

本当にそれで良いのかよ。仁。

僕たちの絆って、そんなにもろく、儂いものなのかよ……

違う……絶対に違う！

翔太は、2・Aのムードメーカー的存在で、いつも僕たちに笑顔を見せ、ハイテンションで、元気を与えてくれた。共に笑ったことも、共に泣いたことも、喧嘩したことだって僕は覚えてる。

お婆ちゃんのが大好きで、翔太の家に遊びに行くと、いつもお婆ちゃんの話を楽しそうに話していた。

そんな翔太が……僕たちを“使う使われる関係だ”と、そう思うはずがない。

翔太は、一人で何もかも背負っていこうとしているんだ。

僕は、一人震える翔太を見ながら、ぐっと拳を握った。

P・12 体育祭（後書き）

次回更新予定日：2月14日

翔太は、コートにうずくまったまま、小刻みに体を震わせていた。

翔太。僕は何をすればいい……何をしたら翔太の苦しみを解き放つことができる……

僕は、翔太のことを見ながら、拳をぎゅっと握っていた。

“死”という恐怖が、どれほどのものなのか、僕には予想がつかなかった。

この世で一番大切な人が死んでしまう悲しさ、寂しさ。それは、実際に経験した人にしか分からないものだ。

僕は、そんな経験をしたことがない。だから、翔太の背負ってる悲しみや恐怖が、どれだけのものなのか、全く分からなかったのだ。何もしてやれない自分を憎んだ。

仲間が悲しみ、傷ついているというのに、僕は何もしてやれない。

ただ、見ているだけしかできないのか……

「Aクラスには、こんな負け犬しかないんだな」

根崎は翔太の方を見ながら、クスクスと笑う。

「……お前……今なんて言ったよ」

根崎の発言に、僕は自分の中で、何かがぷつんと切れるのが分かった。

「Aクラスには負け犬が多いんだなって、言ったんだよ！」

根崎は、翔太に向かってボールを思いつきり投げつけた。

鋭い球が翔太に向かってくる。

僕が取れるボールではなかった。威力も早さも、見ただけで怯えてしまっぐらい、凄いものだった。

仁は、このボールを簡単に取ってみせたが、僕にはそんな技量はない。

だが、翔太がこのままやられるのを黙って見過ごすなんて、できなかった。

知らず知らずのうち、僕は翔太を庇っていた。

どんつと、後頭部に激痛が走る。

僕の後頭部に根崎の懇親の球が直撃したのだ。
僕は、大きく転倒した。

「おい、大丈夫かよ！」

「かあくん!!！」

周りからは、悲鳴ともとれる声が聞こえた。その中に、カノンの声があった。

こりゃ、変なところ見せられないな……

「うっ……」

だが、僕の頭はグラグラし、激しい吐き気に襲われる。立とうとしても、生まれたての子鹿のように、立つことができない。

「か、かえで……」

心配そうに近寄る翔太。

僕は、翔太の腕を全力で振り払った。

激しい吐き気と、頭のグラグラをぐっと我慢する。我慢できるものではなかったが、意地でも我慢した。

「よお、びびり。怪我はなかったかよ？」

「……」

僕が翔太にできること……それは、精一杯の挑発だった。

いつものように、「俺はびびってなんかねえ！」って言い返してくれ。

いつものように、「やってやるよ！」って言うてくれよ。

だが、翔太は黙ったままだった。

僕は、翔太の顔を見ようと、体を必死に起こす。

「つつ！」

痛みが予想以上に酷い。顔なんて上げられる余裕はなかった。徐々に、意識も薄れ始めていくのが自分でも分かる。

それでも、翔太に言いたいことがあった。どんなに、自分の意識が遠くなっても、翔太に言わなきゃいけない。今、言わなきゃ絶対後悔する。
僕はそう思ったのだ。

「翔太の……婆ちゃんは……」

「？」

「……翔太の婆ちゃんは、今のお前を見てどう思うよ！」

大きな声を出すと、後頭部に激しい痛みが走った。だが、僕は薄れゆく意識の中で、翔太に言った。今、自分が出せる一番大きな声で言った。

「翔太の婆ちゃんは、あの元気で明るい翔太が大好きだったんじゃねえのかよ！どんだけ辛いことがあっても、笑顔で乗り切ってみせる翔太が大好きだったんじゃねえのかよ！そんな……な……」

目の前が真っ暗になった……

僕は、目を覚ました。

ここはどこだ……

見慣れた風景……。見慣れた天井……。

そう、僕は保健室のベッドの上にいる。
僕は、起きあがろうとした。

「いてっ」

後頭部に激痛が走る。

そうだ。僕は、根崎の懇親のボールを受けて意識を失ったのか……
僕は、なんてダサイ奴なんだ……

「楓」

声のする方を向くと、そこには翔太の姿があった。
どこか、ぎこちなそうな翔太。

「翔太……あ、試合は!？」

あの後、試合はどうなったのだろうか。
Cクラスとの決着……根崎との決着は……

「勝ったよ……」

「そっか、良かった……」

良かった……勝ったんだ……。

僕は、翔太から勝利の報告を聞くと、とても安心することができた。

きっと、仁や田端が頑張ってくれたんだろっな……
僕は安心すると、力を抜き、ベッドに横になった。

「楓……」

翔太が再び僕の名前を呼んだ。

「ん?」

「……じめん」

翔太はそういうと、深く頭を下げた。

「なーに……謝るなよ」

「俺のせいで、こんなことになっちまって……それに！」

「分かってる……」

翔太は、久しぶりに感情的になっていた。
久しぶりに見た翔太の姿だった。

翔太は、近くにあった椅子に座り、下を向いた。

「ばっちゃんさ……」

下を向きながら、翔太は話し始めた。

「脳梗塞だったんだ。急に倒れて……」

「……そっか」

「俺が、病院に行った時には、もう……死んでた」

「……」

翔太の体が、小刻みに震え出すのが、目に見えて分かった。その仕草は、とても悲しく、とても辛いものだった……

「認めたくなかったんだ……仁や楓に、“ばっちゃん死んだ”って言ったら、ばっちゃんの死……認めちゃうみたいで……」

翔太は泣いていた。

隠すこともなく、翔太の目からは涙が溢れていた。

「そっか……」

辛かったのだろう。悲しかったのだろう……

お婆ちゃんの死を認めたくない。

だから、みんなに言えなかった。言ってしまうえば、全てを受け入れることになる。

翔太には、それが辛かったのだろう……

僕は、なぜだか、翔太の気持ちが痛いほどよく分かった。

僕は、翔太にかけられる言葉を探していた。

こういうときに限って、言葉というものは出てこないものだ。

「でも、乗り越えなくちゃいけないんだよな。」

「そうなのかな……」

「え？」

僕の返事に、翔太は驚く様子を見せた。

「別に無理して乗り越える必要は、ないんじゃないかな……悲しいものは悲しいさ。」

「……」

翔太は再び黙ってしまった。

僕の思いもよらぬ言葉に困惑している様子だった。

「僕さ……実は……小学生の頃、虐めにあつてたんだ」

僕が小学生の頃、虐めにあっていた話なんて、誰にもしたことがなかった。

だから、ちよつと恥ずかしかった。

でも……、翔太には、全部言おう。

「楓が……虐めに？」

翔太は信じられないという表情を見せた。

「ああ、極度の人見知りだね。名前も当時じゃ変わってて。虐めの対象となっちゃうんだよね。そういう人ってさ」

「……」

「友達が、僕にはいなかったんだ……机に落書きされたことも、教科書が全部捨てられていたことも、学校の人全員に、無視されたこともあった。」

「そんな……」

翔太は、自分のように真剣に、僕の話に耳を傾けていた。

そんな翔太を見ると、恥ずかしい気持ちなんて、いつの間にか吹き飛んでいた。

ちゃんと、翔太に言えそうな気がした。

「辛かった……悲しかった……僕の存在を、全て否定されているみたいでさ」

「……」

「でもね、ある日、僕にも友達ができたんだ」

「それは良かったじゃんか！」

自分のことのように、嬉しそうな表情を見せる翔太。

「ああ、とても嬉しくてね。今まで一人で背負ってきた悲しみとか寂しさが、軽くなった気がしたんだ」

「うん……」

僕は、天井を見た。

保健室の窓からこぼれる、夕陽の光で、保健室の天井もオレンジ色に染まっていた。

「……少しでも良いからさ……背負わせてくれよ……」

「え……？」

翔太は、何かを確認するかのように、僕の方を、じっと見つめた。

「翔太には、僕や仁。いや、もっとたくさん仲間がいるんだから

……」

「……」

そう……少しでも良い。翔太の悲しみが、苦しみが少しでも良いから分かりたい。

そして、共にまた歩んでいこう。

翔太は決して、一人なんかじゃないんだ。

僕は、保健室の窓から外を見た。

体育祭はすでに終わり、後かたづけが始まっているようだった。

「楓……」

「ん？」

僕は、翔太の方を向く。

「……りがとう」

翔太の声が小さかったこともあり、僕には翔太がなんて言ったのか聞き取ることができなかった。

「え？」

「……もう言わない」

「聞こえなかったから、もっかい！」

「いや、ぜってー言わないし！」

気づくと、僕と翔太は笑い合っていた。

あの頃のように、自然に笑うことができた。

良かった。本当に良かった。

後頭部の痛みは、一晩治まらなかったけど、それでも、良かった。これで、翔太を笑顔で見送ることができる。

駅のホームで、翔太と僕たちは、電車が来るのを待っていた。平日の昼間だからなのか、ホームは閑散としており、人の気配はあまりなかった。僕たちにとっては好都合だった。焦らず、ゆつくりと翔太のことを見送ることができるからだ。

「それにしても、今日でお別れとは……残念ですよ……」

真之介が寂しそうな目で翔太を見る。

「へへ。すぐ戻ってくるさ。就職して落ち着いたら、すぐ戻る。」

翔太の言葉は一つ一つが力強く、自信に満ちあふれていた。

「いつでも……連絡しろよな。……待ってるぜ」

仁は、どこかぎこちなさそうに、翔太に言った。

「仁……。」

翔太は、どこか寂しそうな表情で、仁のことを見た。
そんな翔太を見て、仁はクスツと笑った。

「……なーに、みっともない顔してんだよ！別れのシーンじゃあるまいし！」

仁がそう言うと、翔太は、再びいつもの笑顔に戻った。

「別れのシーンだったの！」

良かった。仁と翔太の間にできた亀裂も、今は跡形もなくなっていた。
僕たちは……あの頃の仲に戻れたんだよね……

電車が来た。ドアが開き、翔太は電車に乗る。

「あ、翔太！」

「ん？」

吉沢さんが、鞆から一枚の写真を取り出し、翔太に渡した。

「ごめん、ごめん。修学旅行の時の写真……翔太に渡してなかった。

「

「写真……？」

翔太は写真を受け取ると、クスッと笑ってみせた。

「俺、写ってねえじゃん。」

「何を言ってるのですか、秋山氏！足が、ちゃんと写ってますぞ！」

「で、この手だけ写ってるのが、岡田くんだよね。」

カノンが笑いながら言う。

「ああ、そうだったな！あの時、俺と真之介だけ転んだんだっけか。」

「そうですね！思い出の一枚です！」

「あはは！」

僕たちは笑い合った。

久しぶりだな……みんなとこうして、笑い合うのも。

「カノンちゃん。」

「え？」

「楓のこと……頼みました。」

翔太はそう言うと、カノンに深々と頭を下げた。

「おい、翔太！冗談もほどほどに……」

「楓」

翔太が真剣に僕の方を見た。

「な、なんだよ。」

「チャンスを逃すなよ。楓だったら……大丈夫だって、信じてるか
ら。」

「んだよ、それ……」

汽笛が鳴らされた。
発車の合図だ。

翔太は、みんなの顔をゆっくりと確認していくかのように見る。

翔太……見えるか？

翔太には、こんなにたくさんの方達がいるんだ。

僕や仁、カノンに、吉沢さん、山本さんに根本さん、内山に真之介
……ここには来られなかったけど、翔太には、もっとももっとたくさ

んの友達がいるんだぞ。
悲しいときは悲しくなればいい。辛いときは辛いって言っても良いんだ。
でも、一人で抱え込まないで。
僕たちがいる。遠く離れてしまっけど、僕たちはいつまでも翔太の友達だから……

翔太は笑顔を見せながら涙を流していた。

「じゃあな」

ドアが閉まり、止まっていた電車が動き出す。

「翔太！」

僕は、動き出す電車を追うように、走った。
加速していく電車は、みるみる翔太と僕たちの距離を離していく。

「翔太……翔太……」

翔太との思い出がフラッシュバックする。

翔太との出会いは、ゲーセンだったな。不良で絡まれていたのを仁が助けて……

それ以来、僕たちは一緒に遊んだ。楽しく会話し、一緒に帰った。お互いの部活で一緒に過ごす時間が減ったけど、時間を作っては、笑い、泣き、時には喧嘩した。

懐かしい日々……

電車は、さらに加速する。もう、翔太の乗った車両は見えなくなつた。

僕はそれでも、電車を追い、走つた。全力で走り続けた。

「……りがとう……翔太……」

決して追いつけるとは思わなかった。でも、それでも僕は走つた。

「ありがとう……!」

ありがとう……翔太。

翔太に出会えて、僕は本当に良かった。

“さようなら”じゃないさ。また、いつか会える。

あの頃のように、ファミレスで愚痴り合おう。ゲーセンにだって、行こう。

共に笑い、共に泣き、一緒に楽しもうじゃないか。

無情にも、どんどん小さくなる電車を、駅のホームの片隅で、僕はいつまでも見届けていた。

P・13 その涙を拭いて（後書き）

次回更新予定日：2月19日

P・14 君といつまでも……

「かえで〜!」

下の階にいる母さんの声で、僕は目を覚ました。
体を起こし、目覚まし時計を見る。

- AM 8 : 34 -

「マジかよ……」

今日は日曜日で、学校が休み。
土曜日は部活練習があるので、完全に休めるのはこの日曜日だけ。
だから、こんな朝早くに起こされた僕の気持ちは最高レベルで悪かった。

なんでこんな休日……と、愚痴りながらも、布団からゆっくり出ると、自分の部屋を出て、一階に下りた。

「困ったのよ。ぜんっぜん、テレビがつかなくて」

一階のリビングに行くと、母さんはテレビのリモコンを持ちながら、困った表情を見せていた。

「壊れちゃったんじゃないかしら……」

「ちょっと、リモコン貸して」

母さんからリモコンを受け取ると、早速テレビに向かって電源ボタンを押してみる。
反応なし。

「やっぱり、テレビ壊れちゃったのかしら……」

母さんがそんなことを言っている間に、僕はテレビに付いてある電

源ボタンを押した。

・今日の天気は、晴れの予報です。さて、全国の週間予……

「お、ついたじゃん」

恐らく、リモコンの電池切れだろう。

「あらあら。リモコンが壊れちゃったのかしら」

母さんは、再び困った表情をした。

僕の母さんは、機械に対して非常に弱い。

例えば、録画にする録音にする、どうやってやるのかが分からず、いつも父さんに任せている。

パソコンに至っては、電源の消し方……シャットダウンの仕方が分からず、コンセントから引き抜こうとする有様だ。

「多分、リモコンの電池切れだと思うよ。」

「あらそうなの？」

なんとも淡泊な返事だな。

僕は、リモコンから電池を取り出した。単三電池2本で動いてるみたいだな。

「母さん。新しい電池は？」

「えーと……お父さんに任せているから……どこにあるのかしら……」

どんだけ父さん任せだ……

父さんは、日曜日も働いているので今はいない。

僕も電池がどこにあるかなんて、全く検討もつかなかったので、父さんが帰って来ないと、これ以上どうにもならなかった。

「じゃあ、父さんが帰ってくるまで、我慢するしかないね」

僕は母さんにリモコンを返し、自分の部屋に戻ろうとした。

「楓。ちょっと、電気屋まで行って、買ってきてくれないかしら？」

今なんと……

「ちょっと、リモコンがないと不便なのよ。だから、お願い！」

母さんは、いつもこうだ。

料理や洗濯など、家事はしっかりやるのに、こういう部分は人に任せようとする悪い癖がある。

「いや、今日は学校が休みだから、もうちょっと寝ていたいんだけど。」

僕は、面倒くさそうな表情をし、母さんに言った。

「ひ、酷いわ！楓をそんな子に育てた覚えは……」

「はいはい。行ってきますよ」

僕がそう言つと、母さんは満足そうな顔をしながら言った。

「そつ？行つてらつしやい」

なんて親だ。

僕は出かける準備をし、家を後にした。

僕の家から電気屋は、そう遠くはない。

自転車で10分かかるかどうか。それぐらい、近いところにある。住宅街を抜けると、線路がある。踏切がないので、陸橋を渡り、ずっと真っ直ぐ、ひたすら真っ直ぐ進んだ先に電気屋がある。

名前は“スマイリー電気”略してスマ電である。

凄くローカルな電気屋であるが、品物は豊富で、他の電気屋と比べても値段設定がとても低く設定してあるので、何か家電製品を買うときはいつもこの店を利用しているのだ。

家から外に出ると、既に日は昇っていた。

4月という事もあり、それほど寒くはなく、なかなか気持ちよかった。

「まったく、めんどくさいな……」

僕は車庫から自転車を取り出し、スマホへと向かった。

途中、野良犬に襲われ、もの凄いスピードを出したこともあり、予定よりも早く陸橋へ到着した。

腕時計を見ると、まだ9時を過ぎた頃だった。

「この時間じゃ、店開いてないっての。」

僕は、自転車から降り、陸橋を登った。

頂上までつくと、丁度、電車が陸橋の下を通過するところだった。

僕は、電車が通り過ぎるのを橋の上から、じっと眺めた。

僕は、電車を見るたびに思い出してしまう。

翔太は今頃何をやっているのだろうか。ちゃんと、生活しているんだろうか。

そして、僕たちのことを忘れてはいないだろうか。

翔太とは、メールのやりとりをしたことは、今までにほとんどない。メールをしなくても、学校や翔太の家に遊びに行けば、飽きるほど話せたからだ。

だが、今は違う。

翔太は、もう遠いところへ行ってしまった。いつ、帰ってくるかも分からない。

だから、メールをしようと思ったことは何度もあったが、実際にメールを送ったことは一度もなかった。
新規メール作成ボタンを押し、本文を作ろうと思っても、そこでいつも止まってしまふのだ。

翔太に、なんてメールをしたら良いのか、分からなかった。あの頃は、そんなことも考えず当たり前かのように話していたのに……

ふと、現世に戻り、腕時計を確認する。

- 11:24 -

なんてこった。

気づいたときには、およそ2時間が経過していた。

こんなところで、思いに老けている場合ではなかった。

一刻も早く家に帰らないと、母さんにまたなんて言われるか分からないからな。

僕は、陸橋を降りると、再び自転車に乗り、スマホへと直行した。

- スマイリー電気 -

田舎町にしては、なんともでかい建物だ。

僕は、自転車をスマ電の駐車場の端に止めると、店の中へと入った。店内も、本当に広く、どこに何があるやら一目では分からない。しかも、日曜日だということもあり、店内は多くの客で溢れかえり、うるさいぐらい賑やかだった。

とりあえず、電池コーナーに行けば良いんだよな。

僕は、小物が売っていきそうな所へ小走りで向かった。

「とにかく、人が多いな……」

人混みをかき分け、電池売り場を探す。
だが、なかなか電池が売っているところが見つからない。

「電池どっだよ……」

つか、なんで僕が電池のために、こんなに必死になってるのかが、とても馬鹿らしかった。

そもそも、僕はリビングのテレビなんて使ったことがない。

それに、日曜日という1週間に1度しかない貴重な休日をこんなことのために半分使うのか。アホかと。馬鹿かと。

だんだん、ストレスが貯まってきた頃、誰かとぶつかってしまった。ぶつからないように、気を付けていたつもりだったが、ちょっと集中力をきらしてしまったようだ……

「すみません。大丈夫ですか？」

僕は、ぶつかってしまった人の方を向き、すぐに謝った。

その人は、驚いた表情をしていたが、僕には誰だか分からなかった。

こんな可愛い女性と知り合いだっただろうか……

「ええと……どこかで、お会いしましたっけ？」

僕がそう言つと、その女の子はクスッと笑つた。

「かあくん、私のこと忘れちゃつたの？」

「かあ……くん……？」

そう、僕のことを呼ぶ人は、この世で一人しかいなかった。

「って、カノン!？」

「気づくの遅すぎ!」

学校では制服着用が義務づけられているので、カノンの私服を見たのは小学生の時以来、久しぶりだった。さらにカノンは、髪の毛を束ね、ポニーテールにしていたので、カノンだと気づかなかつたみたいだ。

いつものカノンも可愛いが、今日のカノンは、より可愛かつた。

「ごめん。寝起きでさ……」

なんて理由だ。我ながら思った。

「ところで、カノンは何しにスマホへ？」

僕がカノンに訊ねると、カノンは恥ずかしそうな表情をした。

「ちょっと……ね。」

カノンは僕から視線を逸らす。

「なんだよ。ちょっとって。」

僕は、カノンが向いた方を見た。

そこには、様々な携帯電話が並んでいた。

「ん？携帯……？」

カノンは、僕の方を向き、恥ずかしそうに、うんつと頷いた。

話によると、カノンは携帯電話を買いに、スマホへ来たみたいだった。

今の今まで、携帯電話を買ったことがなかったらしい。

とても意外だった。社交性があり、行動力が人一倍にあるカノンが、携帯電話を使ったことがないなんて。

なぜ、今になって携帯を買うことになったのかというと、部活などで連絡を取り合う際、携帯電話があれば、外出中に連絡がきても、すぐに分かることができるからだという。

部活も最近、忙しさが増し、それに伴って連絡も増えただろうから、当然のことだろう。

携帯電話の購入のアドバイスをしてくれたのが堺先輩だというのは、ここだけの話さ。

「そっか。じゃあ、僕も一緒に見てあげようじゃないか」

「え、一緒に見てくれるの？助かる!」

「任せなさい。きっと、カノンにぴったりの携帯を見つけてあげようじゃないの」

僕は、どこか自慢気になっていた。

といつても、携帯を選ぶとなると、数分で決まるものではない。会社だって、BUやCOCOMO。それにHARDBANKなどあるし。

値段によっては、使える機能が様々であるし、色や形も様々である。僕は、独断と偏見で、カノンに似合いそうな携帯を見つけ、カノンに見せた。

「なんか、色が派手じゃない？」

そうきたか。

活発な性格だから、そのイメージで少し派手目な色の携帯を選んだのだが、違っていたようだ。

「んー、カノンは何かこだわりとかある？」

「こだわり？」

「うん。例えば、機能が豊富な携帯が欲しいとか。色とか形とかさ。

「

カノンは、様々な携帯電話を見ながら少し間をあげ、喋った。

「シンプルな柄で、メールと電話ができれば……」

「了解。それさえ分かれば、選びやすい」

僕は、カノンのリクエスト通りのものを探した。
要望さえ分かれば、選ぶのなんて容易いものだ。

「これなんてどうよ？」

僕がカノンに見せたのは、COCOMOのスマート携帯。
色は白一色で、なんともシンプルなデザインである。

「良いかも！」

「ほら、しかもこの携帯、すげえよ。新機能ついてるんだってさ。」

「へえ〜。どんな機能なんだろうね」

凄いと云ったものの、確かに何の機能が新しく導入されているのか、さっぱりだ。

「んん……と、とりあえず、新しい機能さー!」

「そのまんまじゃん!」

携帯電話を一緒に探しているだけなのに、とても楽しい時間だった。この時は、僕の母さんが天使に見えた。母さんが電気屋へ行けと言わなかったから、こうしてカノンと一緒にいることはなかっただろう。

「じゃあ、これにしようかな」

カノンは、僕が勧めた携帯を手にとると、手続きをしに、カウンタ―へと向かった。

僕はその間に、携帯電話が並んでいるすぐ近くのストラップ売り場へ向かった。

そこには、様々なストラップが置いてあった。

「んー、どれにしよう」

こう、たくさんストラップが置いてあると、どれを買って良いのか迷ってしまう。

でも、これはカノンに聞くことはできない。ちょっと、びっくりさせたいからな。

僕は、悩んだ挙げ句、購入を決めたストラップを手に取り、レジへと並んだ。

僕とカノンは用事を済ませると、スマホを後にした。

腕時計を見ると、午後2時過ぎだった。

携帯電話を選ぶのにこんなに時間がかかっていたとは、思いもよらなかった。

「かあくん、本当にありがとう！おかげさまで、携帯買ったよ」

カノンは嬉しそうな表情だった。

「いやいや、お役に立てて嬉しいよ」

僕は、駐車場の端にとめておいた自転車を取り、カノンと並んで、陸橋のある方へと歩いた。

カノンも自転車ですマ電に来たみたいで、二人で自転車を押して歩

いた。

「そういえば、カノンは、携帯の使い方わかる？」

「使い方？」

「うん、メールの送信の仕方とか……メアドの設定とか」

「えっと……」

カノンは急に立ち止まり、携帯電話の説明書を取り出し、読み始めた。

「うーんと……5ページか……」

「って、カノン。ちゃんと教えてあげるから、説明書こんなところで読まないの！」

「あ、あはは。ごめん」

カノンは恥ずかしそうに苦笑いをした。
なんとも、初々しかった。

僕も、最初携帯電話を手にしたとき、何がなんだか分からず、あた

ふたしてたな。

そんなことを思いながら、僕はカノンに、携帯電話の使い方をできるだけ分かりやすく、丁寧に教えた。

「じゃあ、ちゃんとメール送れるか、試してみる？」

「そうだね！でも、どうやって？」

「僕の携帯……」

ふと、僕は言葉に詰まった。

なぜか、急に恥ずかしい気持ちになったのだ。

「かぁくん、どうしたの？」

不思議そうに、僕のことを見るカノン。

「あ、いや、なんでもない。」

なんでもないわけがなかった。
僕の鼓動は、早くなっていた。

「ぼ、僕の……携帯に送ってみて。メアド……教えるから……」

凄くぎこちない言い方をしてしまった。

カノンは僕を見ながら、笑みを浮かべ、うんつと頷いてくれた。

なんだか、凄く嬉しかった。

別に、告白をしたわけじゃないし、何か凄いことをしたわけでもない。

第一、カノンは僕の友達だ。

友達にメールアドレスを聞くのなんて、朝飯前なはずだ。

でも、相手がカノンになると、どうして緊張してしまうんだろう。

どうして、メールアドレスを交換して、こんなに嬉しいと思うんだろう……不思議で仕方がなかった。

カノンにメールアドレスの登録の仕方を教えながら歩いていると、陸橋に到着した。

頂上に行くと、また電車が通過するところだった。

カノンは立ち止まり、電車が通過するのをじっと見つめていた。僕も、カノンと同じように電車を見つめる。

「秋山くん。今頃どうしてるのかな……」

カノンは、通過していく電車を見つめながら、呟くように言った。

「翔太のことだ。元気にしてるさ。」

電車はもの凄いいスピードで陸橋の下を通過していく。

「時々ね、二つやっつて電車を見ていると、秋山くんのことを思い出すの」

「へ、へえ〜。」

「私、秋山くとあまり話したことなかったけど、凄く立派だと思
う」

「……立派？」

「うん……お婆ちゃんの死を受け入れて、前を見て進んでいけるな
んて、凄く立派だよ」

まるで、自分はそんなことできませんっと言っているように聞こえ
た。

でも、カノンはすっかり前を見て生きているじゃないか。
僕とは違い、後ろを振り向かず、どんなに辛いことや悲しいことがあっても、前を見て進むことがカノンにだってできているじゃないか。

電車は、もう陸橋を通過してしまっていた。

最近の学校の話をしながら、僕たちは陸橋を降りた。

「じゃあ私、早速家に帰って、メール送るね！」

カノンは、笑顔を見せた。

「あ、カノン」

「ん？なに？」

「……いや……なんでもない。」

「さっきから、かあくん、おかしいぞ〜」

カノンは、僕のぎこちない様子を見て、笑っていた。

僕はカノンに、このまま一緒に帰ろうと言いたかった。だが、なぜか口にだして、声に出していることができなかった。

「今日は、本当にありがとう！」

カノンはそう言うと、自転車に乗った。

「カノン！」

「？」

カノンは僕の方を振り向く。

僕は、ポケットから、電気屋で買ったストラップを取り出すと、カノンに渡した。

「え、これ……私に？」

「ほら……うん……その携帯シンプル過ぎるだろ。だから……いや、ついでだよ、ついで。」

「ありがとう、かあくん！可愛い熊さんだね」

カノンは熊のキャラクターイラストラップを手に、嬉しそうな表情を見せていた。

もつとカノンと一緒にいたい。もつともつとカノンと話していたい。僕は、カノンの嬉しい表情を見ながらそう思った。

でも、もうカノンと二人きりになることは、恐らくないだろう。カノンと二人きりになれたのは、偶然。そんな偶然が続くとは思えない。

カノンは部活や受験で今よりもつと忙しくなり、二人きりになるところか、話すことだって難しくなるかもしれない。

そんなのは嫌だった。

カノンの笑顔がもつと見たかった。これで終わりだなんて、嫌だった。

「カノン……」

カノンは、笑顔で僕の方を向いた。

「今度は……」

「……？」

「今度は、一緒に、どこか美味しい飯でも食べに行こう。」

ついに、言ってしまった。

僕の心臓は、とてつもない早さで動いていた。

ドクドクっと、音を立てて動いているかのようにだった。

カノンは、驚く様子をしたが、すぐに、にこっと笑った。

「うん、良いよー!」

カノンから、その言葉を聞けただけで、僕はこの上ない幸福感に満たされた。

また、カノンと遊ぶことができる。一緒に過ごすことができるんだ。

今さらだが、僕はやっと、自分の気持ちがあった。

僕はカノンのことが……

テレビのリモコンの電池を買い忘れたことに気づいたのは、家に帰ってからだった。

P・14 君といつまでも……（後書き）

次回更新予定日：2月22日

高校三年生にもなると、クラスでは受験モード一色になっていた。塾の模擬テストの結果について話す者や、カリカリと音を立てて勉強をする者もいる。

もちろん、就職を目指す者も、面接の本を読んだり、就職雑誌を読んだりしていた。

必死になっているクラスメイトを横目に、僕は何一つやろうとはしなかった。

何かをしなければならぬ。

そうは思っても、何をしたら良いべきなのか、分からなかったのだ。

僕には夢や希望がないのかもしれない。

就職して働きたいとも思わないし、大学へ行って、何かを学びたいとも思っていない。

むしろ願うとするなら、このまま高校生活を続けていきたい……でも、時間は冷徹なもので、1分また1分と過ぎていくのだ。

僕と仁と翔太の三人で遊んでいた時は、翔太の家でいつも遊んでいたのだが、翔太がいない今は、仁の家で遊ぶことが多くなった。今日も、放課後の部活練習がないのを良い事に、僕は仁の家にお邪魔していた。

「楓もなかなかやるじゃないの！」

自分のベッドに座りながら、興味津々に僕の話に耳を傾ける仁。

「そんなことないって。……ただ、遊びに行くだけだよ」

「遊びなんてもんじゃない。それはデートって言っただ」

仁は、にやっとしながら僕の方を見る。

「ちが……」

僕のズボンのポケットから着信音が鳴り響く。
マナーモードにするの忘れてた……

「お、噂をすれば何んてやら……ってやつか？」

仁がそう言っているのを横目に、僕は携帯を取り出し、内容を確認する。

送信者は……“山下カノン”
本文を見る。

- じゃあ、今度の日曜日の11時、陸橋のところで待ち合わせね！ -

返信ボタンを押し、本文を作成する。

- 了解。遅れるなよ -

送信つと。

「楓。顔がにやけてるぞ？」

「え、嘘?!」

気づかなかった。

真剣にメールをしていたつもりだったのに……

「まあ、そんな楓も、俺は好きだぜ？」

「だから、仁に好かれても嬉しくないって」

僕が、軽快なツツコミをすると、仁はクスッと笑った。

「でも、言ってくれて嬉しかった。ありがとな！」

仁にだけは、ちゃんと言っておきたかった。

協力してくれるとか、見返りがほしいとか、そんなことを期待して言ったのではなく、一番信頼できる友にだけは、言っておきたいと、そう思ったからだ。

仁は、僕の話を最後まで真剣に聞いてくれた。それだけで、僕は仁に話して良かったと思うことができた。

「俺も、できる限り協力する」

もの凄い真剣な顔で、そう僕に言う仁。

「いや、気持ちはありがたいけど、仁に協力をお願いするほどのものじゃないさ」

何を言っているんだとばかりの仕草を仁はとった。

「楓がカノンちゃんと幸せになることが、俺の幸せでもあるんだ。そうだろ？」

そうだろ？って聞かれても……違っただろと。

「あ、あはは。じゃあ何かあったら頼むわ」

僕がそう言うと、仁は自分の胸をぽんつと叩いて、どこか自信のある表情をみせた。

「任せなさい！」

その言葉は、なんとも頼もしく、なんとも恐ろしいものだった。

カノンと約束をした日は、お互いの部活がない日曜日。
その日は、丁度、この町で有名なイベント、“春祭り”というものが行われる。

桜の散る景色がとても綺麗だ。それに、数多くの露店が連なっており、そこに一日中いても飽きない。

春祭りは、桜の満開が過ぎた頃、一年に一度だけ行われ、毎年、多くの客で賑わう。

僕は去年、仁と翔太とで春祭りに参加したのだが、カノンが一度も行ったことがなかったため、即決したのだった。

カノンと二人きりで遊ぶなんて、夢のようだった。

高校にカノンが来てからというもの、二人きりで遊んだことはないと言っても良い。

でも、今回は二人だけで遊べる。

それを考えただけで、僕は本当に幸せだった。

金曜日の朝。

カノンと約束した日まで、あと2日。

僕は、通学の途中、偶然にもカノンの姿を見つけ、声をかけた。

今日は、お互い朝の部活がなかったため、同じ時間帯に登校したみたいだった。

カノンも一人で登校していたので、カノンと一緒に歩きながら学校へと向かった。

「春祭り楽しみだな〜」

「人がたくさんいて、迷子になるかもね」

「かあくんじゃあるまいし、迷子になんかならないもんね!」

カノンは、僕の方を向くとアツカンベーとしてみせた。

「けっ。どうせ、方向音痴ですよ〜」

何気ない、普通の会話だった。

でも、カノンと話しているだけで僕は心が癒された。

カノンの表情や態度一つ一つが、僕に元気を与えてくれる。

でも、僕からカノンに与えてあげられるものなんて、あるのだろうか……

僕は、何事も中途半端にしまっている。

受験や就職のことなんて、これっぽっちも考えていないし、本気でやりたいことがあるわけでもない。

そんな中途半端な僕が、カノンにしてあげられることは何だろうか

……

僕は、カノンの元気な笑顔を見ながら、そう考えていた。

「かあくん、どうしたの？」

僕のおかしい態度に気づいたカノンは、僕の顔をのぞき込むようにして、訊ねた。

「い、いや。何でもないって。」

急にカノンの顔が近づいてきたので、僕は少々緊張してしまった。

「変な、かあくん。」

カノンはくすつと笑った。

「山下さん！」

ふと、男の声が、僕たちの背後からした。

僕たちが、声のする方を向くと、そこにいたのは、堺先輩だった。

「堺先輩！？」

カノンは、驚いた様子だった。

堺先輩は、僕たちの通っている高校を卒業し、大学へ入学した。

堺先輩の通う大学は、僕たちの学校に近い場所にあり、英語科や工業科、音楽科など、様々な学科がある。

もちろん、頭が良くなければ入れない大学だ。

堺先輩は、その大学の音楽科へと入学したというのを、以前にカノンから聞かされたことがあった。

「先週から探してたんだ。良かったよ、見つかった」

あははつと笑いながら、堺先輩は深呼吸を一度し、呼吸を落ち着かせていた。

「堺先輩、急にどうしたんですか？」

「ああ、実はね……」

堺先輩は、自分が持っていた鞆から、ある紙を取り出し、カノンに手渡した。

カノンは、紙を受け取り、それを見る。僕も、内容が気になり、カノンと一緒にその紙を見た。

- 第57回 音楽コンテスト -

「これは……？」

カノンが、堺先輩に尋ねる。
堺先輩は、うんつと頷いた。

「山下さん。このコンテストに出てみないかい？」

「え……」

カノンは、とても驚いた表情をした。それもそうだ。卒業した堺先輩が急に現れ、何かと思えば、音楽コンテストの誘いだっただけは。誘われたカノンもびっくりしていたみたいだが、聞いていた僕も驚いた。

「俺の大学のサークルで、今度、このコンテストを手伝うことになったんだ。」

「手伝う……？」

「ああ。アシスタントとしてね。そこで、山下さんのことを話したら、是非参加してみないかって。」

「そんな……」

カノンは事実を受け止められないでいる感じだった。僕も、カノンになんて声をかけて良いのか分からず、ただ、堺先輩の言っていることを聞いているだけしかできなかった。

「それに、このコンテストは、とても有名なコンテストでね。ここで数多くの有名ピアニストが誕生しているんだ。」

「なのに、私が……ですか？」

堺先輩は、そんなことないという仕草をした。

「山下さんだったら、大丈夫。どうかな？やってみる気はあるかい？」

カノンは、再び、堺先輩から受け取った音楽コンテストのパンフレットを見た。

何秒か見た後、カノンは堺先輩の方を向いた。

「……はい！私で良ければ！」

カノンは、やっぱり凄い。

僕が、もしカノンだったら、断っていた。

こんなレベルの高いコンテストに出場するなんて、リスクがありすぎる。

失敗すれば、笑いや。成功して当たり前だ。

それなのに、カノンは、やりたいと言ったのだ。

「そっか！ありがとう。山下さんだったら、やってくれるって思ったよ！」

堺先輩は自分の事のように、嬉しそうな表情をした。

「じゃあ、コンテストの事とか、課題曲、練習も含めて、今度の日曜日、どうかな？」

「日曜日……」

カノンは、堺先輩がそう言うと、困った表情で僕の方を見た。そう、その日曜日というのは、カノンと約束した日。春祭りに行く日だった。

「ん？どうしたのかな？」

何も知らない堺先輩は、カノンの様子を見て、不思議そうにしていた。

「いや、あの……」

説明しようとしても、うまく説明できずにいるカノン。そんなカノンを見ていた僕は、つい思ってもいなかったことを言うてしまった。

「やった方が良く。僕の事は良いからさ。」

「でも……」

カノンらしくない表情だ。

僕は、カノンを後押ししたい。そう思った。

「……応援してるからさ。悔いのないようにやった方が良い。」

僕は、自分にできる最高の作り笑いをカノンにしてみせた。

「……うん。……ごめん。」

カノンは何か言いたそうだったが、それ以上何も言うことはなかった。

なんて、馬鹿なこと言っちゃったのだろうか……そう思ったが、これで良かったんだ。

カノンは、ピアノが大好きで、去年の夏休みも、友達と遊ぶことなく、音楽室ですつと練習をしていた。

僕がカノンの練習風景を見たのは一度だけだったけど、一生懸命練習していた。

僕がカノンの邪魔をする権利はない。

音楽コンテストに出るためには、今よりもっともっと練習しなければ

ばならない事ぐらい、僕にでも分かる。
ここで、無理に引き止めてしまえば、練習の邪魔をしてしまうことになる。

もう、カノンの邪魔をするのは嫌だった。

そして、何事もなく、日曜日は訪れた。

この日は、見事なまでの晴天だ。

だが、カノンは部活の練習で、春祭りには一緒に行けない……

「だからって、俺の家にかげ込むなよ。」

「まあ……ええやん？」

僕は、何もすることがなかったので、お決まりのように仁の家に行った。

僕が、金曜日の事を仁に話すと、仁は呆れたような態度をとった。

「そこは、引き止めておくべきだろ。」

「でも、カノンの邪魔をすることはできないよ」

「……ったく。しゃあねえな。」

仁はそう言うと、急に着替え始めた。

「どうした？」

「どうしたも、こうしたも……ちょっと出かけてくる」

お前って奴は……。

僕が、カノンと遊べなくて寂しがっているのに、一人で出かけるとは何事だ。

「じゃあ、僕も行くよ」

仁は首を横に振った。

「楓は、ここで留守番！」

仁はそう言うときにこっと笑い、部屋から出て行った。

追いかけて行きたかったが、そのうち戻ってくるだろうと思いい、何

か時間つぶしになるものはないか探した。

「おお、PS4じゃん！」

仁の家に、最新ゲーム機PS4があるとは……

僕は、こう見えてもゲーマーだ。

今まで、様々なゲームをしてきたが、PS4でゲームをしたことはない。

ソフトを見てみると、意外にもスポーツ系のゲームが一つもなかった。

あるのは、シューティングやテトリス……

って、テトリスとかPS4でやらなくても良いだろうに……

そんなことを思いつつも、僕はテトリスをプレイしてみた。

だが、これがなかなか面白い。

シンプルでありながら、奥が深い。さすがはテトリス……

気づくと、1時間ぐらいはプレイしていただろう。

僕がテトリスに熱中していると、僕のズボンのポケットにあった携帯が鳴った。

僕は、めんどくさいと思いながらも、ポケットから携帯電話を取り出した。

電話だ。

発信者は仁……

「もしもし？」

「楓か？急にすまん！ちょっと俺の部屋使うから、家帰ってくれ！」

「なんだよ、散々待たせておいて、それはねえだろ？」

（むしろ楽しんだが……）

「急に使うことになったんだ。すまん。今度、飯奢るからさ！」

「……分かったよ。」

「じゃ、そういうことで！」

なんとも失礼な電話だ。

ちよっと出かけてくるから留守番してると言われて待っていれば、
今度は帰れと。

なんとも理不尽なことだ。

今度、高級料理でもご馳走にならなきゃ納得がいかんな。

僕は、そんなことを思いながら一人、自分の家へと帰ったのだった。

家に帰ったところで、やることが何一つなかった。

1週間に1度の休日だっていうのに、何もすることがない。

ゲームもなんか飽きたし、漫画だって、すでに読み飽きている。

だからといって、受験勉強をする気にもなれないし、他の友達と遊ぶにしても、真之介と遊んだら、なんだか負けのような気がするし、翔太はもういないし……田端とは、部活仲間であるが、そこまで仲良くはないし……。

カノンは今頃、堺先輩と一緒にピアノの練習、頑張ってるんだろうな……

僕はそんなことを思いながら、自分のベッドに横になっていた。

僕は携帯のバイブ音で目が覚めた。

気づかないうちに眠っていたようだった。

僕は、ベッドから起きあがると、机の上に置いた携帯電話を確認した。

今度はメールだった。

送信者は……また仁か……

「すまん、楓！ちょっと、先生に呼び出されちゃってさ。一人で行くのも気まずいから一緒に来てくれ。16時に正門で待ってるから」

な -

「拒否権なしかよ……」

僕は携帯を再び机に置くと、自分のベッドに横になった。

今日は、仁に振り回されてばかりいるような気がしてならなかった。

仁の家に遊びに行ったのが最後、留守番させられ、家に帰らされ、拳げ句の果てには付き添い役を任される始末だ。

なんだか、今日は付いてない日だ。

時計を見ると、15時を過ぎていたので、出かける準備をし、学校へと向かった。

正門に到着すると、そこには仁の姿がなかった。
僕は時計を確認する。

- 15:50 -

少し早かったが、普通頼んだ奴が少し早めに来るってのが定石だろ。
ここまで、仁のことがむかついたのは初めてだ。

仁が来たら、ちょっときつく言っただろう。僕は、そう思った。

何分かして、僕に話しかけてきた人物は意外な人物だった……

「かあくん？」

僕は、声のする方を向いた。
そこに立っていたのは、カノンだった。

「カ、カノン！？」

僕は、何がなんだか分からなかった。
僕のことを呼んだのは仁なのに、なんでカノンがいるのだろうか……

「え……と……、どうしたの？」

とりあえず、状況を確認しないと。
僕は、カノンに訊ねた。

「宮本君が、練習中に来て……」

カノンの話で全てを理解することができた。

仁は、僕とカノンを会わせるために、わざわざカノンに会いに行き、僕を誘導したわけか。

「仁の奴……」

ふと、僕の携帯が鳴る。

携帯を取り出し、確認すると、仁からのメールだった。

・春祭り、まだ間に合っぜ。行ってこい！・

「お前ってやつは……」

僕は、仁に謝りたかった。

仁は僕のために、丸一日潰してくれた。

それなのに、僕は、仁が僕のことを利用していると勘違いしていたのだ。

そんな奴じゃないことぐらい知っているのに……ごめん、仁……そして、ありがとう……

「カノン、行こう！」

僕は、カノンの腕を持ち、春祭りが行われている場所へ向かった。

「ちょ、ちょっと、かあくん!？」

カノンは驚いている様子だったが、僕は気にせず走った。とにかく走った。

春祭りは17時で終わってしまふ。学校から春祭りの場所まで、走っても30分はかかる。

間に合うかどうかは分からなかった。

でも、僕は走った。カノンと一緒に。

仁の苦勞を無駄にはしたくなかった。そして、高校生最後の春祭りをカノンと一緒に……

どれぐらいの時間、走ったのだろうか……

僕たちは、春祭りの行われている場所に到着した。

だが、露店はもうどこも閉まっていた。

時計を確認すると、16:50ジャストだった。

「あと10分あるのに……」

少しでも良い。カノンと一緒に遊びたかった……
だが、春祭りは、もう終わってしまった。なんだか悔しかった。
せっかく仁が頑張ってくれたのに……せっかく、カノンと二人きり
になれたのに……
僕は、桜の雨にうたれながら、肩を落とした。

ドーン！

大きな音が鳴り響いた。

「かあくん、見て！」

カノンが指さす方を見ると、上空には綺麗な花火が打ち上がっていた。
た。

「花火!？」

4月末だというのに、花火か……
花火が上がるには少し明るい空だったが、それでもとても綺麗だった。

僕とカノンは、花火をじっと見ていた。
何を喋るわけでもない、ただじっと花火が打ち上がるのを見ていた。

「かあくん」

ふと、カノンが僕に話しかけた。

「ん?」

「今日は、ありがとう」

僕は、カノンの方を向いた。カノンは、とても優しい笑顔だった。

「あは、あはは。露店閉まってて、なんもできなかつたけどね。」

カノンはうつんと首を横に振った。

「それでも良いの」

「え………?」

花火は今も上空にこれでもかというぐらい打ち上げられていた。

「かあくと一緒に、花火が見れただけで、嬉しいから……」

「カノン……」

「あはは。なーんてね!」

カノンはにこっと笑うと、再び上空を見上げた。

僕の心臓は間違いなく早く動き始めた。耳元でドクドクと脈うつ感じが分かる。

僕は、ありつただけの勇気を振り絞り、カノンの手を握った。
カノンの手は僕の手よりも、一回りも二回りも小さかった。
それなのに、カノンの手はとても温かい。
この手を離したくはなかった。

カノンは、一瞬だけ驚いた様子を見せたが、カノンもぎゅっと僕の
手を握ってくれた。

「カノン、今度はさ……」

「うん……」

「今度はもっと、一緒にいよう……」

盛大に打ち上がる花火を、僕たちは手を握り合ったまま、ずっと見
続けていた。

二人だけの時間。
僕とカノンだけの時間。

いつまでも、続くと良いな。

P・15 二人の時間（後書き）

次回更新予定日：2月25日

今日は、音楽コンテストが行われる。

春祭り以来、僕とカノンは、あれっきり一緒に遊ぶことはなかった。何度も誘おうと思ったのだが、カノンのことを想うと、決して誘うことなんてできなかった。

僕にできることは、応援してあげることだけ。見守るだけ……
何もしてあげられない自分が、とても情けなかった。

今日、僕の呼びかけで集まったメンバーは、仁、吉沢さん、真之介、山本さんだった。

僕たちは、会場に着くと、受付でお金を払い、指定された席に座り、コンテストが始まるのを待った。

客席は既に、独特な緊張感があった。

こんなところで、カノンも演奏をするのか……

そんなことを考えていると、なぜだかこっちが、緊張してきた。

「内藤氏。山下殿の出番は、まだなのでしょうか？」

ソワソワしながら、僕に尋ねてきたのは真之介だった。

「てか、まだ始まってないでしょ！」

僕がツッコむ前に、吉沢さんがくすつと笑いながら真之介にツッコミを入れた。
こいつ……できる。

「カノンは良いな。こんな所で演奏できて……」

羨ましそうな表情でそう言ったのは、山本さんだった。
確かに、同じ音楽部でありながら、カノンだけ音楽コンテストに参加できるなんて、羨ましいと思うのは当たり前だ。

「私の分まで、カノンには頑張ってもらわないと！」

「カノンは、やってくれるさ」

僕はついそんなことを言ってしまった。

「いや、カノンは幸せで羨ましいね」

「内藤氏も、なかなかやりますな！」

山本さんと真之介は、僕の方を見ながら、くすくすと笑っていた。

待て待て。

いつ、僕とカノンがそういう関係だなんて分かったんだ。

思い当たる人物は、一人しかいなかった……

僕は、仁の方を向くと、仁は俺じゃないという顔をしてみせた。

じゃあ、誰が……

そんなことをしている間に、コンテストはついに始まった。

音楽コンテストという名だけあって、ピアノだけではなく、サククスやフルートなど、色々な楽器が登場した。

聞き入ってしまうぐらい、どの演奏者達も、本当に凄い上手だった。

カノンは大丈夫だろうか。失敗しないだろうか……

僕はそう思ったが、カノンのことを信じることしかできなかった。緊張しないで、練習通りやれば、必ず成功するはずだと。カノンだつたらできると信じた。

そして、ついにカノンの出番が回ってきたのだ。

ステージ場に立つカノン。

カノンは少し緊張した様子で、演奏の準備に取りかかっていた。

「ついに、山下殿の出番ですな！」

真之介は小声でありながら、テンションが最高潮に達していた。山本さんや吉沢さんは、カノンの様子をじっと見つめていた。

「カノンちゃん、ちゃんと演奏できれば良いんだけどね。楽しみだ」

仁もカノンの事を食い入るように見ていた。

カノンは演奏の準備が終わると、席に着く。
手に付いた汗を拭き、楽譜を確認する。

今日のために、カノンは毎日毎日、一生懸命頑張ってきた。
受験勉強と両立していかなければならないので、大変だっただろう。
勉強の時間を作っては、コツコツと受験勉強をし、それが終われば、
またピアノの練習。
遊ぶ時間なんて、これっぽっちも、カノンにはなかった。
それでもカノンは、一度も弱音を吐かず、頑張っていた。

僕は、一生懸命になって練習をしているカノンの姿を何度も見てきた。
だからこそ、成功させて欲しかった。

今までの努力が全て、この場で報われることを願って……

カノンは、深呼吸を一つすると、演奏を開始した。

僕は、一音一音、丁寧に聞いていく。

凄かった。

決してお世辞ではない、カノンは信じられないぐらい、素晴らしい演奏をしていた。

丁寧に弾くだけじゃない。音の中に力強いものが、繊細な何かがあった。

あの夏休み……

僕がカノンの演奏を聞いたのは、あの夏休み以来だったが、こんなに上手だっただろうか。

いや、やはりカノンは上達したのだ。

休日も部活の練習。放課後も部活の練習。そうやって、毎日毎日努力をし、着実に力をつけたのだ。

カノンは自信に満ちあふれた顔をしていた。まるで、演奏を楽しんでいるかのように。

カノンの演奏している様子を、僕はじっと見つめていた。

そして、カノンの演奏は無事に終了したのだった。

コンテストの結果、惜しくも優勝を逃したが、見事な3位入賞だった。

それでも、3位に入賞できるなんて、立派だ。
周りは、凄腕演奏者でいっぱいなのに、その中で3番目に入ったのだから。

僕は、結果が出た後、カノンの元へと向かった。
すぐにでもお祝いの言葉をかけたかった。

お疲れ様。今度は、ゆっくり休んで、一緒に美味しい飯でも食いに行こう。

と、その声をかけたかった。

最高の労いの言葉をかけてやりたかった。
だが、僕の前に現れた人物は意外な人物だった。

「やあ、楓くん」

笑顔を見せ、僕に声をかけた人物は、堺先輩だった。

「堺……先輩？」

僕は堺先輩に、コンテスト会場から少し外れた、公園へと呼び出された。

コンテスト会場から外へ出ると、日の光が差し込み、心地よい風が流れていた。

僕と堺先輩は、公園へと到着した。

平日ということもあり、公園には人があまりいなかった。

僕たちは、噴水の近くにあるベンチに座った。

「急にどうしたんですか？」

僕は、早く用件を終わりにしたかった。カノンに早く会って、労いの言葉をかけたかった。

慌てた様子の僕を見た堺先輩は、にこっと笑うと、手に持っていた缶コーヒーを僕に手渡した。

「いただきます」

僕は、堺先輩から缶コーヒーを受け取ると、早速喉の渴きを潤した。

「トトさん……」

「え？」

堺先輩は、ベンチから立ち上がり、僕の方を向いた。

「楓くんは、山下さんのこと……どう思う？」

!?

僕は、飲んでいたコーヒーを吹き出してしまった。

「すみません……」

その様子を見ていた堺先輩は、少し笑みを見せたが、急に真剣な表情になった。

その表情は、少し恐怖さえ感じるものだった。

たった一つだ。たった年齢が一つ上だっただけで、ここまで恐怖すら与えられる表情をつくれるなんて……

さすがは、堺先輩といったところか……

「単刀直入に言うよ」

僕も、ベンチから立ち上がり、塗れたベンチを拭いた。

そんなに、吹き出したことが悪かったことなのだろうか……

そんなことを思いつつも、堺先輩の方を向いた。
堺先輩は少し間をあげ、再び話し始めた。

「俺は、山下さんが好きだ」

「えっ……」

堺先輩の思いも寄らぬ発言に、僕は、自分の耳を疑った。
啞然としている僕に、追い打ちをかけるように、堺先輩は話した。

「楓くんには、一言言っておこうと思ってね」

「……」

僕の表情を見ながら、堺先輩はにこっと笑った。

なんだか、その表情がたまらなく嫌だった。

「堺先輩は……」

「ん？」

こんな事を言っただけなのに分らなかった。
でも、堺先輩の笑顔を見ると、なぜか悔しかったのだ。

「堺先輩は、カノンの何が分かるんですか？」

そう……

堺先輩とカノンが出会ったのは、たったの2年間ぐらいだ。
それなのに、どうしてそんなに好きだなんて軽く言える？
カノンと一緒にいた時間は、僕の方が長い。でも、僕は一度も好き
だなんて言葉、口に出したことはない。
でも、堺先輩は、簡単に好きだと言ってみせたのだった。

「何を分かって、カノンを好きだって言えるんですか？」

堺先輩は、僕が熱くなっているのとは反対に、いつも通りの冷静な
感情だった。

「確かに、楓くんよりも、山下さんと知り合ったのは最近なのかもしれない」

「じゃあ、どうして……」

「俺は、これからの山下さんと一緒に過ごしていきたいんだ。」

「これ……から……？」

堺先輩は優しい笑顔を見せた。

まるで、好きな人を想いながら話しているかのように……

「過去なんて、どうでも良い。これから先のことを、好きな人と……
…山下さんと、共に歩んでいきたいんだ」

全てを否定されたみたいだった。

僕とカノンの昔の思い出を。今までの思い出を……

でも、僕はそれ以上、堺先輩に何も言えなかった。

完全に僕の敗北だった。

“好き”って感情の深さは、一緒にいた時間の長さじゃない。どれだけ、好きな人を想うことができるのか。

堺先輩は、そのことをすでに知っていたのだ。

僕は、一緒にいた時間の長さにこだわり、大事なことを忘れていた

のだ。

カノンのことなんて想ってなかったんだ……。僕は、自分が良ければそれで良いと思っていたんだ……。そんな自分がとても恥ずかしく、惨めに思えた。

結局この日は、敗北感だけが残ることになった。

堺先輩が僕に衝撃的な事を話して、一日が経った。

僕は、いつも通り、学校へと登校した。

もちろん、昨日のことは忘れようとしても忘れられずにいた。

仁に、そのことを話したら気にするなと言っていたのだが、どうやって気にせずいられるというのだ。

教室に入ると、いつも以上に、教室全体が賑やかだった。僕は、自分の席に着き、鞆を机の横にかける。

「内藤氏、内藤氏！」

朝っぱらから、ハイテンションで僕に話しかける真之介。

「申し訳ないんだが、気分が乗らないから、話はまた後にしてもらえるかな？」

我ながら、なんとも紳士的な応対だ。

それでも、真之介は僕に話しかけてきた。

いい加減うるさかったので、仕方なく耳を傾ける。

「ニユースなんですよ！それも大ニユース！」

「分かった分かった。で、何？」

「ほら、山下殿を見てください。」

僕は、真之介の言われたとおり、カノンの席の方に目を向けた。

「!？」

カノンは、髪の毛をばっさり切っていたのだ。
カノンの特徴とも言える長い髪が、今では、肩ぐらいにまで切られていた。

僕は、いてもたってもいられなくなり、自分の席を立ち、カノンがいる場所へと向かった。

カノンは、僕のこと気づいた。

「あ、かあくん、おはよう！」

「おはよう」

「髪の毛、ばっさり切ったんだ〜！」

カノンは、どこかいつもと様子が違かった。

いつもよりも落ち着きがないような、いつもよりも違う雰囲気があった。

今日のカノンは、とにかくおかしかった。

「どっ？？似合っかな？」

「……うん、似合っと思っよ」

「そっか、良かった〜」

カノンが、遠い存在になってしまった気がしてならなかった。この感覚は、いったい何なのだろうか……。

僕はとりあえず、自分の席に戻り、正気を取り戻そうとしていた。何かの勘違いだ。

昨日、あんなことがあったから、自分がどうにかなっているんだ。僕は、自分にそう言い聞かせ、動揺を隠そうとしていた。

すると、教室に仁が入ってきた。

仁は、僕が席に座っていることに気づくと、少々小走りで、僕の方に来た。

「楓、おはよ!」

「おう、仁。おはよう」

仁は僕の方に近寄ると、急に真顔になる。

「楓、一つ報告がある。」

「なんだよ、彼女ができたってか?」

僕の冗談を軽く流した仁は、辺りを一度確認し、僕の耳元で呟くように言った。

「昨日……堺ってやつが、カノンちゃんに告白したみたいだぞ」

「は?!」

僕は、仁の衝撃的な発言に、思わず大きな声を出してしまった。クラスのみんなは、僕の方に視線を送る。

「い、いや、なんでもないんで。あは、あはは。」

なんでもないわけがなかった。

堺先輩は、僕と話しをした後、カノンに告白をしたらしい。カノンがどんな返事をしたのかは分からないが、なんとという急展開だ。

僕は、事実を受け止め切れそうになかった。

カノンを再び見ると、カノンは、吉沢さんたちと昨日のことについて話していた。

その表情はやはり、いつものカノンではなかった。

今日の僕は、何事も集中してやることができなかった。

授業中も清掃の時も、仁達と話している時ですら、僕はカノンのことが気になった。

堺先輩の告白を受けて、カノンはどう返事をしたのだろうか。

堺先輩の想いは、本気だった。

あの時、堺先輩と話して思った。堺先輩は、カノンのことを本当に好きなんだと。

その想いは生半可なものじゃなく、真剣だった。

結局、全てにおいて集中することができず、気づくと放課後になっていた。

僕は、いつも通り、教室で部活練習のための準備にとりかかる。

「……………」

今ですら、僕はカノンのことで頭がいっぱいだった。

髪の毛を短く切ったカノン。いつもと、どこか雰囲気の違いがカノン

……………

あんなに近くにいたカノンが、急に遠いところへ行ってしまったみたいだった。

「かあくん！」

「うおっ！」

急にカノンの声がしたので、僕は驚いた。

カノンは、僕の驚いた様子を見て、くすっと笑った。

「そんなに、驚かなくても良いのに！」

「いや、普通にびっくりするよ……ところで、部活は？」

カノンはうんつと頷き、下を向いた。

何かまずいことでも言ってしまったのだろうか……

僕がそんなことを思っていると、カノンは再び僕の方を向いた。

「ちょっと……時間良い？」

珍しいカノンの誘いを、断るわけがなかった。

僕たちは、この高校で一番景色の良い、屋上へと向かった。

ドアを開けると、気持ちいい風が僕たちを出迎えてくれた。

なんか、同じようなことが前にもあったような……

僕とカノンは、屋上から夕陽が沈んでいくのを眺めた。
空は夕陽色に染まっており、とても幻想的だった。

「昨日は、おつかれさん。」

「え？」

カノンは、僕の方を見た。

カノンに見られると、どうしても緊張してしまう自分がいた。
だが、昨日言いそびれた事を、ちゃんと言わないと……

「あと……おめでとう」

「ありがとう！」

カノンは、笑顔で僕にそう言った。

その笑顔は、優しく、とても癒される、いつものカノンの笑顔だった。

この笑顔を見たとき、僕はどこか安心した気持ちになった。

僕とカノンは再び、屋上から校庭を眺める。

校庭では、すでに部活練習が始まっていた。

もちろんテニス部員も、準備体操をし、練習の準備を始めていた。

僕は、それでも良かった。練習のことよりも、カノンと一緒にいたかった。

カノンと二人きりになって、こうして話をしていたかった。

「昨日ね……」

カノンは夕陽を見ながら、話し始めた。

「私、堺先輩に告白されたの」

「……」

カノンからその事を聞くと、なぜだか凄く切なくなった。

やっぱり本当だったんだと。

僕は、シヨックを隠せなかった。手や足が震え、今にでも泣きだしてしまいそうな感情になった。

「凄く、嬉かった。でも……」

「付き合っちゃえよ」

僕は、カノンの話が終わる前に、心にでもないことを言っていた。カノンが、堺先輩にどう返事をしたのかが、聞きたくなかったのかもしれない。

「え……?」

驚いた表情で僕を見るカノン。

「そんなに、堺先輩の事が好きなら付き合えば良いだろ。」

「そんな……」

「髪を切ったことも、いつもより妙にテンションが高いことも、全部、堺先輩に告白されたからだろ?」

「待って。そんな、違うよ……」

僕は、なぜか感情的だった。

カノンの言葉が全然聞こえなかった。
全て、僕の予想にしか過ぎないこと。僕が勝手に思っていたことを、カノンに言っていた。

「そりゃそうだよな。堺先輩は、格好いいし、勉強もできるし、ピアノも上手だし。そんな男に告白されたら、嬉しいよな。」

カノンは黙ったまま下を向いていた。

素直に言えば良いじゃないか。

堺先輩が好きだって。

僕みたいな、どこにでもいるような男より、堺先輩のことが好きなんだって。

「もういい。堺先輩と、どうぞお幸せ……」

パンツッという音と同時に、僕の左頬に痛みが走った。
そう、カノンが僕の左頬に平手打ちをしたのだ。

「っ……何する……」

僕は、カノンの方を向いた瞬間、それ以上何も言うことができなかつた。

カノンは、泣いていた。

僕は今まで、カノンが泣いた表情を見たことがない。いつも元気で、明るい笑顔のカノンしか僕は見たことがなかった。だが、カノンは僕を見て泣いていたのだ。その表情はとても印象的だった。僕を睨みつけるように……それでいて、とても悲しんでいる表情だった。

「酷いよ……」

「……」

「こんなの……酷すぎるよ……」

カノンはそう言い残し、この場を去った。

僕は、なんて事を言ってしまったんだ……。

カノンの本当の気持ちを聞くことなく、自分が勝手に思ったことをカノンに押しつけただけ。

僕はカノンを泣かせてしまった。

カノンが好きだ？……何を馬鹿なことを言っている。

僕にそんな権利はない。

カノンを傷つけてしまった奴が、カノンを愛することなんて許されやしないのだ。

僕は、左頬に手を添え、その場に立ち尽くしていた。

カノンはこの日以来、僕のことを“かあくん”とは、呼ばなくなつた。

それは、どんなに辛い虐めよりも、どんなに酷い罵倒よりも、されてほしくないことだった。

P・16 この思い届きますように(後書き)

次回更新予定日：2月27日

僕とカノンの関係は、今も修復されることはなかった。

むしろ、日が経つにつれ、カノンはだんだん遠い存在となっていく。

もう、受験シーズンも後半戦に突入し、それが終われば卒業だ。

僕とカノンとの間にできた溝を何とかしたくても、何もできない自分に、腹立たしさを感じていた。

歯がゆさに耐えきれず、僕はある日曜日に、仁の家に行った。

そこで、全てを仁に話した。

あの時、カノンにしてしまったこと。カノンが泣いたこと……

助けが欲しかったわけではない。ただ、話を聞いて欲しかったのだ。

仁は、僕の話最後まで聞いてくれた。

僕の話が終わると、仁は、少し間をおき、一言僕に言った。

「楓は、このままで良いのか？」

良いわけがなかった。

ただ、どうしたら良いのか分からなかった。

カノンは、本当に遠い存在となってしまうている。

そうさせてしまったのは、他でもない、僕の責任だった。

勝手に僕が思い込んでいたことを、押しつけた。カノンの本当の気持ち、聞き取れなかった。

カノンを……信じることができなかった……

そんな僕に、今さら、何ができるのだろうか。

僕は、仁の問いかけに答えることができなかった。
そんな僕を仁は見て、ため息を一つした。

「俺は、どんなことがあると、楓の味方だ。」

「……」

「だから、楓がそうだって決めたことなら、反対はしない。ただ……」

僕は、仁の顔を見る。

仁は、いつになく真剣な顔だった。

「後悔はするなよ？それだけは、言うておく。」

耳が痛かった。

仁の言葉は、まるで僕の本心を捉えているかのようだった。

今日、僕たちのクラスでは、席替えがあった。

今日ほど、神様を憎んだ事は今までにないだろう。

僕の隣の席になったのは、カノン。

今までの自分なら、嬉しくて嬉しくてたまらなかっただろう。

だが、今はどうだろうか。

僕の隣の席がカノンだということを知った時、僕は少なからず嫌だと感じた。

それは、あの日のことを思い出してしまう。

そんな気がしたからだ。

だが、いつまでも、こんな関係は嫌だった。

仁が言っていたように、後悔はしたくない。なんとしてでも、カノンとまた一緒に笑い合い、話がしたかった。

「カノン、よろしく！」

僕は、自分が出せる勇気を最大限に振り絞り、隣の席にいるカノンに、話しかけた。

「よろしくね、楓くん！」

カノンは笑顔で、そう返事をした。
僕は、カノンからその言葉を聞いたとき、何も話すことができなくなっていた。

“楓くん”

……そう。カノンは、あの日以来、僕のことを“楓くん”と言うようになった。

その言葉を聞かされたときに、僕はとても辛かった。

“ かあくん ”

……僕とカノンの思い出がしまった言葉だった。
だが、その思い出も、全て崩れ去ってしまったのかもしれない。

僕が、全てを壊してしまった……

隣の席にカノンがいても、僕とカノンの距離は、縮まることはなかった。

日が経つにつれ、話すことも、ましてや挨拶でさえ、することがなくなかった。

そんな日々が、僕は耐えられなくなった。

授業中も、部活の時も、仁達と休み時間に話している時ですら、カノンの事で悩み、考えることが、辛くて辛くてたまらなかった。

もう、我慢の限界だった。

僕とカノンの距離はどうやっても近づけることはできない。

もう、こんなに辛くなるのは嫌だ……

僕は、決めた。

もう、忘れよう……何もかも。

そうすれば、こんなに考えることも、悩むことだつてないのだから。カノンと一緒に過ごした日々も、カノンとの思い出も、全て忘れよう。

カノンの事が好きだったことも。カノンの笑顔も……カノンが泣いたことも……

忘れるのは、とても辛い事かもしれない。苦しい事かもしれない。でも、忘れてしまえば、あとは大丈夫。

そう決めた日から、僕は何かに没頭するようになった。

部活の練習も積極的に参加するようになったし、受験勉強も毎日するようになった。

将来どうしたいかなんて、全然決まっていなかったし、自分がこの先どうなるかなんて、想像もしなかった。

ただただ、カノンのことを忘れるために、血反吐を吐くぐらい何かに没頭し続けた。

気づけば、僕たちは卒業式の日を迎えていた。
天気は、見事なまでの晴れであった。お天道様も、僕たちを元気に
見届けてくれるらしい。

卒業式は、お決まりの体育館で行われる。
なんとも言えない独特な緊張感の中、卒業式はついに始まった。

眠たくなるような、先生達のお別れの言葉。
今回で卒業式は3回やっているが、いつも思う。
この先生達のお別れの言葉というのは、どうしてこんなにも長いも
のなのだろうか。

しかも、事前に書いた紙を見ながら読んでいただけじゃないか。
だったら、その紙を僕たちによこせと。あとで、たっぷり読んであ
げるからぞ。

先生の挨拶も終わり、校歌と国歌斉唱が始まる。

僕の隣で元気よく歌う真之介。

やはり、最後の最後まで真之介はしてくれる男だな。

もちろん、僕と仁は、ロパクだった。どうも、今日は声の調子が悪いらしい。

そして、卒業証書授与が始まった。

この時ばかりは、緊張が一気に高ぶった。

名前を呼ばれた生徒は、席を立ち、卒業証書を貰いに行く。

考えただけで、とてつもない緊張感に襲われる。

僕たちのクラスはAクラスなので、出番も近い。

生唾を飲みながら、僕は自分の出番が来るのを待った。

いっちーが、マイクを持ち、紙を見る。

かなりの度胸があるいっちーですら、緊張している様子だった。

一呼吸置き、Aクラスの生徒の名を読み始めた。

「出席番号2。内山信輝」

「は、は、は、はいつ!!」

メガネを異常なまでに直し、席を立った。

足は震え、今にでも倒れそうな様子だ。

いつちーも、心配そうに内山の事を見ていた。

内山信輝。

修学旅行でしか話したことはなかったけど、とにかく印象的だった。目的のカードを見つける速度が尋常じゃなく早く、カードの話になると、右に出るものはいない。

確かに、オタクっぽくて、よく分からなかった奴だったけど、でも、根は良い人なんだと、僕は信じている。

「出席番号11。岡田真之介」

「はっいつ!!」

声を裏返ししながら、席を立つ真之介。

いつちーも、真之介の声を聞くと、一瞬だが笑顔を見せていた。

岡田真之介。

こいつは、とにかく元気な奴だ。自分のことよりも、まず相手のことを少しでも知りたいと、相手の話をよく聞く。

しかも、いくら嫌われても、いくら悪口を言われようとも、真之介はめげない。

だからなのか、真之介の周りにはいつも人が多く集まる。

結局、バイトの面接は不合格で終わったけど、きつと真之介なら、いつかはバイト、見つかるさ。

「出席番号15。田端洋平」

「はい」

冷静な返事で席を立つ田端。

田端洋平。

性格は、とても真面目で物静かだ。

部活は、僕と同じくテニス部であり、一緒にダブルスを組むと、本当に頼りになる奴だった。

僕たちの引退試合では、田端の活躍により、準優勝を飾ることができた。

将来は、会計士になりたいと、経済関係の大学に入学することになった。

またいつか一緒にテニスをしよう。その時は、シングルスで勝負しようぜ。

「出席番号17。内藤楓」

僕の出番だ。

名前を呼ばれた瞬間、もの凄い緊張感が僕を襲った。今までにない、かなりの緊張感だ。腰が今にでも抜けそうになる。

声を裏返さないように気を付けて返事をし、席を立ち、卒業証書を受け取りに行った。

「はい、おめでとう」

校長先生の、今まで見たこともない笑顔が、なんとも言えず素敵だった。

僕は、卒業証書を受け取り、一度大きく頭を下げ、自分の席へと戻った。

「出席番号18。根本遥」

「……」

返事なしですか!?

いや、彼女なりに返事はしたのだろう。

いっちは、根本さんの姿を確認すると、呼吸を小さく一つした。

根本遥。

とても、掴めない性格の持ち主。

根本さんとは修学旅行の時に話したことがあるが、いつも淡泊な返事しか、返ってこなかった。

ある大学に入学することになったのだが、果たして大丈夫だろうか

……いや、心配ないな。

お決まりの「問題ありません」で、全ては上手くいくはずだ。

「出席番号22。宮本仁」

「……」

仁は、軽快な返事をし、席を立った。さすがは、仁。と言ったところか。

宮本仁。

僕の親友であり、よきライバルだ。ルックスも素晴らしいものをもっているが、とにかく運動神経が人間の域を超えている。

他人を偏見せず、優しく接することが、当たり前かのようにできる。友達のことを第一に考え、絆というものを凄く大切にする。

仁……、僕たちは、いつまでも親友だからな。

「出席番号25。山下カノン」

「出席番号26。山本桜」

山本桜。

正直、全然話したことがなかった。

カノンと同じ部活だったのに、音楽コンクールに参加できたのがカノンだけだったことに対し、とても悔しがっていた。

それでも、カノンを一生懸命応援する姿は、とても格好良かった。

話によると、音楽系の専門学校で自分の腕を磨くらしい。きっと、山本さんだったら大丈夫さ。

「出席番号28。吉沢愛莉」

「はい！」

吉沢さんは、力のある元気な声で返事をした。

吉沢愛莉。

吉沢さんとは、図書室で偶然出会った。

とても社交的で、人情味が溢れる人。それに、しっかり者で、部長と生徒会長を務めた。

まるで男のような性格からか、女子からも男子からも人気者だった。僕も、吉沢さんに出会い、話すことができ、とても良かったと思っている。

お互い、良き文学生でいられるように……いや、なんでもありません。

こうして、卒業証書は無事に終わり、僕たちの卒業式は終わりを迎

えた。

みんなは、目に涙を浮かべ、この日が終わるのを惜しんでいた。僕もまた、この卒業式という日を、複雑な想いで見届けていた。

僕は、卒業式が終わり、みんなと別れの挨拶をしたあと、ある所へ向かっていた。

324

“ 3 - A ”

そこは、僕たちが今まで過ごしてきた教室。思い出がたくさん詰まった教室だった。

教室に到着し、教室入り口の扉を開ける。

もちろん、教室の中には、誰もいなかった。

僕は、教室の中へ入ると、自分の席へ向かった。

そこから、教室全体を見渡すように見る。

落書き一つない、綺麗になった黒板。きちんと並べられた机。いつ

ちーのいない教壇……

昨日まで、僕たちはここで、友達と話し、勉強し、騒いでいたのに

……何事もなかったかのような静けさだ……

僕は目を瞑る。

右も左も分からない高校1年生の時、初めて友達になったのは、仁だった。

仁は、本当にスポーツが好きで、毎日スポーツの話を聞かされたっけな……それでも、楽しかった。

そして、翔太に出会った。本当に、馬鹿でウザくて、どうしようもない奴だったけど、どうしようもなく、良い奴だった。

高校2年生になると、吉沢さんや内山に出会い、修学旅行や体育祭などをした。

どれも、今思うと、本当に幸せな日々だったんだと思うことができ

る。みんなに会えて、本当に良かった。

みんなと共に過ごした時間は、僕にとって、大切な思い出だ……

眠っていた目を開け、僕はふと、カノンが座っていた席に目を向ける。

もちろん、そこにはカノンの姿はなかった。

僕は、カノンのことを忘れようと決めた日から、今日という日まで、がむしゃらに毎日を走り続けた。

受験勉強も、部活も……バイトだった。

別に目的があったわけじゃない。ただ、カノンのことを考えたくないと思ったからだ。

だが、今でも、僕はカノンのことが忘れられずにいる。

元気で優しい笑顔……僕に一度だけ見せた、涙……カノンと一緒に過ごしてきた日々……

忘れる事なんて、できるはずがなかった。

でも、もうカノンに会うことは、この先ないだろう……もし会ったとしても、笑顔で話すことはできない……

僕とカノンの関係は、結局、修復されることはなかったのだから……

僕は、教壇の前に向かい、教室全体を見渡すように立った。

「3-A、内藤楓。今まで、ありがとうございました。」

誰もいない教室で、僕は深々とお辞儀をし、最後の別れの挨拶をした。

卒業式から1週間後、僕や仁含め、元Aクラスだけで“謝恩会”が行われることになった。
今まで三年間、共に過ごしてきたクラスメイトで、お別れ会をするのだ。

この謝恩会を企画したのは、吉沢さんだった。

卒業式の日にお別れをするのも寂しいだろうからって、卒業式の前に、クラスのみんなに誘いを入れたのだ。

さすがは、元生徒会長。なんて気が利く人なんだろう。

場所は、僕たちの高校からそう遠くない場所にある、中華料理屋になった。

少し料理の値段が高いのがネックだが、味も盛りつけやボリュームも満足がいくもので、お別れ会をするのにはもってこいの場所だ。

当日、僕は最近買ったばかりのお気に入りのお服を着て、謝恩会の会

場へ向かった。

謝恩会に参加した人数は、吉沢さんの予想を遙かに上回った。

中には風邪や仕事があつていけない人もいたが、ほとんどのメンバーが集まった。

クラスメイトたちは、1週間ぶりに会う仲間を目の前にして、高校の思い出話で盛り上がっていた。

僕も、仁や真之介たちと、修学旅行の話や、翔太との思い出話で盛り上がっていた。

1週間ぶりとは言え、どこかとても懐かしい感じがした。

「そういえば、カノンちゃん、いなくないか？」

仁が辺りを見回し、僕に尋ねるかのように言った。

僕も、辺りを見回したが、カノンの姿がそこにはなかった。

「どつしたんでしょうか……風邪でも引いてしまったのでしょうかね……」

真之介も心配している表情をしながら、カノンを探していた。

「きつと、寝坊でもしてるんだろ」

僕は、笑顔でそう言ってみせたが、とても嫌な予感がした。なぜだから分からないが、とても嫌な予感だった。

- 11 : 40 -

謝恩会が始まって一時間が経った。

それでも、カノンが現れることはなかった。

僕の嫌な予感は、次第に強くなっていった。

「ちよつと、ごめん。席外すわ」

僕は、仁と真之介との会話を一時止めると、企画者である吉沢さんの元へと向かった。

「お、楓くんじゃない。どうしたの？」

吉沢さんは、僕の呼びかけに気づくと、友達の山本さんと喋るのを一時中断し、僕の方を向いた。

「あのさ。カノンは……どうしたの？」

僕が吉沢さんに尋ねると、吉沢さんは、意外なリアクションをとった。

「え！？楓くんに、言ってなかったんだ！？」

どういうことだ……

何がなんだか分からなかった。

「言ってなかったって、何を？」

僕は、少し感情的になりながら、吉沢さんに尋ねた。

「あ、うん……今日は、カノン謝恩会に来ないよ」

「どっししてっ」

「今日……実家に帰るんだってさ」

！？

僕は驚いた。

そんなこと、カノンから一度も聞かされたことはなかったからだ。カノンは、今日、実家に帰ってしまう……カノンの実家は、この町からずっと遠いところにある。ということは、次、カノンといつ会えるのか分からない……

「そっか……ありがとう」

いや、別にどうでも良いことじゃないか。逆に、これで良い。

カノンと今さら会ったところで、僕に何ができる？

カノンを傷つけ、涙を流させてしまった。

そんな僕が、なぜ今さらカノンに会いたいと言えることができる？

「楓くん」

「……？」

吉沢さんは、少し考えるように間をあけ、何かを決心したかのように僕の方を向いた。

「楓くんとカノンの事だったから、私は今まで何も言わなかったし、これからも言うつもりはなかった……」

「え……」

急に何を……？

僕とカノンの事……？

僕は、吉沢さんの一言一句を、聞き逃さないように、しっかりと耳を傾けた。

「実はね……」

僕は、吉沢さんの話が終わると同時に、この謝恩会の会場から飛び出していた。

吉沢さんが話していたこと……それは、どれも信じられるものではなかった。

カノンは、堺先輩からの告白を断ったこと。
あの日、カノンが涙を見せた日。カノンは、僕に告白をしようとしていたこと。
髪の毛を切ったのは、自分の気持ちに正直になることを決めたからだということ。

吉沢さんに聞かされて、ようやく分かったのだ。

遅かった。遅すぎた。

カノンと、あれだけ一緒にいたのに、僕はカノンのことを何も分かっていなかった。
あんなに近くにいたのに、僕は、カノンのことを何も分かっていなかった。

僕は駐輪場に止めてあった自転車を拝借すると、急いで駅の方へと向かった。

全力で自転車を動かした。
カノンが乗る電車の出発時刻は12時20分。と、吉沢さんが言うていた。

もう、30分もなかった。

この場所からどれだけ飛ばしても、30分以上かかることぐらい、知っている。

でも、諦めたくなかった。諦めてはいけないと思ったのだ。

僕はカノンの事が、好きだった。

でも、カノンに一度も本当のことを言うことが、できなかった。いや、言えなかった。

なぜか？……恐かったのだ。

自分が、カノンに本当のことを伝えて、カノンがなんて言うんだろうって。

結果や後先のことばかり考えてしまっていた。そうやって、ずっと自分の気持ちから逃げていた。

でも、カノンは違かった。

本当の事を、自分の気持ちを正直に言おうとしていたんだ。

なのに、僕はカノンの気持ちを踏みにじってしまった。

僕が勝手に思い込んでいたことを、カノンに押しつけた。

それが、カノンにとってどれだけ悲しかったことなのか、どれだけ傷つくものだったのか……

途中、大きな石につまずいた。

もの凄いスピードを出していたこともあり、僕は予想以上に吹き飛ばされた。

受け身なんてとったことがなかったので、僕は激しく地面に叩きつけられ、全身からは、今まで経験したことのない痛みが走る。

「くそっ……」

僕は、痛みを堪え、必死に立ち上がった。

昨日、買ったばかりの服は、もうボロボロになっていた。

そんなことは、どうでも良かった。

とにかく、駅に一秒でも早く行かなければ。

僕は、自転車を取りに行った。

転がっていた自転車を見ると、自転車は大破していた。

ハンドルは大きく曲がり、タイヤはパンクしていた。

僕は自転車に乗るのを諦め、全力で走ることにした。

走ろうと、地面に足を置くと、とてつもない痛みが走る。

それでも僕は、全力で走った。

どれだけ痛くても、どれだけ疲れようとも、止まろうとは決してしなかった。

もう悩まないって決めた？もう苦しまないって決めた？

一番悩んでいたのは誰だ。
一番苦しんでいたのは誰だ。
僕じゃない。カノンなのに……

部活で鍛えていたとはいえ、疲労は限界に近かった。僕の足は、悲鳴をあげていた。
だが、もうすぐ。もうすぐで、駅に到着する。
少しずつ、駅の入り口が見えてきた。

カノン……
勝手なのは分かってる。
でも、もう一度だけ。もう一度だけ、僕と会ってくれるなら……

人混みをかき分け、駅の入り口へ入る。
改札を抜けると、いくつかのゲートがあった。
カノンが乗るゲートは、吉沢さんの話だと4ゲート。
僕は、4ゲートを探し、見つけると、階段を全力で駆け上がった。
階段を上るたびに、ズキズキと痛みが足から脳に伝わり、吐き気す

ら感じられる。

だが、絶対に止まりたくはなかった。

もう一度だけ、僕と会ってくれるなら、カノンに謝りたい。
そして……カノンに、僕の想いを伝えたい。

もし、それがカノンに伝わらなくても、カノンが僕にしようとしてくれたみたいに……

自分の気持ちを……

ありのままの自分を……

もうすぐで、この長い長い階段を上り終える。
この先にはカノンがいる。
カノンが待っているんだ……

「そん……な……」

僕が、階段を上り終えた時にはもう、カノンが乗った電車は、発車していた。

間に合わなかった……
カノンが乗った電車は、無情にも、遠く見えないところへ行ってしまうのだった。

そっだよな……間に合うはずがないじゃないか。
恋愛物語じゃあるまいし、電車は都合の良い時間まで待ってはくれない……

僕は、その場に膝をついた。
知らず知らずのうちに、僕の目からは冷たいものが溢れていた。

P・17 さよなら(後書き)

次回、ついに最終回。

最終更新予定日：2月29日

L a s t P a g e ・あの日のあたる場所で

時間が経つのは早いもので、あれから丁度半月が経った。

僕たちは、それぞれ違う道歩んだ。

岡田真之介と内山信輝は、同じ大学に入学したみたいだ。

その大学で、また新たな仲間を作り、その仲間達と漫画研究部を設立し、キャンパスライフをエンジョイしているようだ。

もちろん、部長は真之介。あいつの事だから、きっとたくさん仲間にも困まれ、楽しくやっているだろう。

内山も真之介がいれば、恐らく大丈夫だな。

カードについて熱く語れる友達ができることを、僕は祈っているよ。

吉沢愛莉は、某有名大学に入学した。

そこで吉沢さんは、様々な国の語学を学びたいそうだ。

日本だけではなく、色んな国の言葉を学び、コミュニケーションをとりたいのだという。

吉沢さんらしい考えだ。

もし、今度会うときは、英語を一つ、僕にも教えてくれ。最高の発音で言っつてやるうじやないか。

宮本仁は、スポーツで有名な大学に入学した。

高校から始めた陸上を極めるために、日々努力しているみたいだ。仁のことだ。きっと、将来はプロの陸上選手として活躍するだろう。親友として、ライバルとして、僕は応援している。

秋山翔太と、最近連絡をとった。

僕は、やっと翔太に、メールを送れたのだ。

翔太は、ちゃんと就職できたみたいだ。料理人の卵として、毎日下積み生活を送っているのだという。

忙しくてなかなか地元に戻れないと、愚痴をこぼしていた。

ゆっくりで良いさ。落ち着いたら、地元に戻ってくれば良い。

僕たちは、どれだけ離れていても親友なんだから……

一流の料理人になったとき、僕と仁に、何か料理を作ってくれ。期待しているからな。

そして僕もまた、自分の道を歩んでいた。

高校三年生で、必死に勉強をした結果、なんとか第一志望の大学に入学することができた。

前々から、工業分野に興味があったため、工業科の大学に入学した。もちろん、大学の講義は、今までに勉強したことがないものばかりだったので、とても難しい内容だった。

授業時間も、50分から90分に変わり、集中力が今まで以上に必要になった。

だが、やり甲斐はあった。

高校の時のように、やりたくないことをやるのではなく、自分がやりたいことを学び、知識を得るのだから。

毎日が充実した日々だった。

友達もつくることができ、成績も今のところ良い。

高校の時のように、この先が不安で恐いなんて気持ちは、今の自分にはこれっぽっちもなかった。

「まずい、遅刻する！」

今日は、いつも以上に寝過ぎたみたいだった。

僕は急いで大学に行く準備をし、苺牛乳とパンを持つと、玄関を出て、車庫に向かい、車庫から自転車を取りだし、家を後にした。

僕が通う大学は、自宅から通えるところにある。

もちろん、電車を使わなければ行けないのだが。

それでも、自宅から通えるなんて、自分にとっては好都合だった。

やっぱり、自宅が一番落ち着ける場所だしね。

駅に到着した僕は、駐輪場に自転車を置き、駅の入り口へと急いだ。
次の電車の発車時刻は8時30分。
僕は、現在の時刻を確認した。

なんとか、間に合いそうだ。

定期券を買っているので、切符を買うなんてことはしなくて良い。

僕は、改札を出て2番ゲートへ向かった。そこに待っていたのは、長い階段だった。

この階段を上れば、僕が通う、大学付近の駅に止まる電車が待っている。

僕は、急いで階段を上った。

急ぎすぎたためか、僕は鞆を落としてしまった。

しかも、追い打ちをかけるかのように、鞆から中身が出てしまったのだ。

344

なんてこった。

僕は、慌てながら鞆からあふれ出た教科書や筆記用具を鞆の中に戻すと、再び階段を上り始めた。

汽笛が鳴る。

僕が、階段を上りきった時には、8時30分の電車は扉を閉め、発車していた後だった。

僕は、走ったために上昇した心拍数を下げするため、深呼吸を一度すると、次の電車が来るのは何時なのか確認した。

- 8 : 5 0 -

ここから大学の駅まで、電車で20分はかかる。

そこから大学まで徒歩10分だ。

僕が受ける講義の開始時間は9時10分。間に合っはずがなかった。

345

「なんだかなあ……」

仕方がない。遅れてでも良いから行くか。

僕はため息を一つし、次の電車が来るのを待った。

ふと、空を見上げると、空は雲一つない天気だった。

日の光が、僕のいるホームを照らす。

僕は、自分の顔に左手を翳かざした。
とても眩しい……だが、11月という寒くなる季節。日の光はとて
も温かいものだった。

「かあくん！」

ほんのかすかな声だ。聞き間違いかもしれない、それぐらい小さな
声がしたように感じた。

“かあくん”と、僕のことを呼ぶ人は、この世で一人しかいない。
だが、“彼女”は、もうここにはいない。遠く、離れた場所へ行っ
てしまった。

だから、聞き間違いだっただけのことぐらい、分かっていた。
それでも、僕は後ろを振り返った。
もしかしたら……そう、願って……

- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -

僕は、その場に膝をつき、泣いた。

僕の目からは、自分でも驚くほどの涙が溢れていた。

遅かった……全てが遅かった……

カノンの想いを知ったのも。

僕が自分の、本当の気持ちに気づいたことも。

そして、カノンに本当のことを言おうと決めたことも。

全てが遅かった……

カノンに気持ちを伝えられないまま、カノンは行ってしまった。
チャンスは、たくさんあった。

カノンに気持ちを伝えられるチャンスは、数え切れないほどあったのに。

僕は、チャンスがなくなって、初めて気づいた。

もっと早く、自分の気持ちをカノンに言っていればと。あの時、カノンの気持ちをしっかりと最後まで聞いていればと……

だが後悔しても、カノンはもう戻ってこない。
取り返しのつかないことをしてしまった……

「楓……くん？」

!?

この声は……

僕は、足の痛みをぐっと我慢すると、無理矢理立ち上がり、辺りを確認する。

辺りには、次の電車が来るのを待つ客がいた。そして、その中に、ある一人の女性が僕の方を見ていた。

肌は白く、髪の毛はセミロングで。まるで人形のように可愛い女性だった。

僕がよく知る人だった。

いつも、優しい笑顔を見せてくれる人だった。

僕の初めての友達になってくれた人だった。

涙を流し、僕に平手打ちをした人だった。

「カノン……」

そう、僕の事に気づき、僕の名を呼んだのは山下カノンだった。

でも、どうして……

吉沢さんの話だと、さっき出発した電車に乗る予定ではなかったのか。

「さっきの電車に乗るはずだったんだよね？」

僕がそう言うと、カノンは首を傾げながら答えた。

「ううん。次の電車だよ……？」

なるほど……
吉沢さんの奴め……

僕は、カノンの話で把握することができた。
吉沢さんは、敢えて僕を急がせるために、一つ早い電車の出発時間を教えたのだ。
なんて憎いことをしてくれる……

「楓くん、大丈夫？」

カノンは僕のボロボロになった姿を見て、心配そうに言った。
だが、今でもカノンは僕のことを“楓くん”と呼んでいた。
そりゃそうだ。

僕は、カノンを傷つけてしまったのだから……当然の事だ……

「カノン、話がある」

「え？ちよ、ちよつと……」

僕は、カノンの腕を持ち、駅のホームでも人が少ない場所へ移動した。
なるべく人がいないところじゃないと、緊張して、自分の気持ちをうまく伝えることができないと思ったからだ。

この辺りで良いか……

僕は、なるべく人がいない所に行くと、カノンの腕を放し、カノンをじっと見た。

カノンは、僕から視線を逸らし、下を向いていた。それでも僕は、カノンから目を逸らさなかった。

もう、逃げないって決めたから……

僕は、ぐっと手に力を入れた。

いざ、カノンに自分の気持ちを伝えようとする、緊張してしまう。

僕は、なんて臆病者なんだ……

それでもカノンに言わなければ……自分の気持ちを。

本当の気持ちを言っ、どう思われるかなんて分からない。

だが、言わなければ駄目だと、そう思ったのだ。

これが、ラストチャンス。これが僕に残された最後のチャンスなんだ……

「カノンがさ、ある雨の日。図書室で僕に質問をしたのを覚えてる？」

僕の問いかけに答えることもなく、カノンは黙り、下を向いていた。

「あの時、僕は何も答えることができなかった。いや、答えられなかった……」

「……」

「カノンは、こう言ったよね。あの頃に戻りたいって……」

そう、僕たちが高校2年生になったあの雨の日の図書室で、カノンは僕に一つの質問をした。

“ かあくんは、もしあの頃に戻れるなら、戻りたい？”

と。

何も言えないでいる僕を見て、カノンはこう答えた。

“ 私は、あの頃に戻りたい……”

と。

あの意味が分からなかった。なぜ、カノンは、あの頃に戻りたいのだろうか？

僕は、小学生の頃、散々な虐めを受けていた。なぜ、その頃に戻らなければならぬのだろうか？

カノンの言っていることが分からなかった。

「僕も、やっと答えが見つかったよ」

でも、今ならその意味が少し……少しだけ分かる。
だから、僕もちゃんとあの時の質問の答えをしたい。

「僕は……あの頃に戻りたくはない」

僕がそう言うと、カノンは一瞬だけ、僕の方を見た。
だが、僕と視線が合うと、再び目を逸らし、下を向いた。

「カノンと一緒に遊んだこと、一緒に話したこと、一緒に過ごした
時間……あの頃の思い出は、本当に忘れられないものなんだ」

「……じゃあ、なぜ？」

カノンは、ようやく口を開いた。

その声は、今にでも途切れそうな、重く悲しい声だった。

「だからこそさー！」

「……」

「あの頃に戻って、何かをやり直したい事なんて、僕には何も無い。
幸せだったと思えるから……」

そう。

あの頃に戻って何かをやり直さなくても、十分、幸せな日々だった。カノンと一緒に笑ったり、一緒に遊んだり、時には喧嘩だってしたこともあった。

そんな日々が、僕は幸せだった。

それだけで、僕は虐められていても、辛くなんて感じなかったし、毎日が幸せだった。

だから、あの頃に戻って、やり直すことは何もないんだ。

僕の大切な思い出として、心の中に在り続ければ……戻る必要なんてない。

「そんなの……」

カノンは、僕を睨みつけるように見た。

「そんなの、綺麗事だよ！」

カノンが僕に初めて見せる顔だった。

感情的になるカノン……カノンの表情はまるで、僕に敵意があるようなものにすら感じられた。

僕は、驚き、言葉につまった。

そんな僕を見て、カノンは、少し間をおき、重い口を開けた。

「小学生の時……私が学校を休んだ月曜日のこと……覚えてる？」

「ああ……」

もちろん、覚えているさ。

あの日は、とても強い雨が降った月曜日だった。

その次の日、カノンは学校に来て、学校から去ることをクラスメイトに告げた。

「あの日は、凄い強い雨だったよね……でもね……私……学校に行つたんだよ？」

僕は、耳を疑った。

カノンが月曜日に学校に行った……？
そんなこと、全然分からなかった。

「放課後に、楓くんを待ってたの。いつ、楓くん来るんだろって……」

「嘘だろ……」

いつ、どこで待っていたんだ……僕の帰宅道と、カノンの帰宅道は、途中まで一緒なはず。

もし、カノンの言っていることが本当なら、僕はカノンに会ったはずだった。

だが、どう考えてもカノンとは会っていない。なぜだ……

僕は、記憶を辿った。

眠っていた記憶を呼び覚ますかのように、僕は頭をフル回転させた。

……そうか。……思い出した……

その日は、強い雨が降っていたこともあり、僕は親に連絡を取り、車で家に帰ったのだ。

どおりで、カノンを見かけることすら、できなかつたはずだ。

「私、その日ね……楓くんに、伝えたいことがあつたんだよ？」

カノンは、どこか寂しい表情で僕を見つめた。

カノンの寂しい表情を見るだけで、僕の心は締め付けられるように苦しかった。

「引越してしまうことも……楓くんの事が……好きだっただけ……」

！？

そんな……

カノンの話を聞いた瞬間、僕の体は小刻みに震え始めた。

カノンは、一度だけじゃなく、二度も僕に告白しようとしていた……
それなのに僕は……

「でも、楓くんは来なかった……。私の気持ちは……届かなかった
の」

カノンは涙を流していた。

それでも、僕のことを睨むような目で見ていた。

その表情がとても、切なかった……悲しかった……

僕は、自分自身を憎んだ。

僕は、カノンの気持ちを二度も踏みにじってしまったんだ……
最後の別れの日ですら、僕はカノンと喋ろうとはしなかった。

“さようなら”と言うのが恐くて……

“ありがとう”と言ってしまうえば、カノンが学校から去っていくのを認めてしまう気がして……

僕は、それが恐くて逃げていた。

カノンは、逃げずに、自分の気持ちと向き合っていたのに。僕と向き合おうとしてくれていたのに……

「かあくんは、幸せだったのかもしれない……でも、私は……」

カノンは、言葉に詰まり、下を向いた。

カノンが立っていた地面は、カノンの涙の雫で濡れていた。

あの頃に戻って、ちゃんと気持ちを伝えたいと、カノンは思っていたんだ……

僕は、それなのに“あの頃に、戻りたくない”と、平気で言ってしまった。

もちろん、カノンの気持ちを理解した上で、言ったつもりだった。

だが、やはり、僕は何もカノンのことを……カノンの気持ちを分かっただけではいなかった。

「……僕は、今の今まで、カノンのことを、誰よりも知っていると思っただけ」

小学生から、カノンとは友達で。

カノンと友達になってから、僕は、ほとんどカノンと一緒に行動をしていた。

休み時間は一緒に遊び、放課後は一緒に帰り……だから、僕は、カノンのことをたくさん知っていると思っていた。

知らない事なんてないと、そう思うぐらい、カノンのことは知っているつもりだった。

「でも、僕は何も分かってなかった。分かるうとしてなかった……」

でも、それは勘違いだったんだ。

僕は、カノンのことを何一つ理解してはいなかった。分かってはいなかった。

「カノンと一緒にいる時間は、たくさんあったのに……カノンがこんなに近くにいたのに……僕は、カノンのことを分かっていなかった……」

カノンと一緒にいる時間は、誰よりも多くあったはずなのに、僕は何も分かっていなかった……

「僕の好きな人が、悩み、苦しんでいたのに……僕は、気づいてあげられなかった。それどころか、自分の気持ちに嘘をついて、逃げたんだ」

僕は、カノンの笑顔しか見てなかった。

カノンは、いっぱいいっぱい悩んでいたのに……それでも、笑顔を僕に見せていたってことすら、僕は気づかなかった。

ただ、カノンの笑顔を見ているだけで良いと思っていたんだ。だから、カノンの本当の気持ちを理解することもできなかった。

「そして、勝手に焦り、自分の勝手な思いこみを無理矢理押しつけ、好きな人を……傷つけてしまった」

自分の気持ちに嘘を付き、カノンに本当の事を言えないでいる時、堺先輩が現れた。

堺先輩は、素直に自分の気持ちを認め、カノンに告白した。

僕は、焦った。自分が情けなかった。

挙げ句の果てには、カノンを傷つけさせてしまう結果となってしまう。

「それでも、謝ることも、本当の気持ちを伝えることだって、僕はしなかった。」

明日やれば良いさ。

明日があると、僕は、それでもカノンに本当の事を言えることができなかつた。

謝ることも、好きだつてという言葉も……

「恐かつた……好きな人に、僕の本当の気持ちを伝えてしまうことが……恐かつたんだ。」

結果のことばかり考え、僕は逃げていたんだ。
本当に辛い思いをしたのはカノンだったのに、僕は自分が一番辛い思いをしていると思つていた。

「臆病者だよな……最低な奴だよな……」

僕は、感情的になつてしまつたみたいで、言葉が出なかつた。
でも、言わなきゃいけないんだ。

どんなことがあっても……カノンに伝えなきゃいけない。

「カノン……」

カノンは、涙を流しながら、僕の方を向いた。

「謝って済むことじゃないのは、十分承知さ。それでも、言わせて欲しい……」

僕の本当の気持ちを込めて、僕はカノンに言った。

「辛い思いばかりさせて、ごめん……」

「……」

カノンから目を逸らすことなく、僕は力強く言った。

「カノンのことが、好きです。」

「かえで……くん……」

まだ、言い足りない気がしてならなかった。
もっともっと、カノンに自分の想いをぶつきたい。

人の目なんて気にせず、僕は大きな声で言った。
恥ずかしさなんて微塵もなかった。

「カノンのことが、好きで好きで、どうしようもないぐらい、好きです！」

僕の気持ちを、カノンに言えた瞬間だった。
結果なんて、どうでも良かった。

もし、カノンに、僕の気持ちが伝わらなくても……届かなかったとしても……

カノンには、ちゃんと言いたかった。

誰よりもカノンのことが好きだと。誰よりもカノンのことを愛していること。

泣きやんでいたカノンの顔は、再び涙でいっぱいになっていた。

僕は戸惑った。

また、カノンのことを泣かせてしまったのか……
また、カノンに傷をつけてしまったのかと……

カノンは、あははっと笑い、涙を拭いてみせた。
その笑顔は、あの頃の……いつもの、カノンの優しい笑顔だった。
僕は、カノンのその表情を見たとき、どこか安心感を感じていた。
久しぶりに、カノンの温かい笑顔を見れたから……

「かぁくんってさ……」

「？」

カノンは、駅のホームから見える空を見上げながら、僕に語りかけるように言った。

「ほんつとーに、人見知りが激しくて、冷たい態度しかとれなくて、友達いなくて、虐められっ子で……」

「おま……」

「でもね……かあくんは、逃げなかったよね」

「え……？」

カノンは、再び僕の方に顔を向ける。
その表情は、まるで太……

「かあくんは、私にとって太陽だったんだよ？」

「何言ってるんだよ……僕なんて……」

カノンは、うづんつと首を横にふった。

「かあくんの通う高校に転校してきて、私は本当に嬉しかった……」

カノン……

カノンも、そんな風に想っていてくれたのか……

「自分のことは、消極的なクセに、友達のことになると熱くなって……でも、空回りして……」

「空回りは余計だったの」

僕が、的確なツツコミを入れる。
カノンはくすつと笑った。

「でも、私は、そんなかあくんが、好きなんだ……」

「え……」

僕の鼓動は、急激に早くなった。

カノンは、僕のことをじっと見つめる。

こんなに、カノンのことを愛おしく感じたのは、初めてかもしれない。

それぐらい、僕はカノンのことが好きだったんだと、今さらながら思った。

「かあくん……好きだよ……」

ずっと、カノンは僕に近寄り、顔を近づけた。

僕たちのいる駅のホームに、電車が通過した。

僕の唇に、カノンの唇が触れていた。

カノンの唇は、とても柔らかく、とても甘かった。いつまでも、こうしていたかった。

僕は、カノンの事をぎゅっと抱きしめた。
この手を離したくなかった。
カノン……僕は、カノンのことが好きだ。
カノンの全部が好きだ……
もう、泣かせやしない。もう、傷つけやしない。
僕が、カノンを生守るんだ。

- - -
- - -
- - -

やはり、聞き間違いだったみたいだ。
そこに彼女の……カノンの姿はなかった。

電車が来た。

電車の扉が開き、僕は、その電車に乗った。

それでも、声のする方へと、僕は目を向けていた。
学校に向かう学生や、会社に向かう社会人。
様々な人たちが行き交う中、どれだけ探しても、カノンの姿を見つ
けることはできなかった。

汽笛が鳴り、電車の扉が閉まる。

「カノン……」

悲しくなんてない。
寂しくなんてない。

今は、遠く離れてしまっているけど、必ずまた会える。
その時は、ちゃんとしたデートをしよう。一緒に美味しいご飯を食
べて、一緒に遊ぼう。

時には喧嘩もして、時には笑い合って……

あの高校の時のように、修学旅行の時のように……
みんなと笑い合い、騒ごうじゃないか。

電車は、ゆっくりと動き出す。

約束だよ……

必ず会おう……みんなの待つ、あの日のあたる場所で。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4170d/>

あの日のあたる場所で

2010年10月10日01時37分発行